岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第638集

花館跡発掘調査報告書

土地造成事業関連遺跡発掘調査

２０１５

陸前高田市教育委員会
（公財）岩手県文化振興事業団

花館跡発掘調査報告書

土地造成事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、土地造成建設事業に関連して、平成24・25年度に発掘調査を実施した花館跡の成果をまとめたものです。調査の結果、中世城館跡であることが確認され、往時の様々な環境を考える上での貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました陸前高田市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成27年３月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長　菅　野　洋　樹

例　　言

1．本報告書は、岩手県陸前高田市高田町字太田34番地ほかに所在する花館跡の調査成果を収録したものである。

2．遺跡の名称は調査開始時には飯森場遺跡（花館跡）と登録されていたが、発掘調査により中世城館と判明したことから、別称であった花館跡を採用し報告している。

3．岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下の通りである。
遺跡番号：NF67-0294　　遺跡略号：HD-12・HD-13

4．調査は土地造成事業に伴う緊急発掘調査である。陸前高田市教育委員会と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。

5．発掘対象面積、調査期間、調査担当者は以下の通りである。
＜平成24年度＞　面　積：3,650㎡　　期　間：平成24年９月18日～11月29日
担当者：文化財専門員　村木 敬　　期限付調査員　鈴木博之
＜平成25年度＞　面　積：6,050㎡　　期　間：平成25年４月９日～７月11日
担当者：文化財専門員　村木 敬　　任期付調査員　近藤行仁

6．室内整理期間、整理担当者は以下の通りである。
＜平成24年度＞　期　間：平成24年12月４日～平成25年３月29日　担当者：村木 敬・鈴木博之
＜平成25年度＞　期　間：平成25年11月１日～平成26年３月30日　担当者：村木 敬

7．本報告書は、第Ⅰ章は陸前高田市に依頼している。
Ⅱ章２節及びⅦ章３節の執筆については鈴木が執筆している。それ以外の執筆及び全体の編集は村木が行っている。

8．各種鑑定・分析は次の外部機関に依頼した。下記の分析結果はⅥ章に収録している。
遺構デジタル図化・遺構図版編集：株式会社リッケイ
種実・骨貝類同定、放射性年代測定：株式会社　加速器分析研究所
鉄滓成分分析：株式会社　古環境研究所

9．基準杭は、平成24年度調査の際に共立設計株式会社に委託しており、翌年度以降もそれを使用している。座標値は世界測地系を用いている。

10. 野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った（順不同、敬称略）。
岩渕計、曳地隆元、千葉正彦、室野秀文、藤澤良祐、八重樫忠郎、羽柴直人、井上雅孝

11. 野外調査では陸前高田市、遠野市や住田町の方々にご協力いただいた。

12. 本遺跡の調査成果は、調査概報(岩文埋報620・630集)、現地公開などで公表しているが、本報告書の内容はそのいずれよりも優先される。

13. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺　跡　概　観 …… 2

1　遺跡の位置・立地 …… 2

2　歴 史 的 環 境 …… 4

Ⅲ　野外調査と室内整理 …… 6

1　野　外　調　査 …… 6

2　室　内　整　理 …… 7

Ⅳ　基　本　層　序 …… 8

Ⅴ　検出された遺構と遺物 …… 9

1　概　　要 …… 9

2　中世城館の遺構と遺物 …… 9

3　その他の時期の遺構と遺物 …… 54

Ⅵ　自然科学分析 …… 64

1　放射性炭素年代測定 …… 64

2　種実・骨貝類の同定 …… 71

3　出土鉄滓の成分分析 …… 79

Ⅶ　総　　括 …… 86

1　中世城館の遺構と遺物 …… 86

2　自然科学分析について …… 90

3　気仙郡の中世城館にみる歴史的環境 …… 90

4　花館跡にみる歴史的環境 …… 96

報告書抄録 …… 132

図版目次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡周辺図 …… 3
第３図　遺跡分布図 …… 5
第４図　グリッド配置図 …… 6
第５図　縄張り図 …… 10
第６図　遺構配置図 …… 11
第７図　遺構配置図分割（１）…… 12
第８図　遺構配置図分割（２）…… 13
第９図　主郭遺構配置図 …… 15
第10図　１・２号曲輪、１号虎口 …… 17
第11図　１号土塁・１号堀・１号切岸・
　　５号土塁 …… 20
第12図　３号土塁・１号堀・１号切岸、
　　４号土塁・１号堀・２号切岸 …… 21
第13図　５号土塁・１号堀・３号切岸、
　　４号切岸 …… 22
第14図　貝層検出状況、７号切岸 …… 24
第15図　１・２号柵列 …… 25
第16図　１号柵列 …… 26
第17図　２号堀、２・３号土塁 …… 28
第18図　２号曲輪、５・６号切岸、２号溝 …… 30
第19図　１・２号掘立柱建物 …… 31
第20図　１・２号鍛冶炉 …… 33
第21図　３～５号鍛冶炉 …… 34
第22図　１号性格不明遺構、２～４号土坑 …… 36
第23図　５～８号土坑、１～５号焼土 …… 37
第24図　１・６号溝 …… 39
第25図　３～５号溝 …… 41
第26図　柱穴分割図（１）…… 42
第27図　柱穴分割図（２）…… 43
第28図　柱穴分割図（３）…… 44
第29図　柱穴分割図（４）…… 45
第30図　出土遺物（１）…… 46
第31図　出土遺物（２）…… 47
第32図　出土遺物（３）…… 48
第33図　出土遺物（４）…… 49
第34図　出土遺物（５）…… 50
第35図　出土遺物（６）…… 51
第36図　出土遺物（７）…… 52
第37図　出土遺物（８）…… 53
第38図　１・２号住居状遺構、１号土坑 …… 56
第39図　出土遺物（９）…… 57
第40図　出土遺物（10）…… 58
第41図　Ⅰ期遺構配置図 …… 88
第42図　Ⅱ期遺構配置図 …… 89
第43図　城館分布図（１）…… 92
第44図　城館分布図（２）…… 94

表　目　次

第１表　遺跡一覧 …… 5
第２表　柱穴観察表 …… 59
第３表　陶磁器観察表 …… 61
第４表　石製品観察表 …… 63
第５表　鉄製品観察表 …… 63
第６表　土器観察表 …… 63
第７表　城館一覧 …… 93

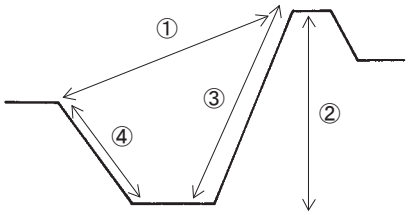
写真図版

写真図版１　空中写真（昭和20年代）…… 101
写真図版２　空中写真（昭和40年代）…… 102
写真図版３　遺跡遠景（１）…… 103
写真図版４　遺跡遠景（２）…… 104
写真図版５　遺跡遠景（３）…… 105
写真図版６　調査区全景 …… 106
写真図版７　出土遺物 …… 107
写真図版８　１号土塁 …… 108
写真図版９　２・３号土塁 …… 109
写真図版10　３号土塁 …… 110
写真図版11　４号土塁 …… 111
写真図版12　５号土塁 …… 112
写真図版13　１号堀西辺 …… 113
写真図版14　１号堀南辺 …… 114
写真図版15　２号堀 …… 115
写真図版16　１号切岸 …… 116

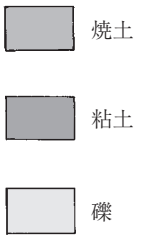
写真図版17　２・４号切岸 …… 117
写真図版18　４・５号切岸 …… 118
写真図版19　６号切岸、１号虎口 …… 119
写真図版20　主郭・２号曲輪 …… 120
写真図版21　１・２号柵列 …… 121
写真図版22　１・２号掘立柱建物、１～４号
　　鍛冶炉 …… 122
写真図版23　３～５号鍛冶炉、１号性格不明遺構、
　　２・３号土坑 …… 123
写真図版24　４～７号土坑、１・３号溝 …… 124
写真図版25　３・４・６号溝、貝層 …… 125
写真図版26　貝層、１・２号住居状遺構、
　　１号土坑 …… 126
写真図版27　各遺構の現況（１）…… 127
写真図版28　各遺構の現況（２）…… 128
写真図版29　出土遺物（１）…… 129
写真図版30　出土遺物（２）…… 130
写真図版31　出土遺物（３）…… 131

凡　　例

本書における遺構図の凡例は、以下のとおりである。



① 実効堀幅　② 垂直塁壁高
③ 実効法高　④ 外壁法高



Ⅰ　調査に至る経過

調査は東日本大震災・津波による罹災者が住宅再建を行うための、土地造成に伴う緊急発掘調査である。平成23年10月５日、陸前高田市高田町字太田地内へ、東日本大震災・津波によって家屋を失った罹災者が、集団で移転を希望しており、移転に係る設計業務等を担当する共立設計株式会社から、当該地に係る埋蔵文化財の有無の照会があった。相手方に、当該地の一部は周知の遺跡である飯森場遺跡（花館）の範囲であることから、開発には文化財保護法の手続きが必要であることを回答した。平成24年４月20日付で、高田町字太田34、35と高田町字太田31、32における文化財保護法第93条発掘の届出が、罹災者であるそれぞれの地権者より提出されたことを受け、陸前高田市教育委員会が現地踏査を実施したところ、飯森場遺跡（花館）の当時の範囲からは外れてはいたが、開発予定地となっている丘陵に空堀、土塁、平場等らしき施設を目視できたことから、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導を受け、取扱いの検討を行うこととした。再度、現地踏査を実施し、開発予定地には、空堀、土塁、平場を確認した部分は城館の主体部であり、旧来の遺跡範囲を超えて城館としての諸施設が明瞭に確認できることから、開発に当たっては、記録保存の本発掘調査が必要であると判断し、地権者と共立設計株式会社にその旨を回答した。相手方は、当該地が開発予定地として移転希望者に強く望まれていることから、開発予定箇所の変更は考えられないとし、平成24年５月15日付陸高教生第45号、46号により文化財保護法第93条の発掘の届出を県に進達し、平成24年５月17日付教生第3-61号、3-62号で発掘調査の実施が勧告された。地権者へは、平成24年５月24日付陸高教生第58号、59号で伝達している。発掘調査にあたり当市では、罹災者の個人住宅対応調査が立て込んでいること、発掘調査面積が大規模である等の理由から、検討の結果、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに調査を委託できるように、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課に調整を依頼することとし、その結果、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに当市が委託することとなった。

（陸前高田市教育委員会）

Ⅱ　遺　跡　概　観

1　遺跡の位置・立地

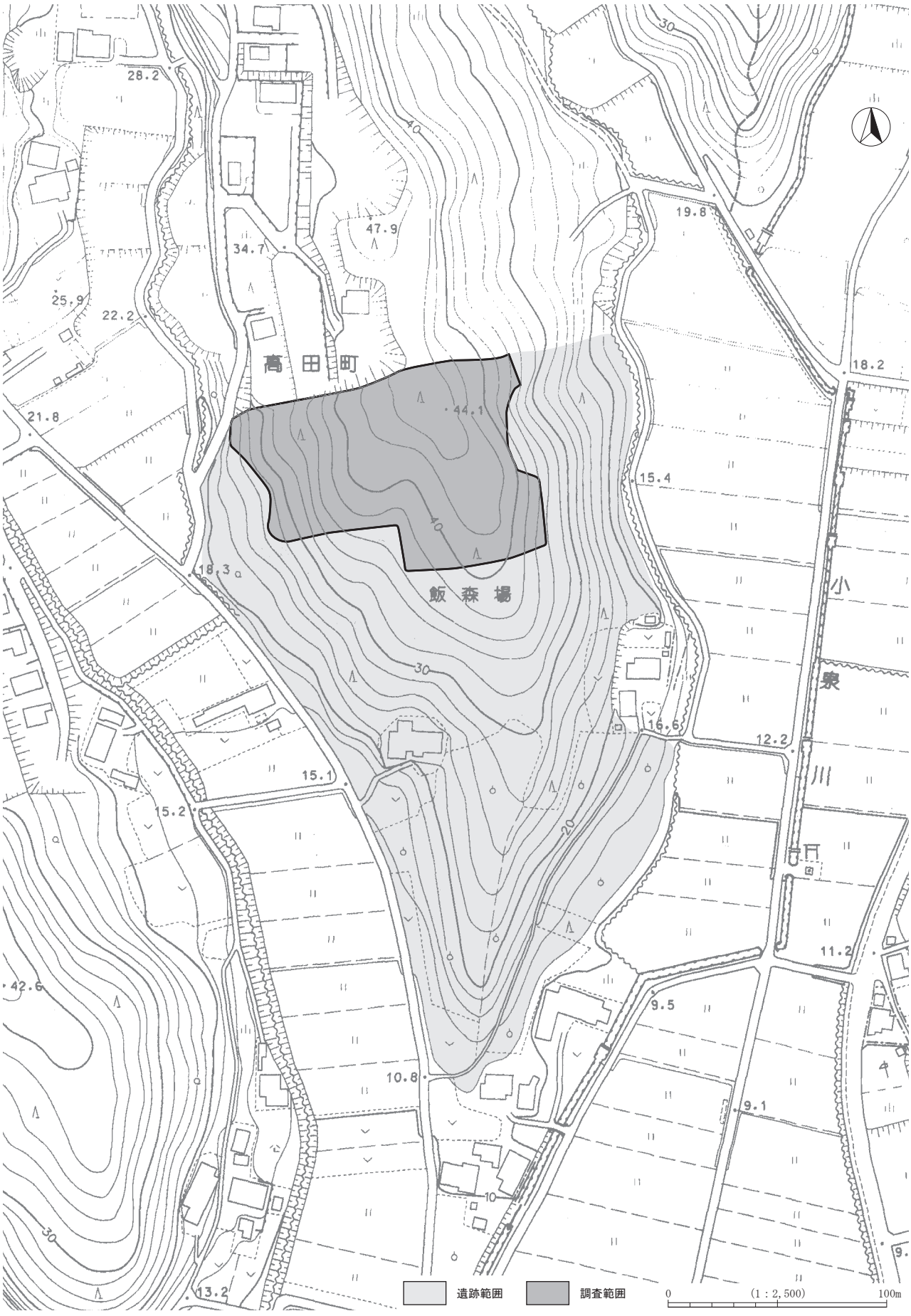
花館跡は、陸前高田市高田町字太田34番地ほかに所在しており、高田城の東方約1.3㎞に位置している。遺跡は氷上山から南に延びる標高42m前後の丘陵の先端に形成され、西側には川原川、東側には小泉川が流れている。

陸前高田市は、南部北上山地の南東に位置している。その地形は、北上山系の一つである氷上山が市の北側にそびえており、その南側に広田湾がある。氷上山と広田湾の間には陸前高田平野が広がり、やや西側に気仙川が流れている。この平野は発達が小規模であることから、氷上山から延びる丘陵が幾つも迫り出している。遺跡はその丘陵の一つに立地しており、眼下に陸前高田平野と広田湾を眺望できる土地にある。

このような土地が形成されているなかで、今回の調査原因となる東日本大震災に伴う津波により陸前高田平野は壊滅的な状況となり、海岸線より直線距離で約1.5㎞内陸に位置する遺跡の麓（標高約16m）まで津波が押し寄せていることが確認されている。

遺跡は、国土地理院発行の1：50,000「盛」（NJ-54-14-6）の図幅に含まれ、北緯39度１分13秒、東経141度38分37秒付近にある。

第 1 図　遺跡位置図



第２図　遺跡周辺図

2　歴 史 的 環 境

陸前高田市内には、平成23年度時点で260カ所の遺跡が確認されている（註１）。このうち、本遺跡を中心とした東西約２㎞、南北約1.5㎞の範囲（陸前高田市高田町及び同市米崎町。以下、町名のみで記載する。）に分布する周知の遺跡46カ所を第３図と第１表に示している。

気仙地域は明治時代から貝塚調査が行われ、考古学・人類学の研究において重要な地域として認識されてきた。当市においても、人骨23体が発見された中沢浜貝塚（広田町、第２図外）が1934年に国史跡、隣接する大船渡市の蛸の浦貝塚と下船渡貝塚も同年に国史跡に指定されている。また、1970年に行われた学術調査により貝層が確認された牧田貝塚（気仙町、第２図外）や、平成24年度に震災復興関連事業による発掘調査が行われた堂の前貝塚（米崎町、第２図外）など、多くの貝塚調査が行われている。なお、当センターでは1994年に牧田貝塚の発掘調査を行っており、縄文時代前期の集落跡が検出されている（岩埋文1996）。本遺跡の周辺では、貝畑遺跡（10）と川内遺跡（42）が縄文時代の遺跡として確認されている。貝畑遺跡は中期の集落（陸前高田市教育委員会1985、1998）、川内遺跡は中期～晩期、弥生時代を中心とした集落（岩埋文1984、陸前高田市教育委員会2003）として報告されている。

上記のように、当市では貝塚を中心とした縄文時代の調査研究に重点が置かれていたが、近年には奈良・平安時代の遺跡も複数調査され、当地域を研究する上で重要な資料が報告されている。貝畑遺跡（10）では奈良時代の竪穴住居が検出されており、これは当地域における初めての確認とされる（陸前高田市教育委員会1998）。その後、松山前遺跡（小友町、第２図外）では奈良時代の集落跡が確認されている（岩埋文2006）。また、本遺跡の東側にほぼ隣接する小泉遺跡（２）では、「厨」などと墨書された土師器・須恵器が遺物包含層から112点出土している（佐藤2004）。これら墨書土器の年代は８～９世紀代とされ（八木2004）、小泉遺跡の性格に関しては、官衙的機能を有した施設との関連性が指摘されている（佐藤2004、村木2004）（註２）。

中世には、当地域においても各地に城館が見られるようになる。陸前高田市内には55カ所の城館跡が確認されており、これらのほぼ全てが近世の記録や伝承などによって伝えられるものである（岩手県教育委員会1986）。このうち、発掘調査が行われたものとしては、矢作町の古館と片地家館（ともに第２図外）がある。古館（岩埋文1988）では堀跡、平場、犬走り状の遺構、掘立柱建物が検出されているが、片地家館（岩埋文1989）では城館に伴う遺構は確認されていない。本遺跡を含めた当地域における城館跡の詳細は後述することとし、以下には中世の気仙郡について概観する。鎌倉時代前期の当地域における支配構造については明瞭さを欠くが、気仙の豪族である金為俊が源頼朝より気仙に所領を賜ったという記録が残る。また、奥州合戦以降に胆沢郡・磐井郡ほかを拝領したとされる葛西氏の所領に組み込まれ（註３）、鎌倉時代後期には葛西家臣である千葉氏が定着して支配することとなる。南北朝～戦国期には葛西氏や千葉氏一族、金氏等による争乱が度々勃発している。やがて戦国末期においては、千葉氏一族である浜田安房守の乱が大きな要因となり、葛西氏の滅亡を招くこととなる。葛西氏滅亡後の当地域は伊達氏の所領となり、近世を迎える。

註　参考文献についてはⅦ章まとめの最後にまとめて記載しておく。

（１）　岩手県遺跡情報検索システム（平成23年度データ）による。

（２）　2003年８月に開催された法政大学国際日本学研究センター・法政大学国際日本学研究所主催による国際日本学サテライトシンポジウム「海の蝦夷―小泉遺跡が語りかけるもの―」において、小泉遺跡に関する様々な面からの討論がなされている。この内容については『法政大学国際日本学研究所研究報告』第４集にまとめられている（法政大学国際日本学研究所2004）。

（3）　『陸前高田市史第３巻　沿革編（上)』では、気仙郡及び本吉郡は当初から葛西氏の拝領したものではなく、のちに所領の中に取り入れられたものと考察している（陸前高田市1995)。

第３図　遺跡分布図

第１表　遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	花館(飯森場)	中世	17	栃ケ沢		33	松峰Ⅱ	
2	小泉	平安	18	鳴石	縄文	34	神田Ⅱ	奈良･平安
3	太田		19	山苗代		35	脇沢館(島崎城)	中世
4	中和野Ⅰ		20	豆の通		36	川西	縄文
5	中和野Ⅱ	縄文	21	荒沢Ⅰ		37	佐野Ⅰ	縄文
6	中和野Ⅲ	縄文	22	荒沢Ⅱ	縄文	38	佐野Ⅱ	縄文･弥生
7	西和野Ⅰ	奈良･平安	23	大隅Ⅰ		39	佐野Ⅲ	縄文
8	西和野Ⅱ	縄文	24	大隅Ⅱ	縄文	40	佐野Ⅵ	奈良･平安
9	小森前	縄文	25	地竹沢Ⅰ	縄文･奈良･平安	41	佐野Ⅴ	奈良･平安
10	貝畑	縄文	26	地竹沢Ⅱ	奈良･平安	42	川内	縄文･奈良･平安
11	西和野	縄文	27	野沢Ⅰ	縄文･奈良･平安	43	川向	縄文
12	下和野		28	野沢Ⅱ	縄文･奈良･平安	44	中陣(高木城･日高城)	中世
13	古泉館(東館)	中世	29	野沢Ⅲ	奈良･平安	45	中島Ⅱ	
14	洞の沢		30	中山館	中世	46	米崎城(浜田城)	中世
15	八幡館(高田城)	中世	31	川崎				
16	西館	奈良･平安	32	松峰Ⅰ	奈良･平安			

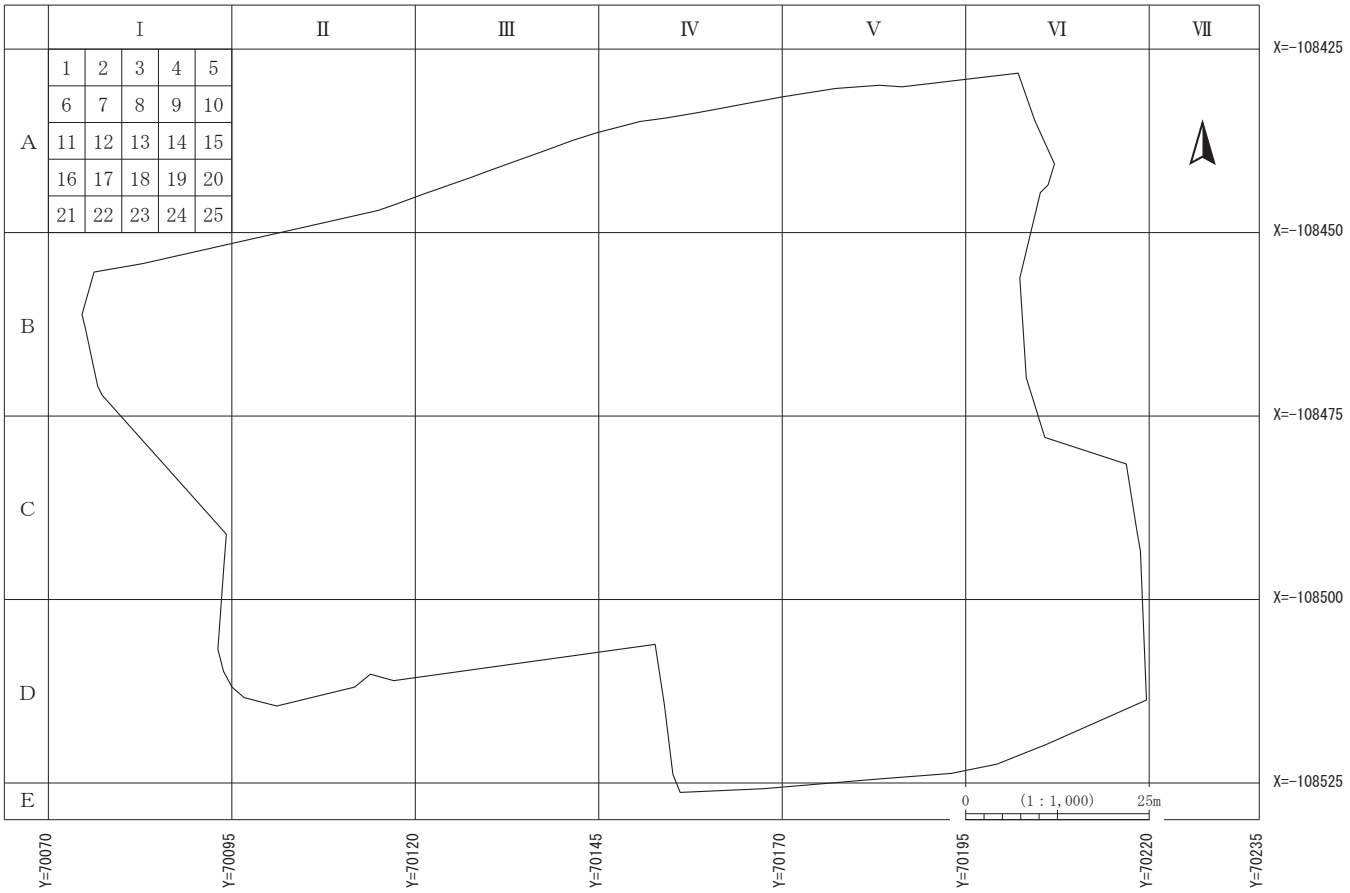
Ⅲ　野外調査と室内整理

1　野　外　調　査

調査区は、配置図に示したように大グリッドは西から東に向かってⅠ～Ⅴ、北から南に向かってA～Dと設定した。大グリッドは１辺が25m、小グリッドは各辺を５等分して１辺が５ｍに組み、小グリッドの北西隅を１、北東隅を５、南東隅を25と付している。各グリッドは北西隅の杭名称による。

野外調査は、任意にトレンチを複数箇所に設定して、遺構検出面の確認を行った後、重機で検出面まで掘り下げた。遺構確認は鋤簾と両刃鎌を用いプランを把握し、検出遺構は通常の精査を行っている。それらの記録は台帳や野帳に記録している。遺構実測は、平面は「遺構くん」（CUBIC製）、断面及び微細図はデジタルカメラで撮影して図化している。また、遺跡全体の地形測量については航空測量により図化している。写真撮影は一眼レフデジタルカメラ、６×4.5㎝を用いている。

調査は平成24年９月18日から調査開始。19日から雑物撤去を行った後に、現況を撮影している。そして24日以降からは、重機を用い１号曲輪の表土除去を行う。これと平行して２号曲輪と６号切岸に対しトレンチを入れている。２号曲輪精査終了後に、１号曲輪の検出、２号堀、１～３号土塁の検出作業を行っている。これらの作業工程中に10月５日と11月９日に委託者・県教育委員会・当センターにより部分終了確認を行い、950㎡と2,700㎡を引き渡す。その後は主郭・副郭の遺構検出を進めてい



第４図　グリッド配置図

る。11月12日に空撮をしている。11月19日に委託者・県教育委員会・当センターにより終了確認を行う。11月22日に現地公開を行う（参加者約20名）。11月29日に撤収し、平成24年度分の調査を終了している。

平成25年４月９日から調査開始。11日より遺構検出を行い、23日から１号堀西辺の精査を行う。それ以降、５月中は１号堀南辺、４号切岸、６月より主郭に形成された遺構の精査を進めている。全体の遺構が把握できたことから、６月15日に現地説明会を行う（参加者約110名）。６月20日に空撮をしている。６月25・26日には盛岡市教育委員会の室野秀文氏により現地指導が行われる。委託者・県教育委員会・当センターにより６月18日に部分終了確認、７月11日に終了確認を行う。11日に撤収し、全ての作業を終えている。

（平成25年度現地説明会）

２　室　内　整　理

室内整理は、平成24・25年度の２カ年で行っている。作業工程と掲載基準は以下の通りである。

出土遺物は注記・接合復元を行った後、掲載遺物を登録している。

遺構図版作成は、野外調査においてデジタル実測で取得した断面データと、電子平板「遺構くん」で取得したデータを、委託業務において合成・編集作業を行い、図版を作成している。複数回の校正を重ね、版下への工程を経ている。

遺構・遺物写真図版は共に、デジタルカメラで撮影したものをそのまま入校している。

遺物実測については、陶磁器類が中心となるが点数も少ないため小破片でも積極的に図化している。各遺物の縮尺は以下の通りである。国産陶器・中国産磁器、近世陶磁器・縄文土器は1/3、鉄製品・土製品・石製品・銭貨は1/2～1/4で掲載している。

Ⅳ 基 本 層 序

遺跡では遺構検出面（Ⅲ～Ⅵ層）より上位の土壌は殆ど発達していないが、層序は７層に分けられる。しかし、これらは層序関係の全てを確認できる場所が無いため、地点ごとに観察した成果をまとめたうえで記載している。

Ⅰ層：暗褐色～灰黄褐色土（10YR3/4～4/2）粘性、しまり共になし。層厚は５～20㎝。基本的には遺跡全体を覆っているが、斜面では堆積しない箇所もある。

Ⅱ層：黒褐色土（10YR3/2）粘性、しまり共にやや強い。層厚は10㎝前後。主郭の西側に位置する切岸において見ることができるが、他では削平されているため確認できていない。そこではⅢ層の上に形成されていることからおそらく縄文・弥生土器などを含む層であると思われる。

Ⅲ層：灰黄褐色土（10YR4/2）粘性やや強く、しまり強い。層厚は20㎝前後。

Ⅳ層：褐色土（10YR4/4～4/6）粘性、しまり共に強い。層厚は20～50㎝。細かな礫を多く含む。主郭の西側の斜面で確認できる層である。

Ⅴ層：にぶい黄褐色～にぶい黄橙土（10YR5/3～6/4）粘性、しまり共に強い。層厚は不明。上層に比べやや粘土化が発達する。丘陵頭頂部、主郭や副郭の一部分でのみ堆積しており、斜面ではあまり発達していない。

Ⅵ層：明黄褐色土（10YR6/6）粘性、しまり共に強い。粘土。丘陵頭頂部、主郭部分で確認できている。本層は岩盤に至るまで約1.5～２ｍを測る。

Ⅶ層：岩盤。層厚不明だが、２ｍ以上の深さを確認している。堀は岩盤まで掘り込んでいる。

Ⅴ　検出された遺構と遺物

１　概　　要

今回の調査からは中世城館に伴う遺構と遺物が検出されている。また、それ以外の時期の遺構と遺物が少量ながら確認されている。これらの中世以前の遺構は、城館構築時にその多くが削平されたものと考えられる。

弥生時代：住居状遺構２棟。土器5,363.2g、石器３点。
古　　代：土師器２点、須恵器２点。
中　　世：主郭、副郭、曲輪２箇所、堀２条、土塁５基、切岸６箇所、虎口１箇所、柵列２条、
溝６条、掘立柱建物２棟、鍛冶炉５基、性格不明遺構１基、土坑７基、焼土５基、
柱穴81個。
国産陶器96点、中国産磁器19点、刀子２点、砥石３点、茶臼６点、坩堝３点、
鉄滓２点、粘土塊８点。
近　　世：近世陶磁器111点、鉄製品１点。
時期不明：土坑１基。

なお、調査範囲外にも城館に伴う遺構は広がっており、曲輪、土塁、堀、虎口などが確認されている。それらについては縄張図にまとめている。

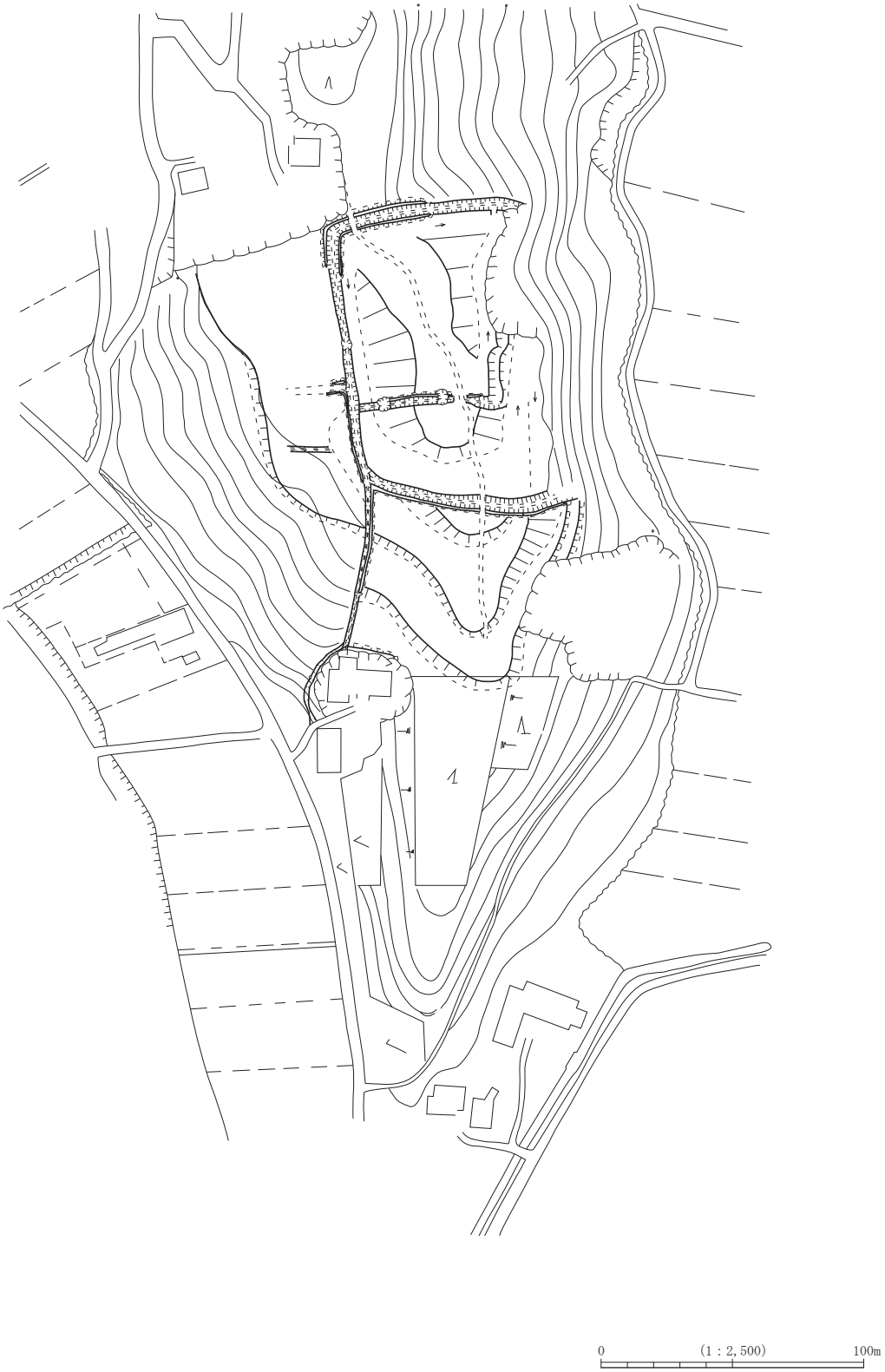
２　中世城館の遺構と遺物

今回の調査により検出された遺構は概ね城館に伴うものである。以下には中世に属する城館の概要とそれに伴う遺構と遺物について記載していく。

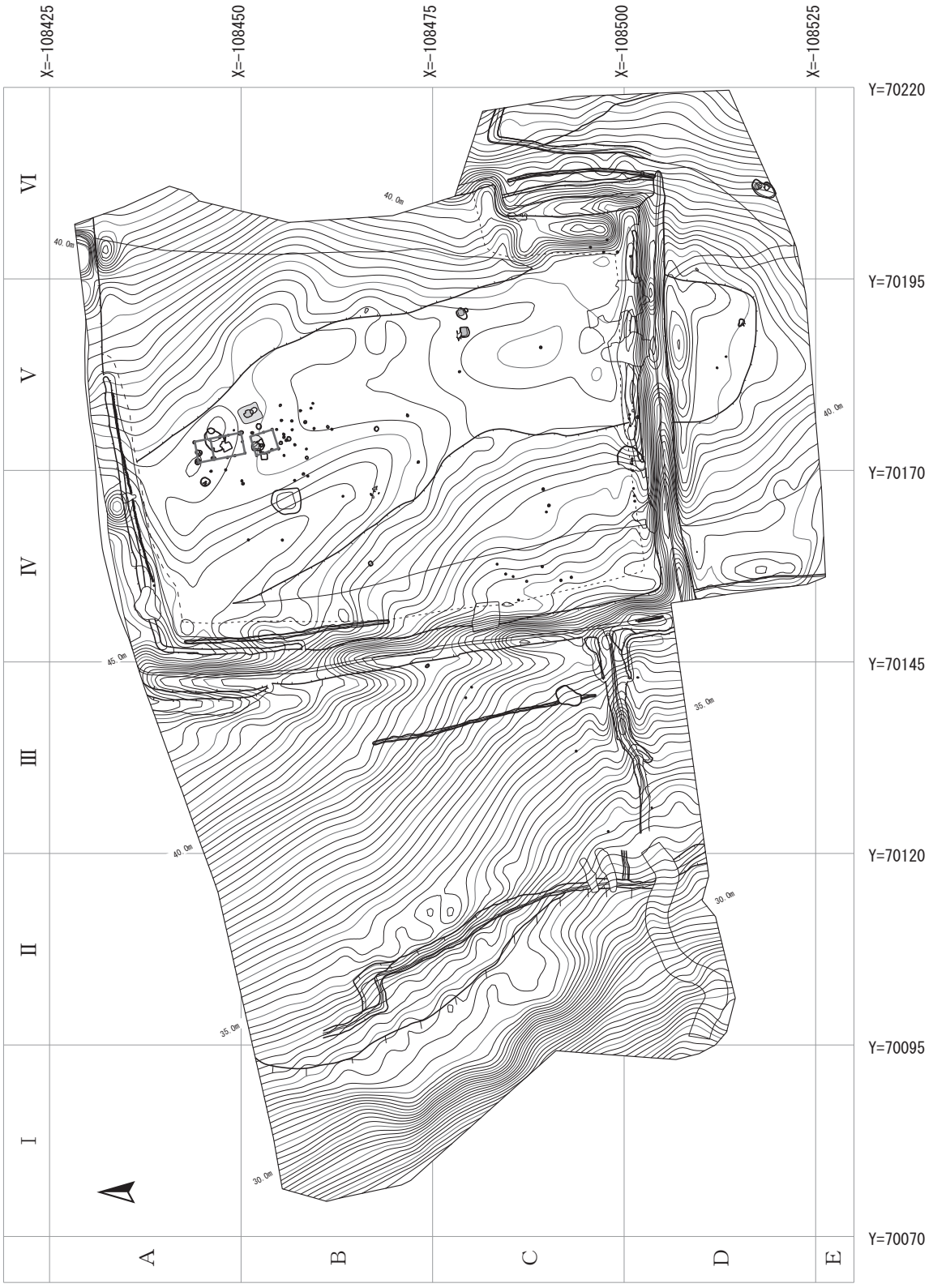
花館の縄張

花館跡は、氷上山から陸前高田平野へと延びる丘陵の先端に立地している。前方は遮るものがなく、陸前高田平野と広田湾を見下ろす、眺望の良い場所である。城館は、北・南・西側を堀と土塁などを廻らし尾根を２カ所で断ち切っている。東側は崩落しているため、当時の地形が捉えられず構造については判然としない。ただし、遺構が延びていくような様相が捉えられないことから、自然地形であった可能性がある。総面積は約4.5万㎡である。

館の中心となる主郭は尾根の頭頂部に造られ、隣接する南側には副郭、標高を下げた西側の斜面には１・２号曲輪を配置している。南側に限っては、尾根先端部へ向け、さらに複数の曲輪が構築されている。突端部の構造については、後世に改変されている可能性があることから判然としない。この館には、虎口が２箇所設けられており、主郭の南東隅と北東隅にある。大手口は尾根の南西側、住宅の裏から副郭の南西隅へと真っ直ぐ延びる縦堀である。これに対し、搦手口は主郭北東隅の虎口が相当するが、これらが何処に通じているかは踏査から把握できていない。地形図から見ていくと北東側の山道が対応する可能性があるものの、この点についてはあくまでも想像の域をでるものではない。また、館の中央を走る山道は後世に造られたのものと捉えており、当時の様相を反映していないものと思われる。本城館には、堀や土塁の跡などを確認できているものの、掘立柱建物、鍛冶炉などの遺



第５図　縄張り図



0 (1：800) 20m

第６図　遺構配置図

第７図　遺構配置図分割（１）

第８図　遺構配置図分割（２）

構と出土遺物が少ないことから、日常的な生活空間ではなく非常時に利用されていたと考えられる。

この館の城主は、浜田胤長と小泉能登守という説がある。両者については文献や標柱にて確認できているが、その経緯は確認できないため判然としないのが現状である。後述するが、出土遺物の大半は15世紀から16世紀にかけての国産陶器や中国産磁器などが出土している。さらに、各遺構の年代測定結果からも、構築年代が15世紀後半から16世紀代と捉えられる。よって本城館は、15世紀代に築城されて以降、長期間にわたって型を変えながら機能していたものと考えられる。このようななかで伝承とされる両武将が城主であった可能性も十分に残されている。

主郭

［位置・地形］ ⅣＡ～Ｃ、ＶＡ～Ｃグリッドに位置しており、標高42～44mの丘陵頭頂部に構築されている。頭頂部の平坦面からは東西へと緩やかに下り、さらにその下位にはそれぞれ幅が狭く細長い緩斜面が形成されている。その緩斜面は対をなしており、西側が北から南、東側が南から北へと下るようになっている。**［規模］** 規模は南北約65m×東西約55m、面積は約3,660㎡である。頭頂部の平坦面は面積が約1,630㎡であり、主郭の約半分を占める。**［堆積土］** Ⅰ層が５～20㎝の厚さで堆積しており、基本的にその直下が検出面（Ⅴ層）である。**［普請］** 頭頂部は削平により構築されているが、各縁辺部（北辺約38m、西辺約66m、南辺約50m、東辺約24m）に対して版築を施し整地している。それらの上位に土塁などの遺構が形成されている。**［作事］** 掘立柱建物２棟、土坑５基、鍛冶炉４基、性格不明遺構１基、溝１条、柵列21箇所、柱穴、焼土遺構などが確認されている。**［遺構配置］** 東辺を除いた３辺が堀によって囲まれており、コ字状となるように配置されている。その内側の北西隅（５号）と南端（４号）に土塁が残存している。それらの土塁は、斜面下方に至る途中で収束している。堀の堆積土から見ていくと、おそらくそれらは南東へと延び、堀と同様の配置をしていた可能性がある。頭頂部の南東隅には虎口が設けられており、その脇には平場が形成されている。さらに、調査区外の北東隅には虎口があり、１号堀北辺に通じている。また、４・５号土塁や版築の直下からは、１・２号柵列、６号溝を確認している。それらは接していないものの、大きく捉えればコ字状となるように配置されている。また、掘立柱建物や鍛冶炉、土坑などの遺構は頭頂部北側を中心に形成されている。**［遺物］** 上記の遺構から常滑産陶器を中心に、中国産磁器などが出土している。それらについては46～50頁に掲載している。**［備考］** 遺構の重複関係と放射性炭素年代測定結果（64頁参照）からは、主郭内部を２時期に分けることができる。

副郭

［位置・地形］ Ⅳ～ⅥＤグリッドに位置しており、標高36～41.5mの丘陵頭頂部先端に構築されている。１号堀南辺を挟み、主郭の南側と７号切岸の西側に形成されている。主郭より続く頭頂部の先端である平坦面から北以外の三方に斜面があり、その下位には標高差が認められるものの馬蹄状に平坦面が広がる。**［規模］** 規模は調査区外含めて東西約72m×南北約35m、面積は約2,660㎡である。ただし、東側は比較的広い平坦面が認められ、曲輪の端は長さが約60mある。頭頂部の平坦面の面積は約320㎡あり、副郭に伴う帯曲輪の面積は約2,340㎡である。**［堆積土］** Ⅰ層が５～20㎝の厚さで堆積しており、その直下が検出面（Ⅴ層）である。**［普請］** 頭頂部付近は削平により構築されているが、東側の斜面は自然地形を利用している。**［作事］** 鍛冶炉１基、焼土遺構１基、溝３条が確認されている。**［遺構配置］** ３条の溝が、４号切岸の下位にそれと平行するように配置されている。鍛冶炉などの遺構は頭頂部に形成されている。**［遺物］** 出土遺物は主郭に比べて少なく、陶磁器類はいずれも近世で

Ⅳ
Ⅴ
Ⅵ
A
B
C
D
E
3号切岸
5号土塁
1号土塁
1号堀
1号切岸
版築
主郭
版築
4号切岸
4号土塁
2号切岸
1号堀
7号切岸
副郭
0
(1：600)
20m

第９図　主郭遺構配置図

ある。

１号曲輪

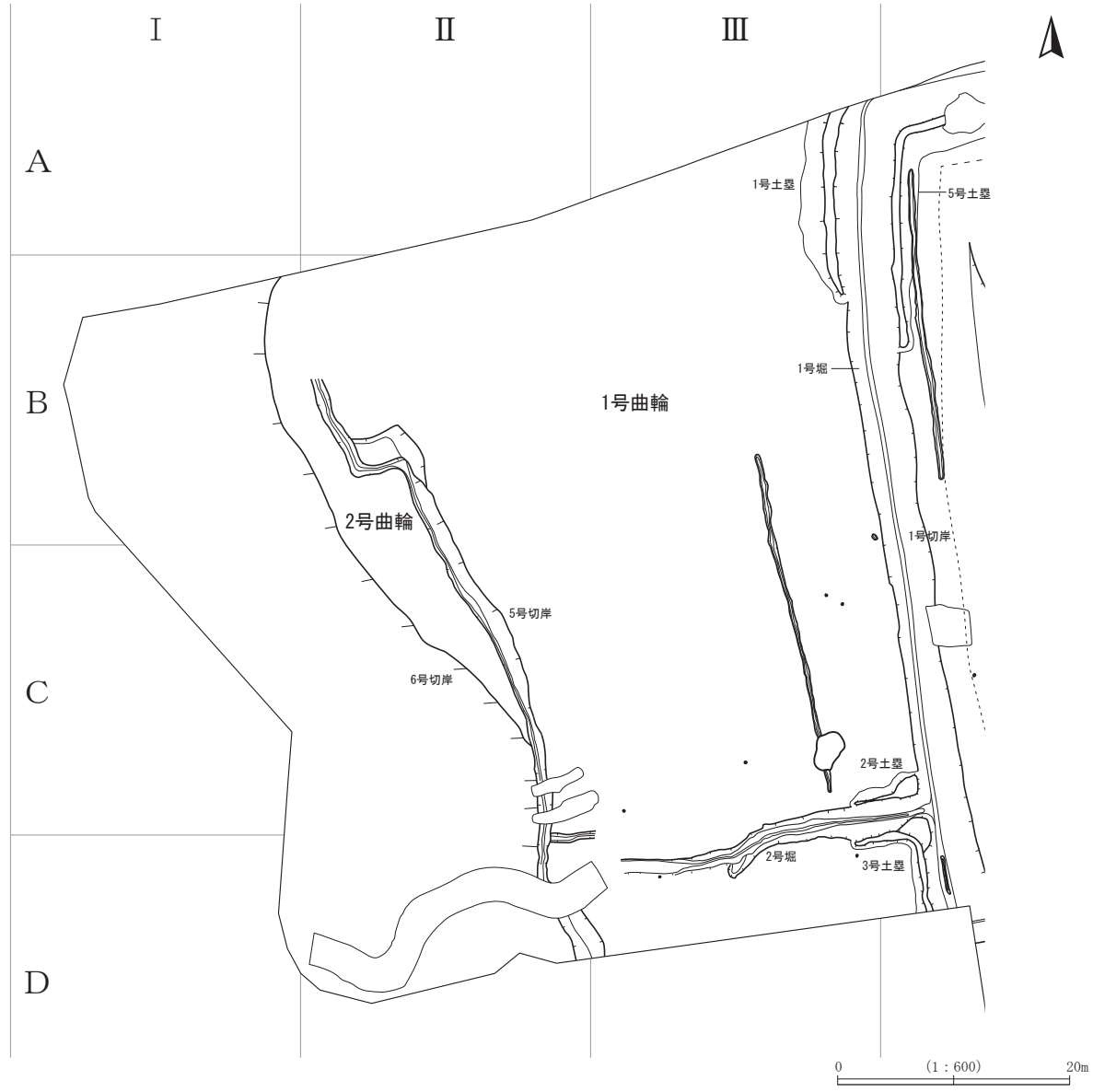
［位置・地形］ⅡＢ・Ｃ、ⅢＢ・Ｃグリッドに位置しており、標高34～43.5mの丘陵西斜面に構築されている。主郭の西側、１号堀と５号切岸の間にある。丘陵の西側に広がる緩斜面であり、自然地形を基本的に大きく残している。［規模］規模は確認できた範囲で南北約65m×東西30～40m、面積は約2300㎡ある。本曲輪はさらに南側へと広がるため、今回提示した面積よりは大きくなる。［堆積土］Ⅰ層が10～20㎝の厚さで堆積しており、その直下が検出面（Ⅴ層）である。［普請］普請は認められず、基本的に自然地形を利用している。［作事］溝１条、土坑１基と柱穴が確認されている。ただし、土坑と柱穴の所属時期については判然としない。［遺構配置］竪堀は１号堀と直交しており、直交する両脇には２・３号土塁が配置されている。また、北東隅には１号堀と平行して１号土塁が僅かに残存している。さらに、１号堀と平行するように溝が形成されている。［遺物］陶磁器や弥生土器などが僅かながら出土している。［備考］このような竪堀と土塁の存在から、虎口や排水、区割りとして用いたのではないかという教示を頂いているが、いずれも明確な根拠が得られていないことからその機能については判然としない。よって、本曲輪の機能についても同様に判然としないのが現状である。

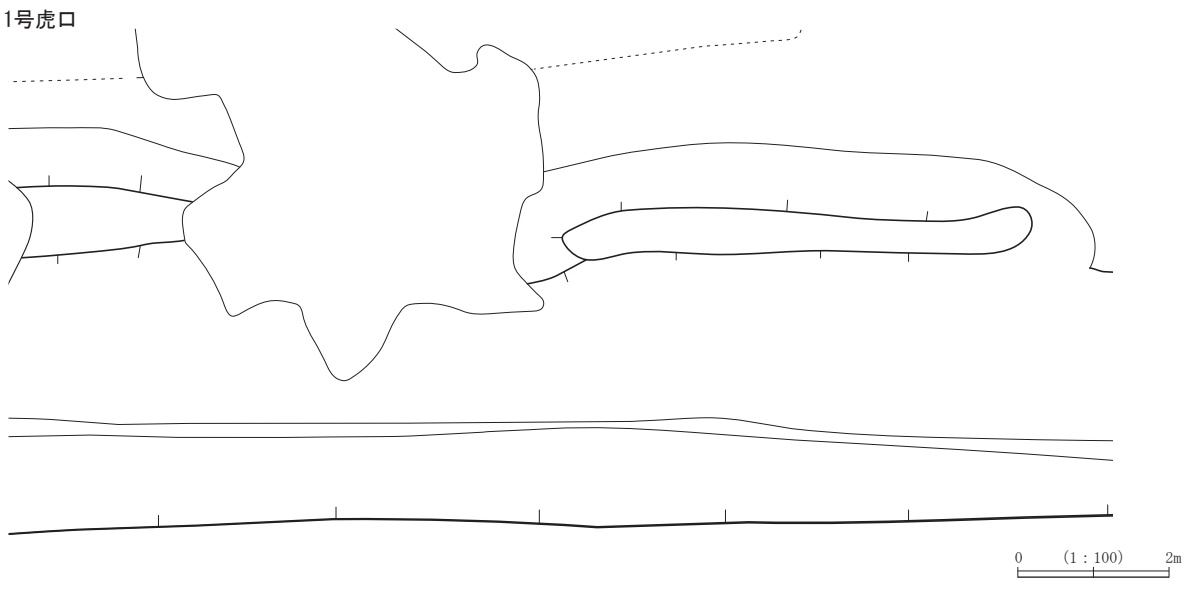
２号曲輪

［位置・地形］ⅡＢ・Ｃグリッドに位置しており、５号切岸の西側、標高34～42mの丘陵西斜面に構築されている。［規模］規模は南北約45m×東西３～６m、面積は約180㎡ある。［堆積土］Ⅰ層が５～10㎝の厚さで堆積しており、その直下が検出面（Ⅲ・Ⅳ層）である。［普請］削平により平坦な面が構築されている。［作事］溝１条が確認されている。［遺構配置］５号切岸の下位にそれと平行するように配置されている。［遺物］陶磁器や鉄滓などが出土している。［備考］本曲輪の機能については判然としない。

１号虎口

［位置］ＶＤ５グリッドに位置しており、主郭の南東側に形成されている。標高は42mである。［規模］確認できた土塁の上端間は約5.0mである。［普請・作事］地山が大きく削平されているため、その構造は判然としない。ただし、５号土塁の上端が丸味を帯びて収束することと、主郭南東隅の版築による方形状の平場（約100㎡）が形成されていること、さらに主郭に普請された遺構の配置などから見ていくと、本遺構が虎口である可能性が十分に考えられる。ただし、周辺で版築を切る柱穴を検出しているが、門跡等は認められない。［遺物］出土していない。［備考］この直下に形成されている１号堀南辺の深さは、他と比べて1.5mと極端に浅い。この深さからは防御機能の低さが想定されることから、その存在を裏付けていく根拠となろう。





第10図　１・２号曲輪、１号虎口

主郭を囲む１号堀は、１～４号切岸、１・４・５号土塁と共に構築されていることからまとめて記載していく。

１号堀

［位置］Ⅲ～ⅥＡ、ⅣＢ・Ｃ、Ⅳ～ⅥＤグリッドに位置しており、主郭の東側を除く箇所に構築されている。標高は37.5～42.7ｍである。［規模］主郭の北・南・西辺に形成された堀であり、コ字状を呈している。検出した長さは、北辺約59ｍ、南辺約56ｍ、西辺約70ｍである。西辺は、副郭の西側にある７号切岸上端へと繋がり、上端だけならば全長約90ｍを確認していることになる。さらに、この堀は大手まで延びており、総延長は約160ｍである。実効堀幅は3.3～5.0ｍである。実効堀幅は１号切岸と２号堀との間、１号・５号土塁との間が広く、４号土塁との間はやや狭くなる。実効堀高は１号切岸を挟んだ５号土塁西側が3.6～3.8ｍ、主郭南東隅付近が4.0ｍ、２号切岸を挟んだ４号土塁南側が4.3ｍであり、土塁が認められない箇所では当然それより低くなる。外壁法高は１号土塁東側が2.5ｍ、３号土塁東側が1.6ｍ、１号堀南辺中央が2.5ｍである。場所によりその差が認められているものの、全体の傾向として１号堀南辺が深く、西辺はそれに比べると浅くなる。また、虎口付近も1.5ｍと比較的浅い。このように外壁法高は各辺の中でも大きく異なる。それに伴い底面標高も各辺で差が認められている。北辺は西端が高く東端が低い（比高約５ｍ）。西辺は北端が高く南端が低い（比高約5.5ｍ）。南辺は頭頂部付近が高く東・西端が低い（比高約1.5ｍ・約３ｍ）。断面形は逆台形をした薬研堀である。軸線は、北辺がN-82°-E、南辺がN-86°-E、西辺がN-６°-Wである。［堆積土］褐灰・にぶい黄褐色土などである。下層では礫を多く含む層や岩盤崩落土層が確認されている。堆積は自然に埋没したものと思われる。西辺や南辺では、土塁に用いられた土と類似した土が認められることから、崩落した土が含まれている可能性が十分に考えられる。［普請］地山（Ⅲ～Ⅵ層）を掘り込んで構築されている。［遺物］本遺構の南側の埋土中からは陶磁器や石製品などが出土している。［備考］作事の痕跡は認められない。

１号切岸

［位置］ⅣＡ～Ｄグリッドに位置しており、主郭の西側、５号土塁と１号堀西辺の間に構築されている。標高は39～44ｍである。［規模］南北方向に延び、全長は約66ｍである。実効法高は５号土塁付近で3.8ｍ、主郭南東隅付近で4.0ｍである。傾斜角度は40～45°である。土塁の有無に関わらず、法高や傾斜角度には差が認められない。［普請］地山（Ⅳ～Ⅵ層）を削平し、版築を施して普請している。［遺物］南側の埋土中から陶磁器が出土している。［備考］作事の痕跡は認められない。

２号切岸

［位置］Ⅳ～ⅥＤグリッドに位置しており、主郭の南側、４号土塁と１号堀南辺の間に構築されている。標高は39～42.7ｍである。［形状・規模］東西方向に延び、全長は約50ｍである。実効法高は４号土塁付近で4.3ｍと最も深く、それ以外は浅くなる。傾斜角度は42°である。［普請］地山（Ⅳ～Ⅵ層）を削平し、版築を施して普請している。［遺物］埋土中から陶磁器や石製品が出土している。［備考］作事の痕跡は認められない。

３号切岸

［位置］Ⅳ～ⅥＡグリッドに位置しており、主郭の北側、５号土塁と１号堀北辺主郭の南側の間に構築されている。標高は39～45ｍである。［形状・規模］東西方向に延び、全長は約57ｍである。実効

法高は５号土塁付近で3.7mあり、東へ向うにつれて低くなる。傾斜角度は45°である。[普請] 地山（Ⅴ・Ⅵ層）を削平し、版築を施して普請している。ただし、東側半分は削平のみで構築されている。[遺物] 石製品が出土している。[備考] 調査区境で掘削が困難であったため、下端は５箇所のトレンチによる確認に留めている。

４号切岸

[位置] ⅥＣ・Ｄグリッドに位置しており、主郭の南東側に構築されている。標高は39.5～41.5mである。主郭の東側北半部は自然地形をそのまま生かしているため、形成された切岸の範囲は他の切岸とは異なり非常に短い。[形状・規模] 南北方向に延びているが、ⅥＣ8グリッド付近でクランク形状となる。全長は約24mである。実効法高は3.2m、傾斜角度は40°である。[普請] 地山（Ⅴ・Ⅵ層）を削平し、版築を施して普請している。[遺物] 陶磁器と石製品が出土している。[備考] 他の切岸より版築の層厚が厚く、クランクする箇所では約1.3mある（第14図参照）。

１号土塁

[位置] ⅢＡ19・20・24・25、ⅢＢ４・５グリッドに位置しており、１号曲輪の北東隅、１号堀に平行して構築されている。標高は約42～43.8mである。[規模] 南北方向に延び、全長は約16mである。標高が高い箇所を中心に残存しており、ⅢＢ５グリッド付近で先細りしながら収束する。基底幅は2.5～5.1m、上幅は0.7～1.2mである。１号堀西辺との垂直塁壁高は1.6mである。[堆積土] 表土は10㎝と薄く、盛土は地山であるにぶい黄褐色土で構成されている。[普請] １号堀を掘った土をそのまま積み上げ敲き締めている。[遺物] 出土していない。[備考] 作事の痕跡は認められない。

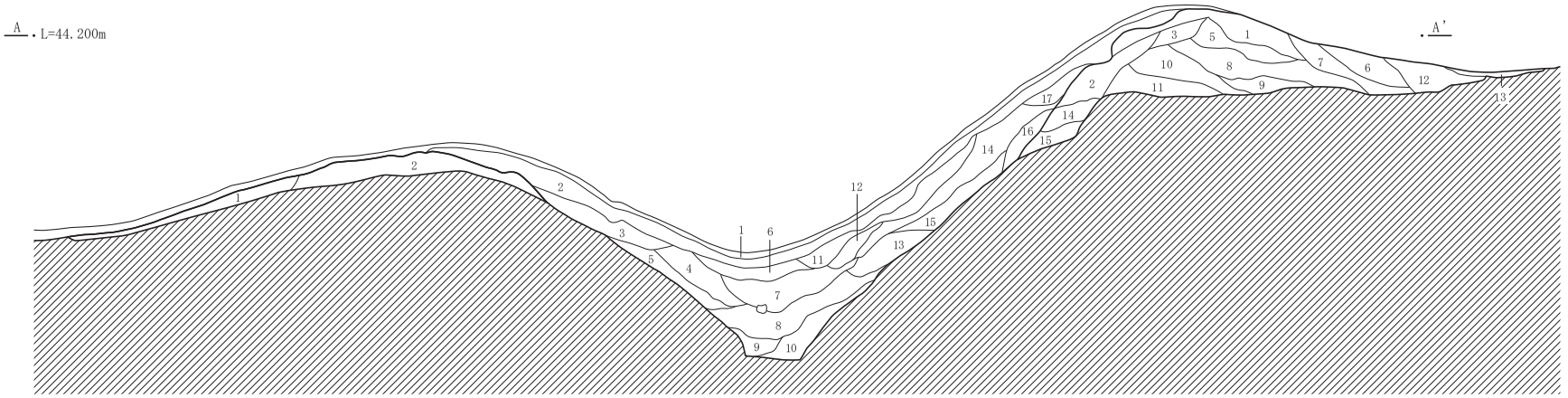
４号土塁

[位置] ⅣＤ５、ＶＤ１～５、ⅥＤ１・２グリッドに位置しており、主郭の南側、１号堀南辺と平行して構築されている。標高は41.5～42.8mである。２号柵列と重複しており、本遺構が古い。[規模] 東西方向に延び、虎口の東西で分かれている。東側が約7.5m、西側が約25mあり、全長は約32.5mである。標高が高い平坦な箇所を中心に残存しており、東側は縁辺部付近まで残存しているのに対して、西側では斜面下方のＶＤ１グリッド付近で収束する。基底幅は3.4～4.3m、上幅は0.4～1.0mである。これらの幅は、東西では差が認められない。１号堀南辺との垂直塁壁高は3.4mであり、本遺跡の中で最も高い。[堆積土] 盛土は地山で黄褐色土で構成されている。[普請] ２号堀を掘った土をそのまま積み上げ敲き締めている。[遺物] 石製品を検出時に確認している。[備考] 作事の痕跡は認められない。土塁直下で検出した２号住居状遺構の上面から出土した炭化材の年代は1450-1491calADと得られており、構築年代の上限を示すものと思われる。

５号土塁

[位置] ⅣＡ10～13・16・21、ＶＡ６～８、ＶＢ１・８グリッドに位置しており、主郭の北西隅、１号堀と平行して構築されている。標高は41.5～45mである。北側では１号柵列、西側では６号溝と重複しており、それらよりも本遺構が新しい。[規模] ⅣＡ14グリッドで屈曲し、そこから北側が南北方向、西側が東西方向にそれぞれ延びている。北側が約36.8m、西側が約18.8mあり、全長は約55.6mである。標高の高い平坦な箇所を中心に残存しており、南側はⅣＢ６グリッド、東はＶＡ８グリッドで収束している。基底幅は3.3～5.1m、上幅は0.4～1.0mである。これらの幅は基本的に東西では差

1号堀・1号土塁・1号切岸・5号土塁



第11図　1号土塁・1号堀・1号切岸・5号土塁

1号土塁

1.褐色土(7.5YR4/4)	粘性強い。しまり強い。
2.にぶい黄褐色土(10YR5/3)	粘性やや強い。しまり強い。

1号堀

1.暗褐色土(10YR3/4)	表土。
2.にぶい黄橙色土(10YR7/2)	粘性なし、しまり強い。
3.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性なし、しまり強い。土塁崩落土。
4.にぶい黄褐色土(10YR4/3)	粘性弱く、しまりやや強い。
5.褐色土(10YR4/4)	粘性中、しまり強い。地山ブロック少々含む。
6.灰黄褐色土(10Y4/2)	粘性なし、しまりやや強い。
7.にぶい黄褐色土(10YR4/3)	粘性やや弱く、しまりやや強い。
8.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性やや多く、しまりやや強い。φ10cmの礫をやや多く含む。
9.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性やや多く、しまり強い。
10.褐色土(10YR4/4)	粘性、しまりやや強い。
11.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性弱く、しまり強い。
12.にぶい黄褐色土	8層に類似。
13.灰黄褐色土	9層に近い。しまり弱くなる。
14.にぶい黄褐色土(10YR6/3)	粘性弱く、しまり中。
15.褐色土(10YR4/4)	粘性中、しまりやや強い。
16.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性弱く、しまり強い。
17.灰黄褐色土	12層に類似

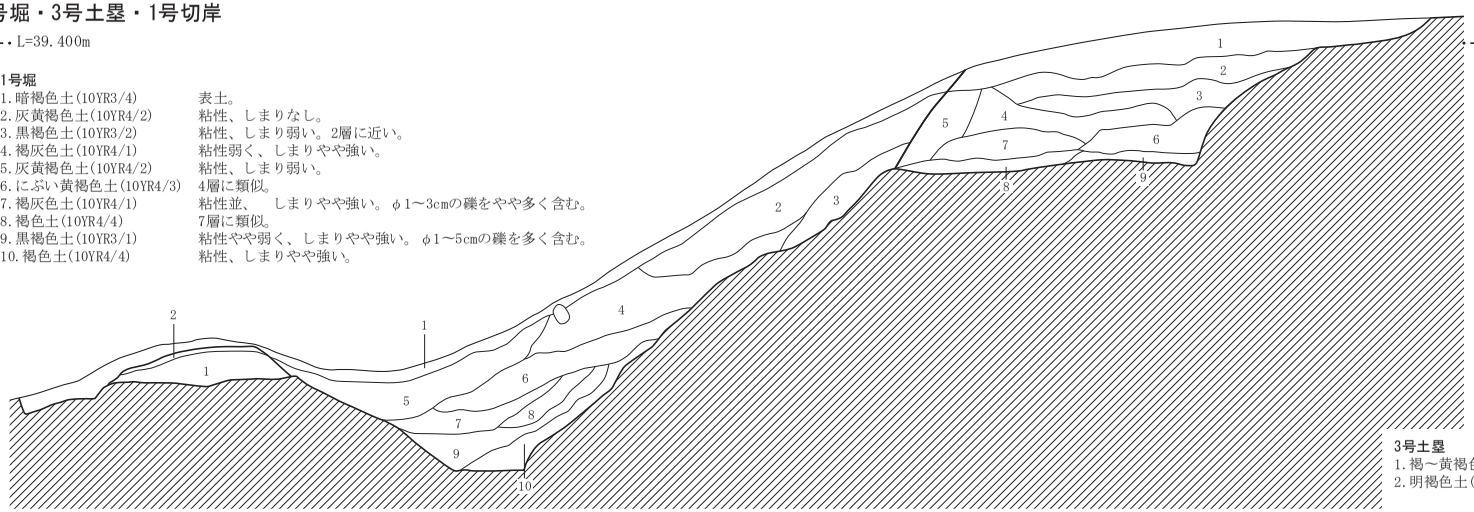
5号土塁

1.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性やや強く、しまり強い。
2.明褐色土(10YR5/6)	4層に類似
3.にぶい褐色土(10YR4/3)	粘性、しまり共にやや強い。
4.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性、しまり共に強い。
5.灰黄褐色土(10YR5/2)	粘性、しまり共に強い。礫を少量含む。
6.にぶい黄褐色土(10YR4/3)	粘性、しまり共にやや強い。地山ブロックを多く含む。
7.にぶい黄褐色土(10YR5/3)	粘性、しまり共にやや強い。礫を多く含む。
8.褐色土(10YR4/4)	粘性、しまり共に強い。
9.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性、しまり共に強い。
10.暗褐色土(10YR3/3)	粘性並、しまり強い。
11.灰黄褐色土(10YR4/3)	粘性弱く、しまりなし。表土。埋流出土多く含む。
12.褐灰色土(10YR4/1)	粘性弱く、しまりやや弱い。
13.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性弱く、しまり並。
14.褐色土(10YR4/4)	粘性、しまり共にやや強い。
15.暗褐色土(10YR3/4)	粘性やや弱く、しまり並。
16.にぶい黄褐色土(10YR4/3)	6層に類似するが、地山ブロックは少なく、礫が多い。
17.にぶい黄橙色土(10YR6/4)	粘性、しまり共にやや強い。地山崩落土。

0　(1：50)　1m

1号堀・3号土塁・1号切岸

B ・L=39.400m



1号堀

1.暗褐色土(10YR3/4)	表土。
2.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性、しまりなし。
3.黒褐色土(10YR3/2)	粘性、しまり弱い。2層に近い。
4.褐灰色土(10YR4/1)	粘性弱く、しまりやや強い。
5.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性、しまり弱い。
6.にぶい黄褐色土(10YR4/3)	4層に類似。
7.褐灰色土(10YR4/1)	粘性並、　しまりやや強い。φ1～3cmの礫をやや多く含む。
8.褐色土(10YR4/4)	7層に類似。
9.黒褐色土(10YR3/1)	粘性やや弱く、しまりやや強い。φ1～5cmの礫を多く含む。
10.褐色土(10YR4/4)	粘性、しまりやや強い。

B'

1号切岸・版築

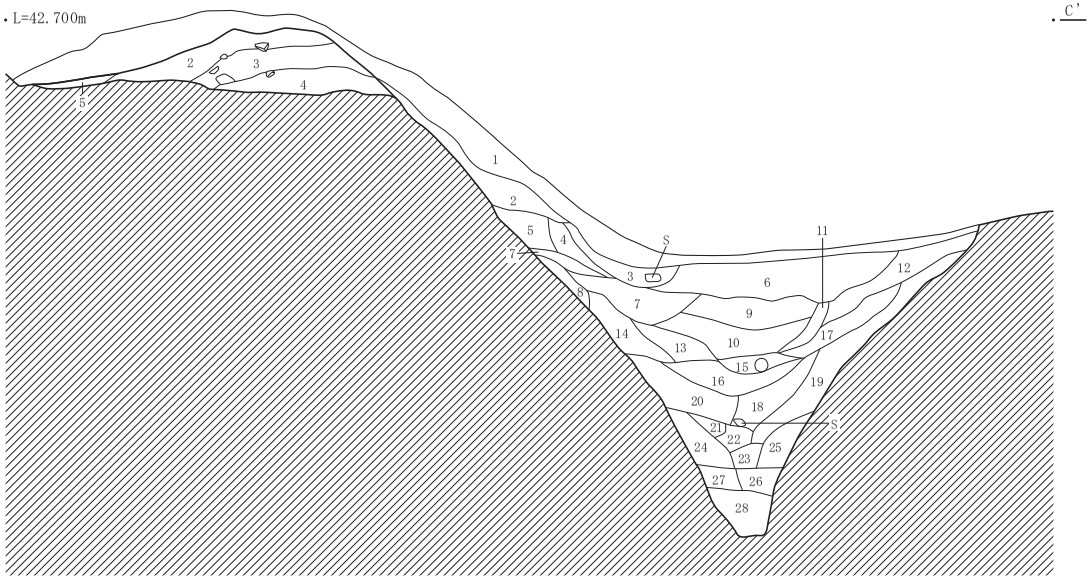
1.にぶい黄褐色土(10YR4/3)	粘性弱く、しまり強い。
2.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性やや弱く、しまり強い。
3.にぶい黄褐色土(10YR5/3)	粘性やや弱く、しまり強い。暗褐色ブロックと礫を少量混入。
4.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性、しまり強い。
5.にぶい黄褐色土(10YR6/4)	粘性やや弱く、しまり強い。
6.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性やや強く、しまり強い。4層のブロックを少量含む。
7.黒褐色土(10YR2/3)	粘性並、しまりやや強い。
8.にぶい黄褐色土(10YR4/3)	粘性やや強く、しまり強い。
9.褐色土(10YR4/6)	粘性、しまり強い。

3号土塁

1.褐～黄褐色土(10YR4/4～5/6)	粘性やや強。しまりやや強。
2.明褐色土(7.5YR5/6)	粘性やや強。しまり強。

1号堀・4号土塁・2号切岸

C ・L=42.700m



C'

1号堀

1.暗褐色土(10YR3/4)	粘性、しまり共になし。表土。
2.明黄褐色土(10YR6/6)	粘性弱、しまりやや弱い。礫少量含む。
3.にぶい黄褐色土(10YR5/3)	粘性中、しまりやや弱い。
4.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性、しまり共に中。
5.褐色土(10YR4/4)	粘性中、しまりやや弱い。土塁崩落土か？
6.黄褐色土(10Y5/6)	粘性やや強く、しまり強い。
7.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性、しまり共に強い。
8.明黄褐色土(10YR6/8)	粘性、しまり共に強い。地山崩落土。
9.褐色土(10YR4/6)	粘性、しまり共に強い。
10.にぶい黄褐色土(10YR5/3)	粘性やや強く、しまり強い。φ10～20cmの礫を少量含む。
11.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性、しまり共にやや強い。
12.黄褐色土(10YR5/6)	粘性、しまり共に強い。
13.褐色土(10YR4/6)	粘性やや強く、しまり強い。φ10cmの礫を少量含む。
14.褐色土(10YR4/6)	粘性、しまり共に強い。
15.にぶい黄褐色土(10YR5/3)	粘性強く、しまりやや強い。φ5～10cmの礫を少量含む。
16.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性強く、しまりやや強い。
17.褐色土(10YR4/4)	粘性、しまり共に強い。
18.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性強く、しまりやや強い。
19.明黄褐色土(10YR6/6)	粘性、しまり共に強い。地山崩落土。
20.黄褐色土(10Y5/6)	粘性、しまり共に強い。地山崩落土。
21.黄褐色土(10Y5/6)	粘性、しまり共に強い。地山崩落土。
22.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性やや強く、しまり中。
23.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性中、しまりやや強い。
24.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性やや弱く、しまり中。砂質味が強い。
25.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性やや弱く、しまり中。砂質味が強い。
26.にぶい黄褐色土(10YR5/4)	粘性中、しまりやや強い。砂質粘土。
27.灰黄褐色土(10YR5/2)	粘性中、しまりやや強い。砂質粘土。
28.灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性中、しまりやや強い。砂質粘土。

4号土塁

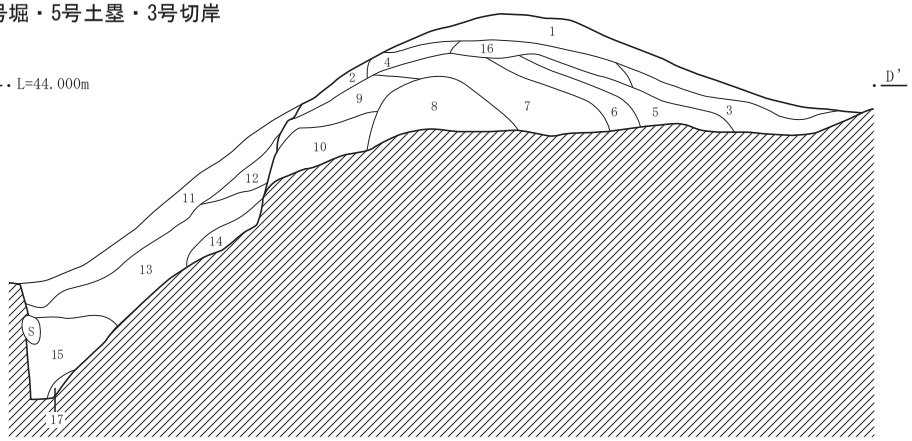
2.黄褐色土(10YR5/8)	粘性強、しまり強。　灰色褐色ブロックと混合。10～20mmの礫少量含む。
3.黄褐色土(10YR5/6)	粘性強、しまり強。
4.褐色土(10YR4/6)	粘性強、しまり強。

0　(1：50)　1m

第12図　3号土塁・1号堀・1号切岸、4号土塁・1号堀・2号切岸

第13図　5号土塁・1号堀・3号切岸、4号切岸

1号堀・5号土塁・3号切岸



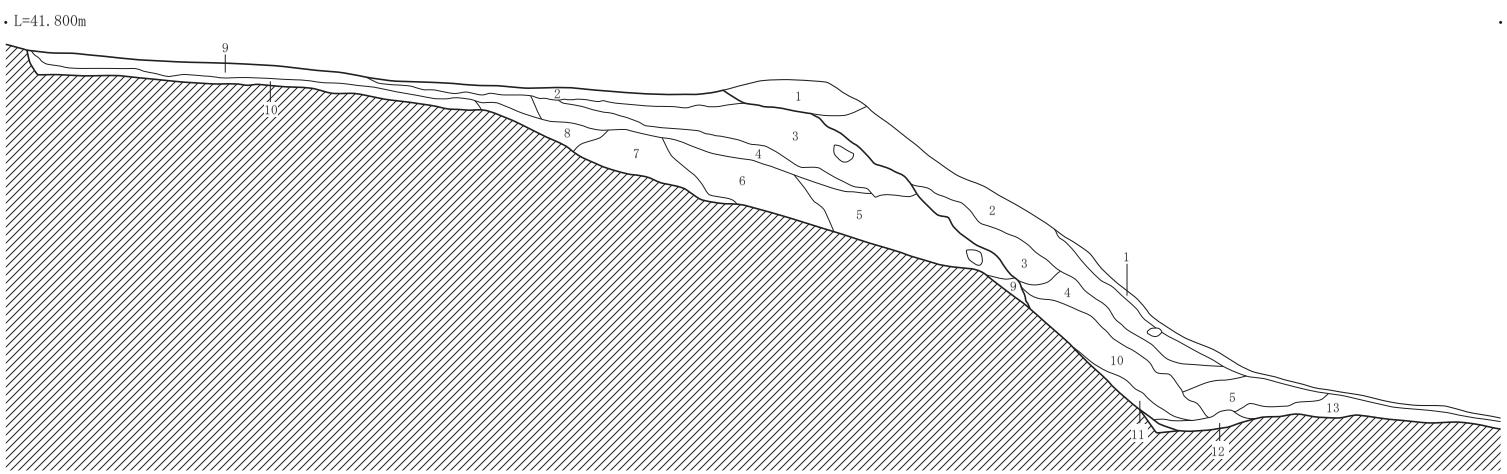
5号土塁

1. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性やや強く、しまり強い。
2. 明褐色土(10YR5/6)　4層に類似
3. にぶい褐色土(10YR4/3)　粘性、しまり共にやや強い。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性、しまり共に強い。
5. 灰黄褐色土(10YR5/2)　粘性、しまり共に強い。礫を少量含む。
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性、しまり共にやや強い。地山ブロックを多く含む。
7. にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘性、しまり共にやや強い。礫を多く含む。
8. 褐色土(10YR4/4)　粘性、しまり共に強い。
9. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性、しまり共に強い。
10. 暗褐色土(10YR3/3)　粘性並、しまり強い。
16. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　6層に類似するが、地山ブロックは少なく、礫が多い。

1号堀

11. 灰黄褐色土(10YR4/3)　粘性弱く、しまりなし。表土。埋流出土多く含む。
12. 褐灰色土(10YR4/1)　粘性弱く、しまりやや弱い。
13. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性弱く、しまり並。
14. 褐色土(10YR4/4)　粘性、しまり共にやや強い。
15. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性やや弱く、しまり並。
17. にぶい黄橙色土(10YR6/4)　粘性、しまり共にやや強い。地山崩落土。

4号切岸



4号切岸

1. 暗褐色土(10YR3/4)　表土。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性、しまりなし。
3. 褐色土(10YR4/4)　粘性、しまり共にやや強い。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性並、しまりやや強い。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性、しまり共に強い。礫を微量含む。
6. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性やや強く、しまり強い。φ20cmの礫を少量含む。
7. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性、しまり共に強い。
8. 褐色土(10YR4/6)　粘性、しまり共に強い。地山崩落土。
9. 黒褐色土(10YR3/2)　粘性並、しまりやや強い。
10. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性並、しまりやや強い。φ10cmの礫を微量含む。
11. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまり共に強い。
12. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性強く、しまりやや強い。砂質味が強い。
13. にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘性、しまり共にやや強い。

版築

1. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性、しまり共に強い。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/3)　粘性、しまり共に強い。地山ブロック多く含む。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性、しまり共に強い。黒褐色土と地山ブロック多く含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性、しまり共に強い。地山ブロック多く含む。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性、しまり共に強い。貝層に炭化粒をやや多く含む。
6. 黄褐色土(10YR5/6)　粘性強く、しまり弱い。地山ブロック多く含む。
7. 黒色土(10YR2/1)　粘性やや強く、しまり強い。炭化物微量　白色砂粒微量、土器片含む。
8. 褐灰色土(10YR4/1)　粘性、しまり共に強い。炭化物微量　白色砂粒少量、土器片含む。
9. 褐灰色土(10YR4/1)　粘性、しまり共に強い。地山ブロック・炭化粒を多く含む。

0　(1：50)　1m

が認められない。垂直墨壁高は１号堀西辺が2.6m、１号堀北辺が2.5mである。[堆積土] トレンチを２箇所設定し土層を確認しているが、盛土はいずれも地山であるにぶい黄褐色土、明褐色土などで構成されている。[普請] １・３号堀を掘った土をそのまま積み上げ敲き締めている。[遺物] 陶磁器を検出時に確認している。[備考] 作事の痕跡は認められない。

版築

[位置] 主郭の縁辺部分に位置しており、１～４号切岸の上端を構築している。ただし、３号切岸のみ５号土塁が収束する箇所で、版築も同様に収束している。これについては第８・９図中に点線で示している範囲が相当する。[規模] 全長は各切岸とほぼ同じであり、北辺のみ短く約38mである。上幅は2.0～5.0m、層厚は0.1～1.3mである。緩やかに下る丘陵の斜面に対して版築を行い、主郭縁辺部である切岸上端を作り出している。基本的に内陸部が薄く、斜面の傾斜が急になる縁辺部が厚く盛られている。ただし、４号切岸のクランク形状となる範囲では層厚が約1.3mとなる。[堆積土] 盛土は地山であるにぶい黄褐色土、灰黄褐色土、褐灰色土などで構成されている。[普請] 地山に堀を掘った土を積み上げ敲き締めている。[遺物] 主郭の南東側の版築中からは多くの遺物を確認しているが、それらは主に中～上位部分の木痕周辺から出土していることから、構築時期を捉えられるものではないと思われる。[備考] ４号切岸を構築している土層中で貝層を検出している（第14図）。規模は南北2.5×東西１ｍである。厚さは５㎝前後である。版築以前に廃棄されたものと考えられ、大量のコタマガイなどの貝類と共にコムギやイネなどの穀類などが確認されている。貝や穀類の年代測定を行っており、貝が14～15世紀代、種子が1464-1517calADと得られている。それらの詳細については64頁に記載している。

７号切岸

[位置] ⅥＤグリッドに位置しており、副郭の西側に構築されている。標高は38.8mである。調査区境で掘削できなかったため、上端のみを確認している。[形状・規模] 南北方向に延び、全長は約17ｍである。[普請] 地山（Ⅳ～Ⅵ層）を削平し、普請している。[遺物] 出土していない。[備考] 作事の痕跡や版築は認められない。

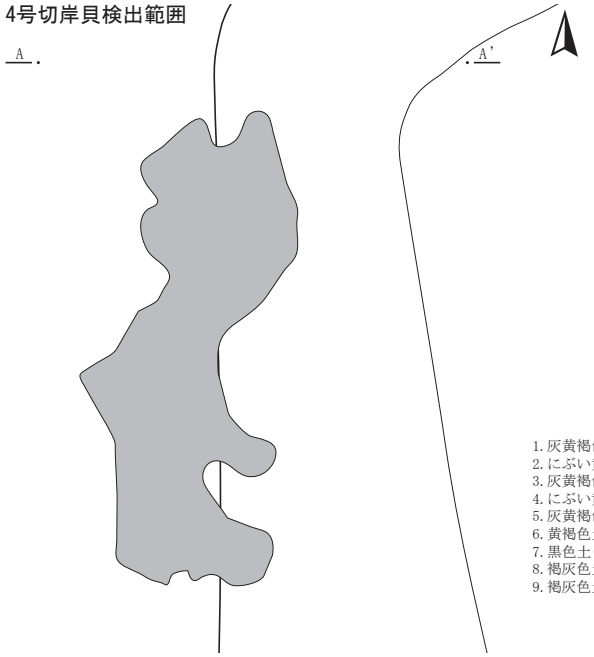
１号柵列

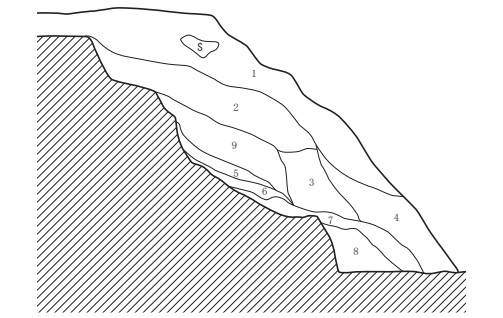
[位置] ⅣＡ13～15、ＶＡ７・11グリッドに位置しており、主郭の北側に形成されている。標高は41.6～43.8mである。東西方向の５号土塁と重複しており、本遺構が古い。[形状・規模] 全長は約26mである。杭穴は126個確認している。規模は直径５㎝、深さが５～13㎝である。それらは10～20㎝間隔で認められている。中央付近で認められる空白部分は、攪乱を受けている範囲である。[堆積土] 黒褐色土である。[作事] 地山（Ⅴ層）を掘り込んで構築している。[遺物] 出土していない。[備考] ほぼ５号土塁北側と位置が重なることから、土塁構築以前の防御施設と捉えられるものと思われる。

２号柵列

[位置] ⅣＤ５、ＶＤ１・２グリッドに位置しており、主郭の南側に形成されている。標高は40.5～42mである。４号土塁と重複しており、本遺構が古い。[形状・規模] 全長は約11.5mである。杭穴は10個確認している。３～４個を一単位とし、それらは３箇所ある。規模は直径15～30㎝、深さが約

4号切岸貝検出範囲

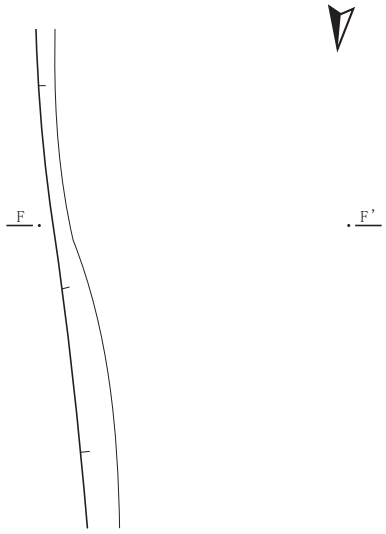


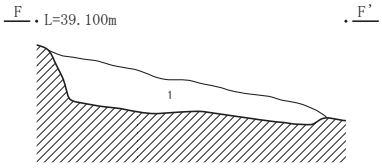


1. 灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性、しまり共に強い。	
2. にぶい黄褐色土(10YR5/3)	粘性、しまり共に強い。	地山ブロック多く含む。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性、しまり共に強い。	黒褐色土と地山ブロック多く含む。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3)	粘性、しまり共に強い。	地山ブロック多く含む。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2)	粘性、しまり共に強い。	貝層に炭化粒をやや多く含む。
6. 黄褐色土(10YR5/6)	粘性強く、しまり弱い。	地山ブロック多く含む。
7. 黒色土(10YR2/1)	粘性やや強く、しまり強い。	炭化物微量　白色砂粒微量、土器片含む。
8. 褐灰色土(10YR4/1)	粘性、しまり共に強い。	炭化物微量　白色砂粒少量、土器片含む。
9. 褐灰色土(10YR4/1)	粘性、しまり共に強い。	地山ブロック・炭化粒を多く含む。

貝検出状況

7号切岸



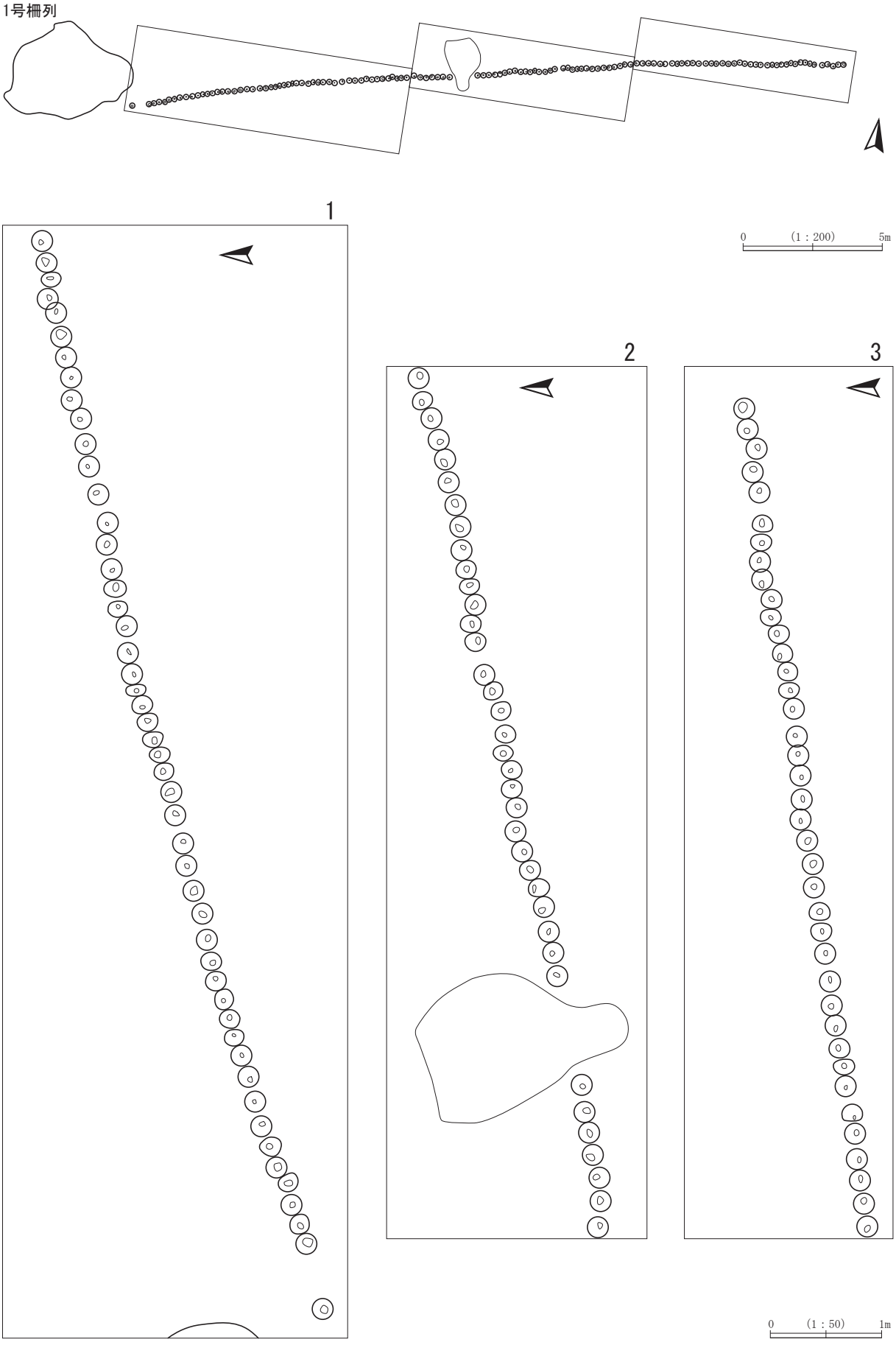


1. 褐灰色土(10YR4/1)　粘性弱、しまりやや強い。

0　(1：40)　1m

第14図　貝層検出状況、７号切岸

第15図　１・２号柵列



第16図　1号柵列

５㎝である。それらの間隔は狭いところで約15㎝であるが、広いところで80㎝である。１号とは異なり杭穴の規模が大きく、間隔が広いことが特徴である。[堆積土] 上位に構築されていた土塁の盛土が堆積土であり、黄褐色土である。[作事] 地山（Ⅴ層）を掘り込んで構築している。[遺物] 出土していない。[備考] 今回は確認できた斜面部よりも上方にあたる頭頂部付近では、地山が削平されているためその様相は判然としないが、おそらく本遺構も１号柵列と同様に形成されていたものと思われる。

１号曲輪に形成されている２号堀は、２・３号土塁と共に構築されていることから、まとめて記載していく。

２号堀

[位置] ⅢＣ25、ⅣＣ21、ⅢＤ１～５、ⅣＤ１グリッドに位置しており、１号曲輪の南側に斜面と直交するように構築されている。標高は32.0～37.3mである。[形状・規模] 東西方向に走る堀で、斜面上方の東端は１号堀西辺と接している。基本的に直線に延びるが、ⅢＤ３グリッド付近でクランク形状となる。そのクランク部分において、溝状の浅い掘り込みが伴っており、緩やかな立ち上がりが認められる。１号堀と直交する付近では、本遺構と平行して２・３号土塁がある。また斜面下方はやや広がりをみせながら収束する。軸線はN-13°-Wである。全長は約27m、上幅は1.1～３m、実効堀幅は2.8～３mである。断面は逆台形をした薬研堀である。また、後世の雨水により、底面は極端に狭くなっている。底面の標高では両端の比高が約４mある。[堆積土] にぶい黄褐～黄褐色土が主体で、12層に細分される。地山の崩落と雨水による流れ込みの影響により、埋土下位の土層はやや不明瞭である。[普請] 地山（Ⅳ層）を掘り込んで普請している。１号堀と接する箇所では、２・３号土塁を付設しており、それより斜面下に本遺構を形成している。[遺物] 堆積土中からは陶磁器や土師器、鉄製品などが出土している。[備考] 上記の１号曲輪でも記載しているように、本遺構の機能は虎口、排水、区割などが考えられるものの、それについては判然としない。土塁が付設されていることを重視すれば、排水以外の機能を想定した方が良いものと思われる。

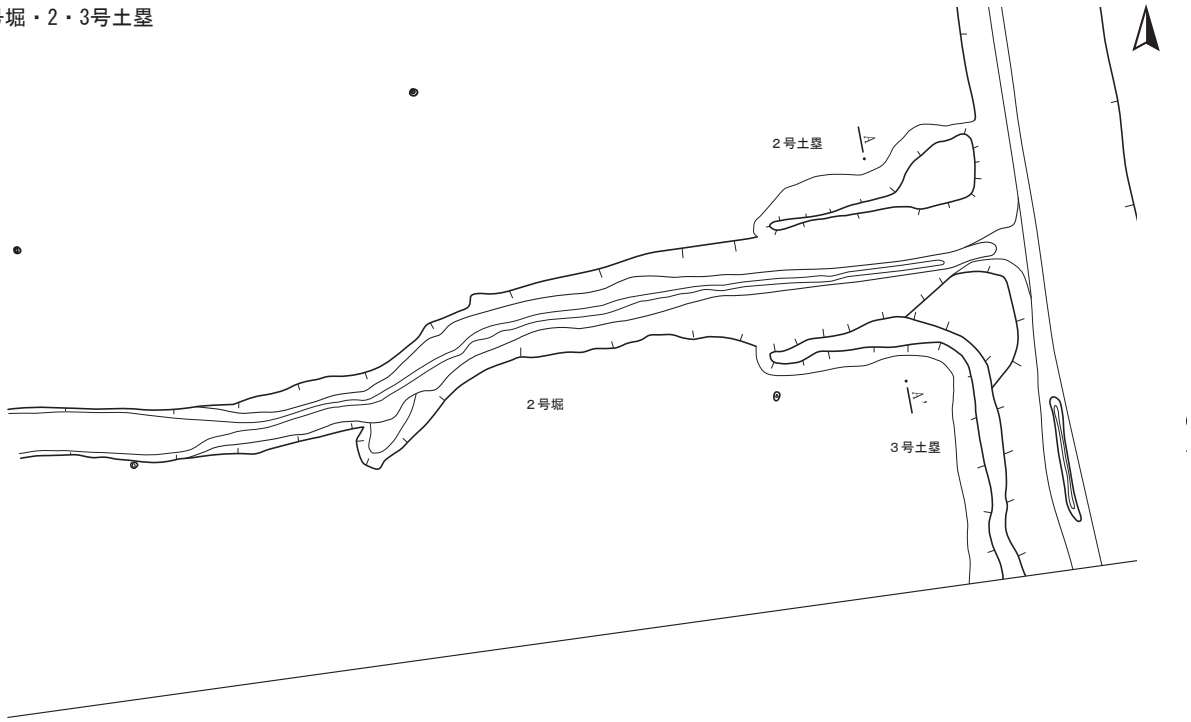
２号土塁

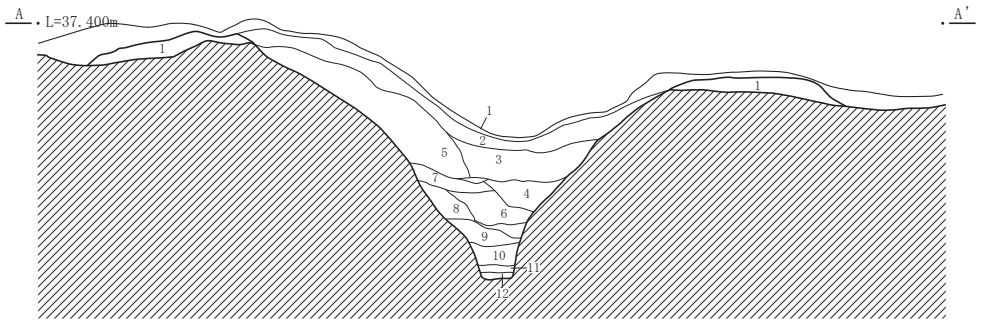
[位置] ⅢＣ25、ⅣＣ21グリッドに位置しており、１号曲輪の南東側、２号堀と平行して構築されている。標高は36.3～37.3mである。[規模] ２号堀と平行する南北方向に延び、全長は約5.9mである。直交する標高の高い箇所でのみ残存しており、斜面に下方では先細りしながら収束する。この収束の仕方は３号土塁と類似している。基底幅は2.0～3.6m、上幅は0.1～1.6mである。２号堀との垂直塁壁高は1.6mである。[堆積土] 盛土は地山である灰黄褐色土で構成されている。[普請] ２号堀を掘った土をそのまま積み上げ敲き締めている。[遺物] 出土していない。[備考] 作事の痕跡は認められない。

３号土塁

[位置] ⅢＣ25、ⅣＣ21、ⅢＤ５、ⅣＤ１・６グリッドに位置しており、１号曲輪の南東側、１・２号堀と平行して構築されている。標高は36.2～37.5mである。[規模] １号堀西辺と直交するⅣＣ21グリッド付近で屈曲し、北側が東西方向、南が南北方向に延びている。北側が5.8m、南側が5.9mあり、全長は約11.7mである。基底幅は2.2～3.4m、上幅は0.3～0.6mである。垂直塁壁高は１号堀が0.8m、２号堀が1.3mである。[堆積土] 盛土は地山である明褐色土で構成されている。[普請] １・２

2号堀・2・3号土塁





2号土塁
1. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性、しまり共に強い。

3号土塁
1. 明褐色土（7.5YR5/6）　粘性、しまり共に強い。

2号堀

1. 暗褐色土(10YR3/4)	粘性、しまりなし。表土。
2. 褐灰土(10YR4/1)	粘性弱く、しまり中。砂質味強い。
3. 灰黄褐色土(10Y4/2)	粘性弱く、しまりやや強い。φ10～15cmの礫を含む。
4. 黒褐色土(10YR5/4)	粘性やや弱く、しまりやや強い。
5. にぶい黄褐色土(10YR4/3)	粘性弱く、しまりやや強い。
6. 灰黄褐色土(10Y4/2)	粘性やや弱く、しまりやや強い。地山ブロックを微量混入。
7. 褐色土(10Y4/4)	粘性中、しまり強い。
8. 黄褐色土(10YR5/6)	粘性、しまりやや強い。地山崩落土。
9. にぶい黄褐色土(10YR4/3)	粘性中、しまり強い。礫を少量含む。
10. 黄褐色土(10YR5/6)	粘性、しまり共に強い。地山崩落土、礫を多く含む。
11. 明黄褐色土(10YR6/8)	10層と同じ。
12. 黄褐色土(10YR5/6)	粘性、しまり共に強い。地山崩落土。

平面　0　(1：200)　5m
断面　0　(1：50)　1m

第17図　２号堀、２・３号土塁

号堀を掘った土をそのまま積み上げ敲き締めている。[遺物] 出土していない。[備考] 作事の痕跡は認められない。

１号曲輪と２号曲輪との間に構築されている５号切岸、２号溝をまとめて記載していく。

５号切岸

[位置] ⅡＢ～Ｄグリッドに位置しており、１号曲輪の西端、１・２号曲輪の間に構築されている。標高は32～35mである。[形状・規模] 切岸は調査区中央から南側に向かって等高線と平行するように形成されている。南北方向に延び、全長は約49mである。中央の残りの良い箇所では、実行法高は1.3m、傾斜角度は40°である。それ以外では、法高及び傾斜角度はそれぞれ低くなる。[堆積土] Ⅰ層が５～10cmの厚さで堆積している。[普請] 地山を削平して普請している。[遺物] 出土していない。[備考] 作事の痕跡は認められない。

２号溝

[位置] ⅡＢ～Ｄグリッドに位置しており、１号切岸と２号曲輪の間、５号切岸の下位に形成されている。標高は32～34mである。[形状・規模] 南北方向（軸線N-20°-W）に延び、削平され部分的に途切れているものの、５号切岸と平行するように形成されている。ⅡＢ17グリッド付近でクランク形状となり、さらに北側に延びていく。そして、ⅡＢ11グリッド付近で浅くなり収束している。全長は約52m、上幅は0.5～1.6cmである。断面形は皿形、深さが５～15cmである。[堆積土] にぶい黄褐色土から暗褐色土で単層である。[遺物] 出土していない。

６号切岸

[位置] ＩＢ、ⅡＣ・Ｄグリッドに位置しており、２号曲輪の西側にある。標高は30～34mである。[堆積土] Ⅰ層が５～10cmの厚さで堆積している。[普請] 普請は認められない。[遺物] 出土していない。[備考] 自然地形であるが、切岸状とも捉えられることから、ここで掲載している。

１号掘立柱建物

[位置] ⅣＡ16・21グリッドに位置しており、主郭の北側に形成されている。１号住居状遺構と重複しており、本遺構が新しい。２号掘立柱建物の北側にあり、両者は隣接して形成されている。[柱形式・規模] 柱形式は側柱である。規模は桁行４間（20.5尺）×梁間２間（９尺）である。[軸線方向] N-10°-W。

２号掘立柱建物

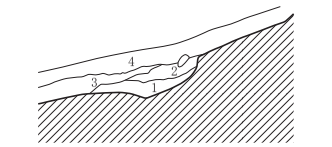
[位置] ＶＢ１・２グリッドに位置しており、主郭の北側に形成されている。１号掘立柱建物の南側にあり、両者は隣接して形成されている。２号鍛冶炉と重複している。直接的な切り合いは認められないが、他の柱穴との重複関係から本遺構の方が新しいと想定される。[柱形式・規模] 柱形式は側柱である。規模は桁行２間（10尺）×梁間１間（９尺）である。[軸線] N-10°-W。

１号鍛冶炉

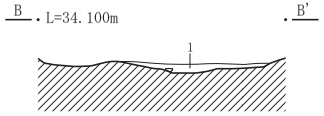
[位置] ＶＡ22・ＶＢ２グリッドに位置しており、主郭の北側、標高43.2～43.4mの頭頂部縁辺に形成されている。２号鍛冶炉とは隣接しており、２m東にある。[形態] 黄褐色粘土が貼り付けられた

第18図　2号曲輪、5・6号切岸、2号溝

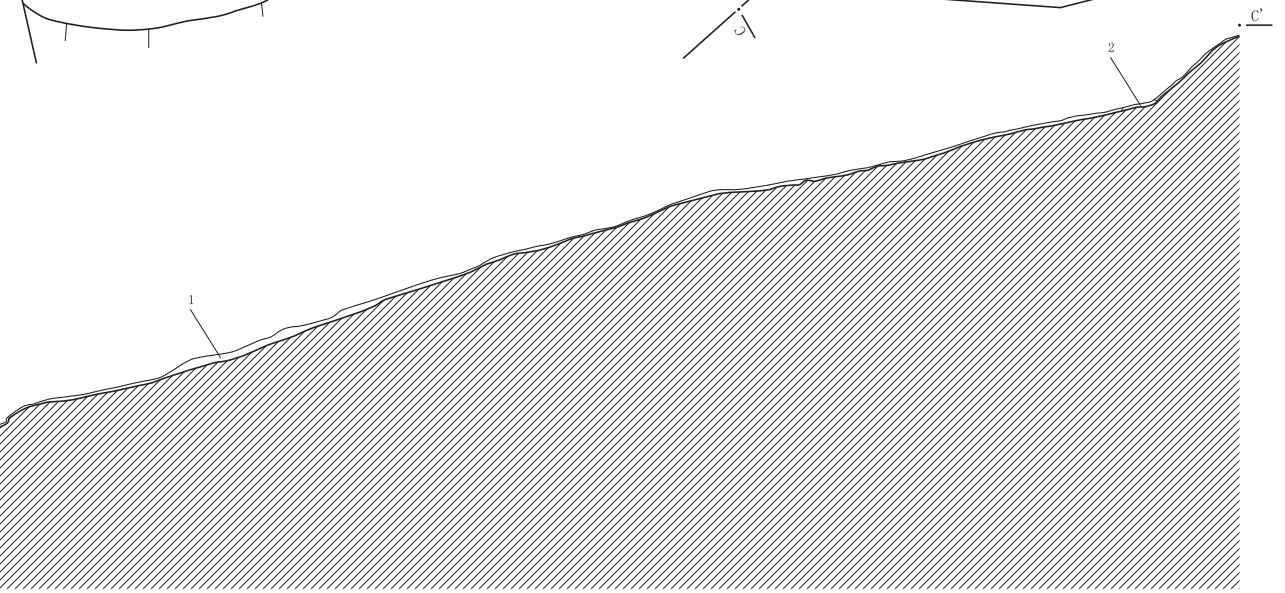
2号曲輪・5・6号切岸・2号溝

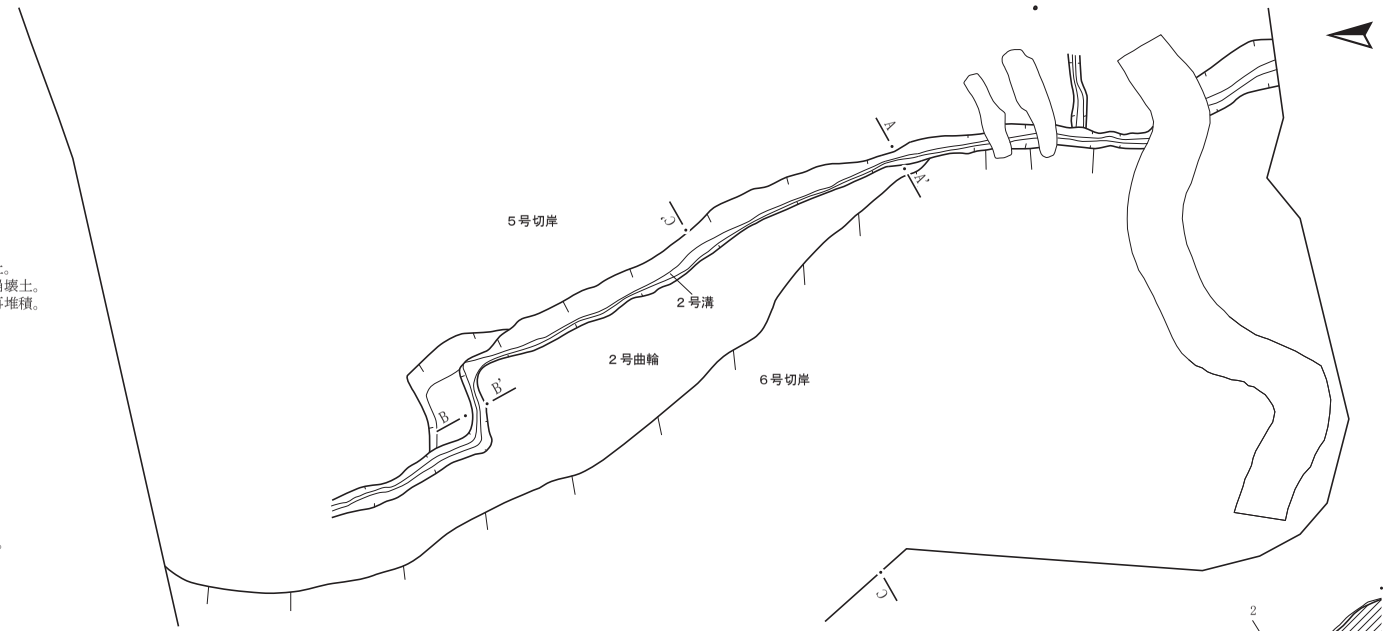


1. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまり共になし。
2. 黒色土(10YR1.7/1)　粘性、しまり共になし。腐食土。
3. 灰黄褐色土(10YR5/2)　粘性弱く、しまり強い。地山崩壊土。
4. 灰黄褐色土(10YR5/2)　粘性なし、しまり強い。地山再堆積。



1. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまり共になし。
2. 黒色土（10YR1.7/1）　粘性、しまり共になし。腐食土。

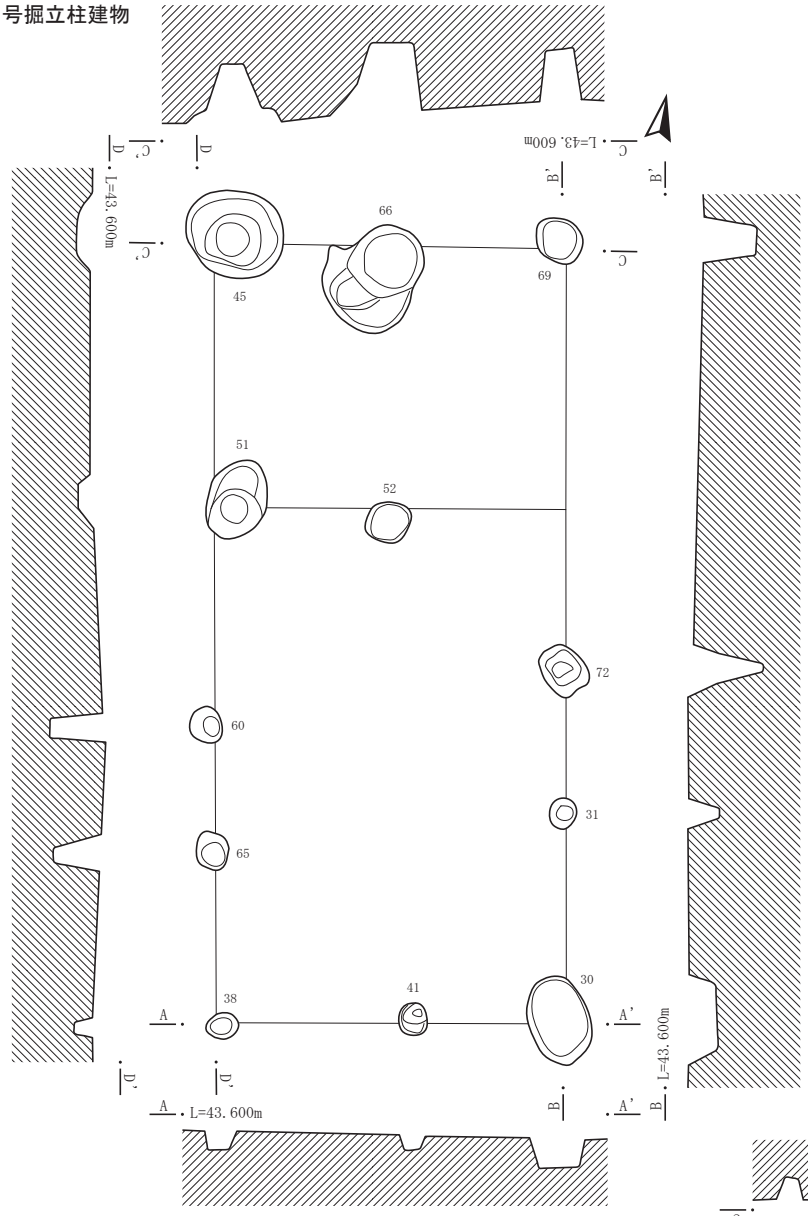




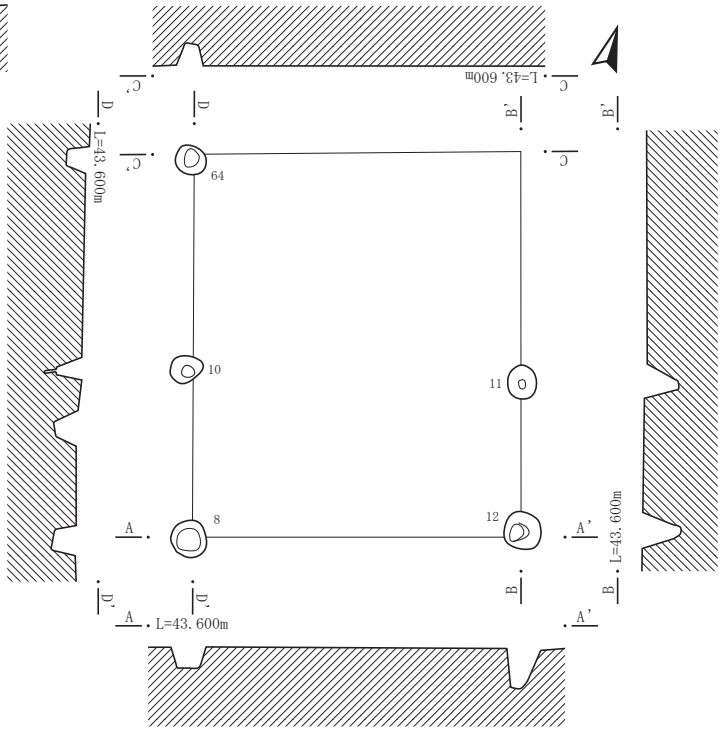
6号切岸
1. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性なし、しまり弱い。表土が薄く堆積している

平面 (1：400) 0 10m
6号切岸（断面） (1：100) 0 2m
2号溝（断面） (1：40) 0 1m

1号掘立柱建物



2号掘立柱建物



0 (1 : 60) 2m

第19図　1・2号掘立柱建物

使用面の中央には燃焼部である炉が形成されている。その南側には湯溜を確認している。地下構造は認められない。軸線は南北方向であり、隣接する２号鍛冶炉と概ね一致している。[形状・規模] 炉と使用面の平面形は共に方形である。炉の規模は１辺が約90㎝、層厚が15㎝である。使用面の規模は南北2.67×東西2.24m、層厚が５～10㎝である。その面はほぼ平坦である。[遺物] 粘土塊が１点出土している。また、鍛造剥片が僅かながら確認できている。[備考] 燃焼部の直上と直下から出土した炭化材を年代測定しており、直下の年代値は1489-1523calADと得られている。詳細は64頁に記載している。

２号鍛冶炉

[位置] ＶＢ１グリッドに位置しており、主郭の北側、標高43.4mの頭頂部に形成されている。Ｐ09と重複しており、本遺構が古い。１号鍛冶炉とは隣接しており、２m西にある。[形態] 灰黄褐色の粘土が貼り付けられた使用面の西側には、前庭部を伴う土坑を付設しており、その底面に燃焼部である炉が形成されている。地下構造は認められない。軸線は南北方向にあり、隣接する１号鍛冶炉と概ね一致している。[形状・規模] 炉と土坑、使用面の平面形は方形である。炉は北東部が残存していないが、規模は１辺が55～60㎝、層厚が３㎝である。土坑の規模は1.68×1.2m、深さが32㎝である。使用面から掘り込まれており、炉が形成されている底面の南側には、一段高い前庭部がある。その比高は10㎝である。使用面は南東部が削平されて残存していないが、南北1.40×東西0.91mである。その面は概ね平坦である。[遺物] 出土していない。[備考] 炉の直上から出土した炭化材を年代測定しており、1465-1519calADと得られている。詳細は64頁に記載している。

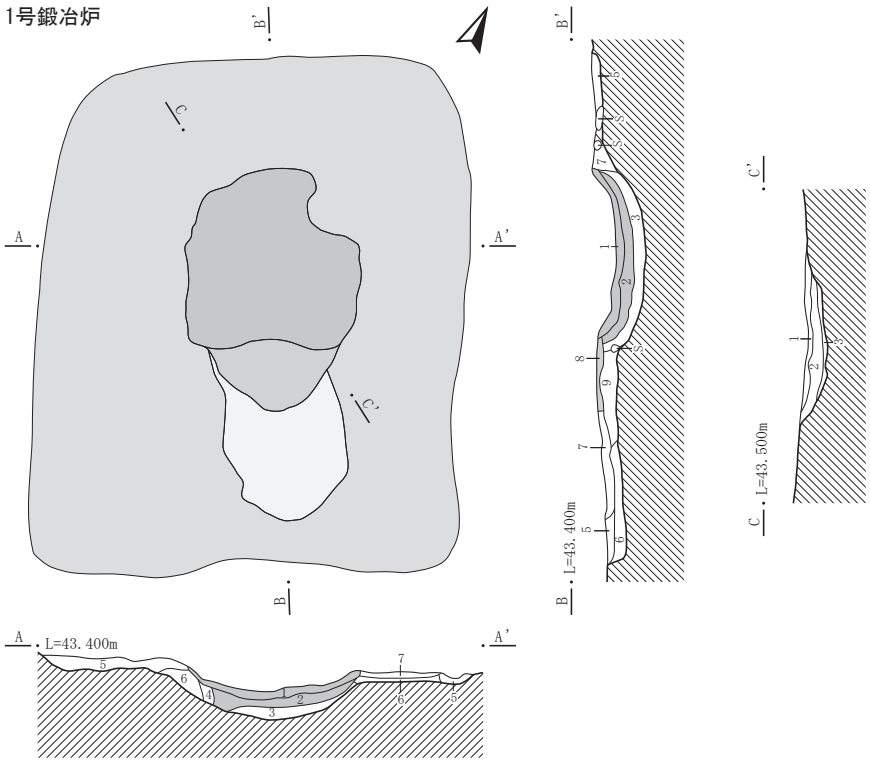
３号鍛冶炉

[位置] ＶＣ４グリッドに位置しており、主郭の南東側、標高42.3mの頭頂部縁辺に形成されている。４号鍛冶炉とは隣接しており、１m東にある。[形態] 浅い土坑の中央に燃焼部である炉が形成されている。軸線は斜面に直交する東西方向であり、４号鍛冶炉と概ね一致している。地下構造は認められない。[形状・規模] 炉と土坑の平面形は長方形である。炉の規模は1.12×0.91m、層厚が10㎝である。土坑は炉より一回り大きく、掘り込みは極めて浅いことから壁は殆ど立ち上がらない。規模は1.35×1.19mである。[遺物] １層から時期不明の陶磁器が出土している。[備考] 炉の直上と焼土内から出土した炭化材を年代測定しており、後者の年代値が1475-1521calADと得られている。詳細は64頁に記載している。

４号鍛冶炉

[位置] ＶＣ５グリッドに位置しており、主郭の南東側、標高31.9～42.2mの頭頂部縁辺に形成されている。４号鍛冶炉とは隣接しており、１m西にある。[形態] 浅い土坑の中央に燃焼部である炉が形成されている。軸線は斜面に直交する東西方向であり、３号鍛冶炉と概ね一致している。地下構造は認められない。[形状・規模] 炉と土坑の平面形は、前者が楕円形、後者が方形である。炉の規模は84×79㎝、層厚が15㎝である。土坑は炉より一回り大きく、掘り込みは極めて浅いことから壁は殆ど立ち上がらない。規模は1.65×1.16mである。[遺物] 出土していない。[備考] 年代測定をしていないことから遺構時期は特定できていないものの、遺構の形状から判断すれば、３号鍛冶炉とほぼ同時期のものと想定される。

1号鍛冶炉



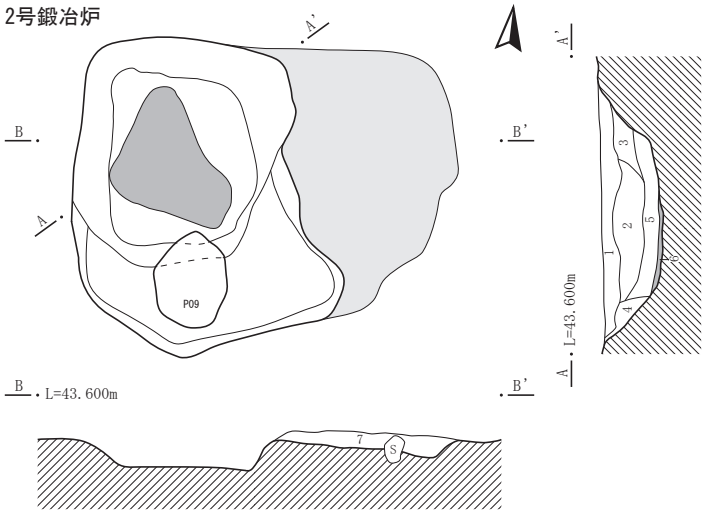
(A-A'・B-B')

1. 赤灰色土(2.5YR4/1)　焼土。
2. 赤褐色土(2.5YR4/6)　焼土。粘性、しまりなし。
3. 明褐色土(7.5YR5/6)　粘性しまり共に強い。焼土がまじる。
4. 褐色土(10YR4/6)　粘性しまり共に強い。
5. 黄褐色土(10YR4/6)　粘性しまり共に強い。地山ブロックを多く含む。
6. 黄褐色土(10YR5/6)　粘性しまり共に強い。
7. 黄褐色土(2.5Y5/6)　粘性弱く、しまり強い。
8. 赤褐色土(5YR4/6)　粘性弱く、しまりない。
9. 明褐色土(7.5Y5/6)　粘性やや強く、しまり強い。地山ブロックを多く含む。

(C-C')

1. オリーブ褐色土(2.5Y4/4)　粘性弱く、しまり強い。焼土、炭化粒を少量含む。
2. 褐色土(10YR4/6)　粘性弱く、しまり強い。地山ブロックを少量。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性やや弱く、しまり並。

2号鍛冶炉

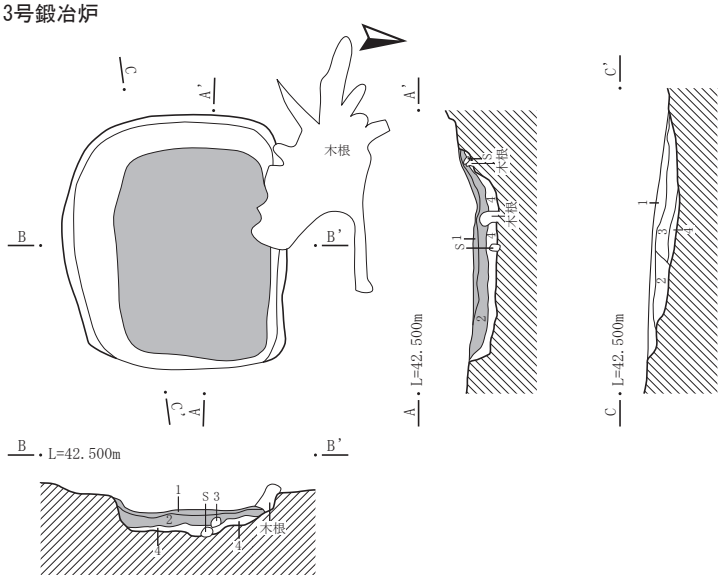


1. 褐色土(10YR4/4)　粘性並、しまり強い。焼土を微量含む。
2. 黄褐色土(10YR5/6)　粘性、しまり共に強い。地山ブロックをやや多く、炭化物を微量含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性、しまり共に強い。焼土を微量含む。
4. 明黄褐色土(10YR6/6)　粘性、しまり共に強い。地山崩落土。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性、しまり共に強い。地山ブロック、焼土、炭化物を少量含む。
6. 焼土(10R4/6)　粘性、しまりなし。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性しまり共に強い。地山ブロック、焼土、炭化粒を少量含む。

0　(1：40)　1m

第20図　１・２号鍛冶炉

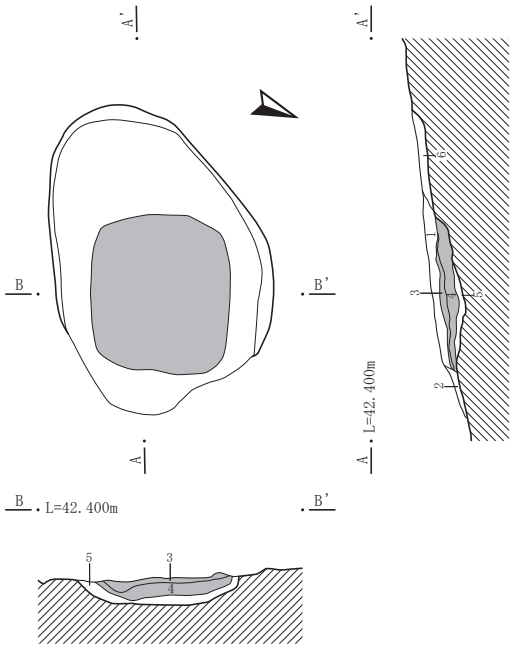
3号鍛冶炉



(A-A'・B-B')
1. 焼土(2.5YR6/3)　焼土。粘性なし、しまり強。
2. 焼土(10R4/4)　焼土。粘性なし、しまりなし。しまり軟質。
3. 炭(10YR1.7/1)　炭。粘性なし、しまり並。
4. 褐色土(10YR4/4)　粘性、しまり共に強い。

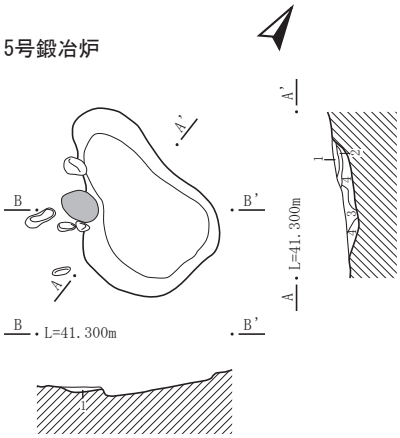
(C-C')
1. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性、しまり共に強い。焼土を多く含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性、しまり共に強い。地山崩落土。
3. にぶい黄褐色土(10YR6/4)　粘性、しまり共に強い。地山ブロックと暗褐色土が混ざった埋め戻した土。
4. 炭(10YR1.7/1)

4号鍛冶炉



1. 褐灰色土(10YR4/1)　粘性やや弱く、しまり強。焼土をやや多く含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性並。しまりやや強い。炭化粒微量含む。
3. 極暗赤褐色土(2.5YR2/3)　焼土硬化面。粘性なし。しまり強。
4. にぶい赤褐色土(2.5YR5/4)　焼土。
5. にぶい橙色土(5YR6/4)　粘性、しまり共に強い。
6. にぶい黄褐色土(10YR6/4)　粘性、しまり共に強い。炭化粒、焼土を含む。

5号鍛冶炉



(A-A')
1. 褐灰色土(10YR4/1)　粘性やや強く、しまり強い。炭化粒を少量含む。
2. 炭(10YR1.7/1)
3. 褐灰色土(10YR4/1)　粘性やや強く、しまり強い。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性、しまり共に強い。地山ブロックを多く含む。

(B-B')
1. 灰赤色土(2.5YR4/2)　粘性なし、しまり強い。焼土。

0　(1：40)　1m

第21図　3～5鍛冶炉

５号鍛冶炉

［位置］ＶＤ14・19グリッドに位置しており、副郭の中央、標高41.1ｍの頭頂部縁辺に形成されている。［形態］燃焼部である炉の前庭部に土坑を付設している。［形状・規模］炉と土坑の平面形は不整形である。炉の規模は19×16㎝、層厚が５㎝である。土坑の規模は1.09×0.74ｍ、深さが６㎝である。［遺物］出土していない。［備考］炉の直上と直下から出土した炭化材を年代測定しており、1542-1601calAD、1470-1521calADと得られている。詳細は64頁に記載している。

１号性格不明遺構

［位置］ⅣＢ４・５・９・10グリッドに位置しており、主郭の北側、標高43.6ｍの頭頂部に形成されている。［形状・規模］平面形は隅丸方形である。規模は南北3.73×東西3.18ｍ、深さが55㎝である。［堆積土］にぶい黄褐色土と黄褐色土で７層に細分される。［壁・底面］壁は外傾して立ち上がる。底面は中央が皿状に凹む。［遺物］陶磁器（105ほか）、石製品（132・133）が埋土中位から下位で出土している。［備考］底面から出土した炭化材を年代測定しており、1524-1559yrBPと得られている。詳細は64頁に記載している。この年代は出土遺物の年代と乖離している。よって、この得られた年代は、版築の構築時期と一致することから、造成に伴うものと判断し本遺構の形成時期はそれ以前の15世紀代として捉えておきたい。

２号土坑

［位置］ＶＢ１グリッドに位置しており、主郭の北側、標高43.5ｍの頭頂部に形成されている。［形状・規模］平面形は方形である。規模は81×76㎝、深さが７～11㎝である。［堆積土］褐色土の単層である。［壁・底面］壁は直立して立ち上がる。底面は若干の凸凹が認められるものの、概ね平坦である。［遺物］出土していない。

３号土坑

［位置］ＶＢ２グリッドに位置しており、主郭の北側、標高43.3ｍの頭頂部に形成されている。［形状・規模］平面形は楕円形である。規模は72×63㎝、深さが７㎝である。［堆積土］にぶい黄褐色土の単層である。［壁・底面］壁は外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。［遺物］出土していない。

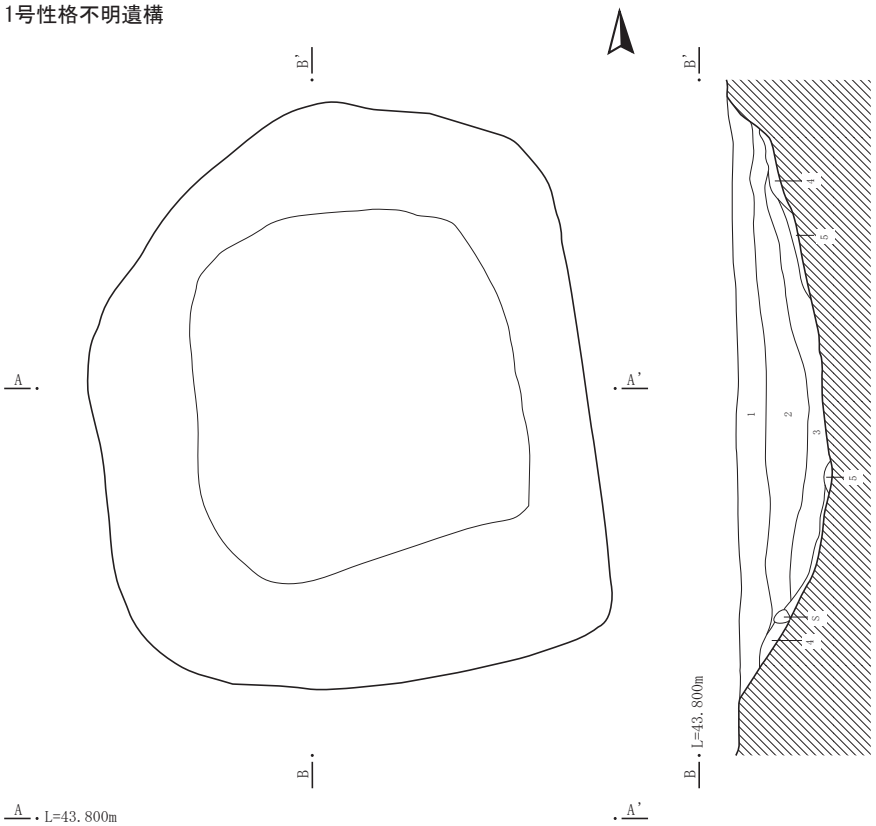
４号土坑

［位置］ⅣＢ18グリッドに位置しており、主郭の西側、標高42.5ｍの緩やかに下る斜面上に形成されている。［形状・規模］平面形は円形である。規模は60×51㎝、深さが10㎝である。［堆積土］黒褐色土の単層である。［壁・底面］壁は底面は概ね平坦である。底面は概ね平坦である。［遺物］出土していない。

５号土坑

［位置］ⅣＡ20・25グリッドに位置しており、主郭の北側、標高43.6ｍの頭頂部に形成されている。［形状・規模］平面形は楕円形である。規模は1.18×1.11ｍ、深さが12㎝である。［堆積土］黒褐色土の単層である。［壁・底面］壁は外傾して立ち上がる。底面は皿状に凹む。［遺物］出土していない。

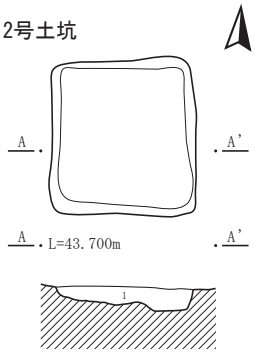
1号性格不明遺構



1. 褐色土(10YR4/4)　粘性しまり、共に強い。地山ブロックをやや多く、炭化粒を微量含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性やや強い。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性並、しまりやや強い。炭化粒をやや多く含む。
4. 黄褐色土(10YR5/6)　粘性しまり共に強い。地山崩落土。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性しまり共に強い。
6. 褐色土(10YR4/4)　粘性しまり共に強い。地山崩落土。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性しまり共に強い。

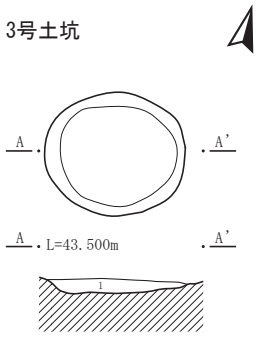
0　(1：50)　1m

2号土坑



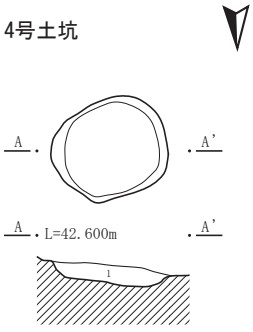
1. 褐色土(10YR4/4)　粘性やや強く、しまり強い。

3号土坑



1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性やや強く、しまり強い。地山ブロック、礫を少量含む。

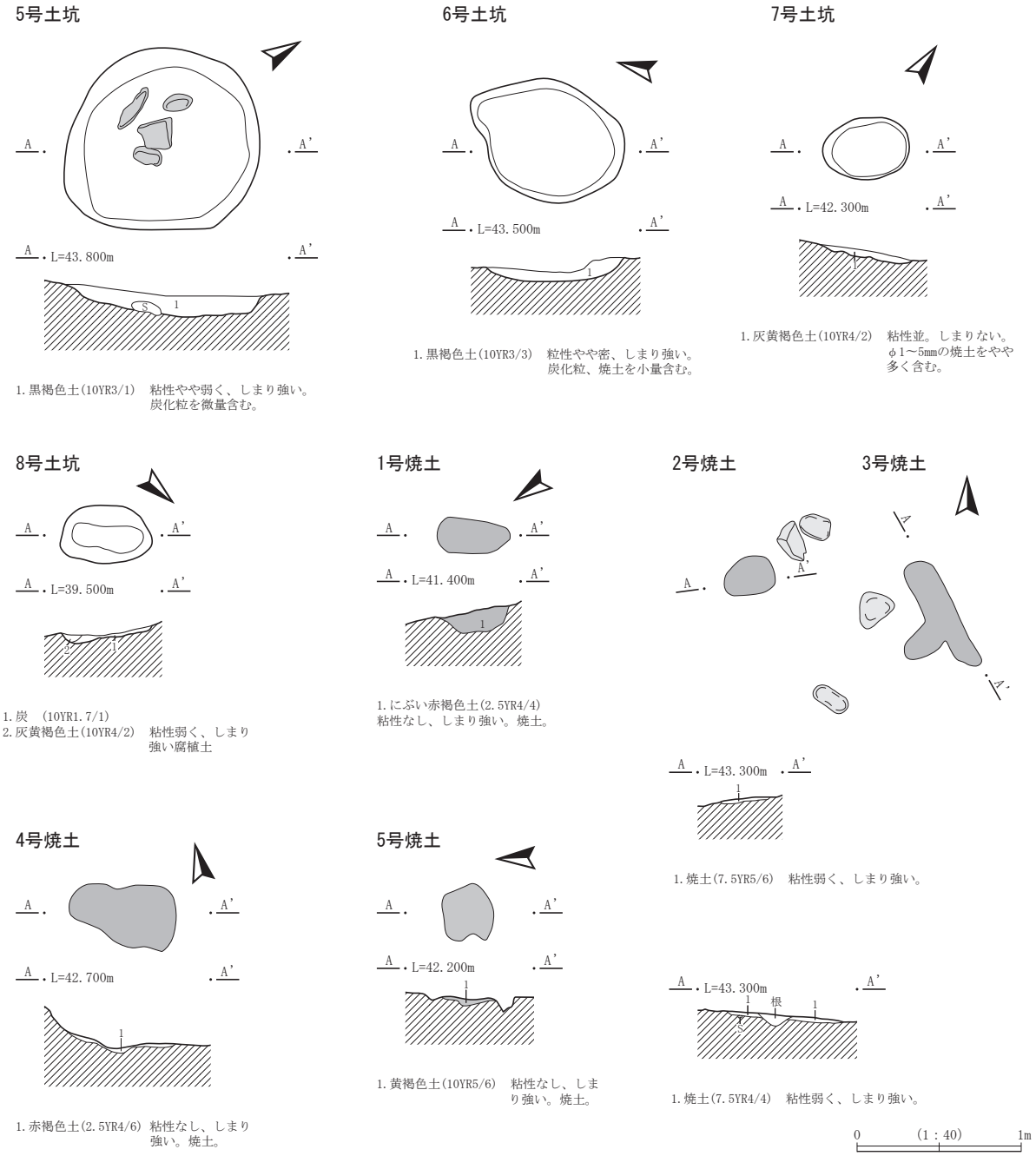
4号土坑



1. 黒褐色土(10YR3/1)　粘性並、しまり強い。炭化粒を少量含む。

0　(1：40)　1m

第22図　１号性格不明遺構、１～４号土坑



第23図　５～８号土坑、１～５号焼土

６号土坑

［位置］ⅣＡ21・22グリッドに位置しており、主郭の北側、標高43.3ｍの頭頂部縁辺に形成されている。１号住居状遺構と重複しており、本遺構の方が新しい。［形状・規模］平面形は楕円形である。規模は99×70㎝、深さが５～10㎝である。［堆積土］黒褐色土の単層である。［壁・底面］壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。［遺物］出土していない。

７号土坑

［位置］ＶＣ５グリッドに位置しており、主郭の南側、標高42.1ｍの斜面上に形成されている。４号鍛冶炉と重複しており、本遺構の方が新しい。［形状・規模］平面形は楕円形である。規模は52×38

cm、深さが５cmである。[堆積土] 灰黄褐色土の単層である。[壁・底面] 壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は傾斜するものの概ね平坦である。[遺物] 出土していない。

８号土坑

[位置] ⅢＢ25グリッドに位置しており、１号曲輪の東側、標高は39.3mの斜面上に形成されている。[形状・規模] 平面形は不整楕円形である。規模は55×35cm、深さが２～５cmである。[堆積土] 炭を伴う層である。[壁・底面] 壁は緩やかに立ち上がり、底面は斜面と平行しているが概ね平坦である。[遺物] 出土していない。

１号焼土

[位置] ⅥＤ6グリッドに位置しており、副郭の東側、標高41.3mの頭頂部から緩やかに下る斜面上に形成されている。[形状・規模] 平面形は楕円形である。規模は44×21cm、層厚が10cmである。[堆積土] にぶい赤褐色土である。[遺物] 出土していない。

２号焼土

[位置] ⅣＢ20グリッドに位置しており、主郭の西側、標高43.2mの頭頂部から緩やかに下る斜面上に形成されている。[形状・規模] 平面形は楕円形である。規模は31×24cm、層厚が３cmである。[堆積土] 明褐色土である。[遺物] 出土していない。

３号焼土

[位置] ⅣＢ20グリッドに位置しており、主郭の西側、標高43.2mの頭頂部から緩やかに下る斜面上に形成されている。[形状・規模] 平面形は不整形である。規模は68×38cm、層厚が２cmである。[堆積土] 褐色土である。[遺物] 出土していない。

４号焼土

[位置] ＶＢ20グリッドに位置しており、主郭の東側、標高42.3mの頭頂部から下る斜面上に形成されている。[形状・規模] 平面形は不整形である。規模は73×39cm、層厚が２cmである。[堆積土] 赤褐色土である。[遺物] 出土していない。

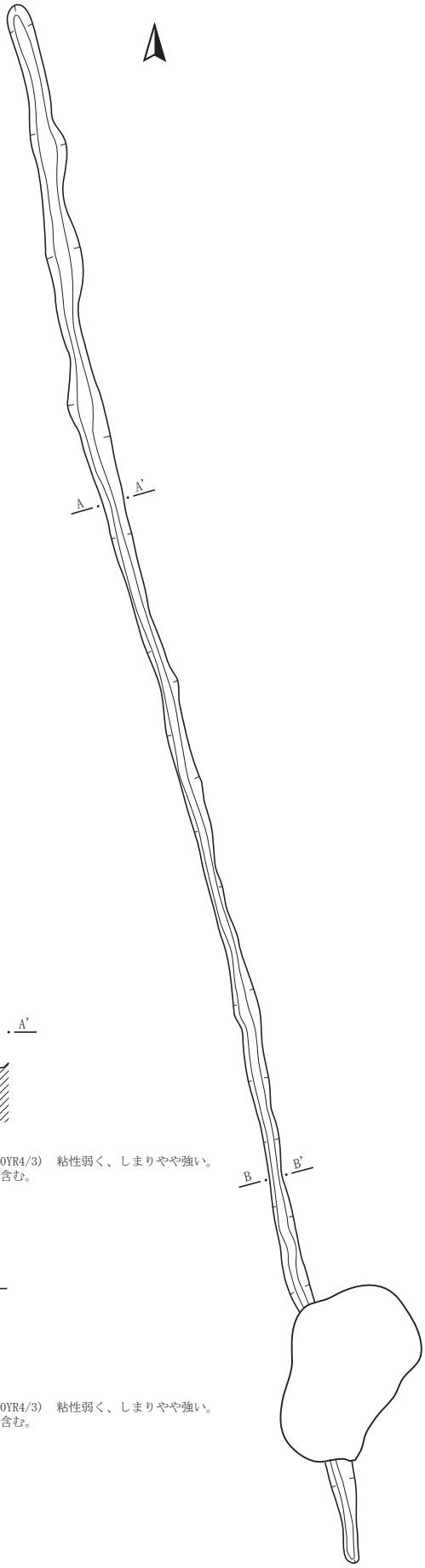
５号焼土

[位置] ＶＤ2グリッドに位置しており、主郭の南側、標高42mの斜面上に形成されている。４号土塁と重複しており、本遺構が古い。[形状・規模] 平面形は不整形である。規模は36×33cm、層厚が３cmである。[堆積土] 黄褐色土である。[遺物] 出土していない。

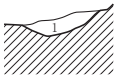
１号溝

[位置] ⅢＢ・Ｃグリッドに位置しており、１号曲輪の東側、標高36～39mの斜面上に形成されている。１号堀とほぼ平行している。[形状・規模] 南北方向（軸線N-13°-W）に延び、直線的である。全長は約30m、上幅が25～65cmである。断面形は皿形、深さが10cmである。[堆積土] にぶい黄褐色土で単層である。[遺物] 出土していない。[備考] 遺構が形成されている場所は異なるが、３・６号溝と軸線は類似している。

1号溝



A ・ L=38.300m ・ A'

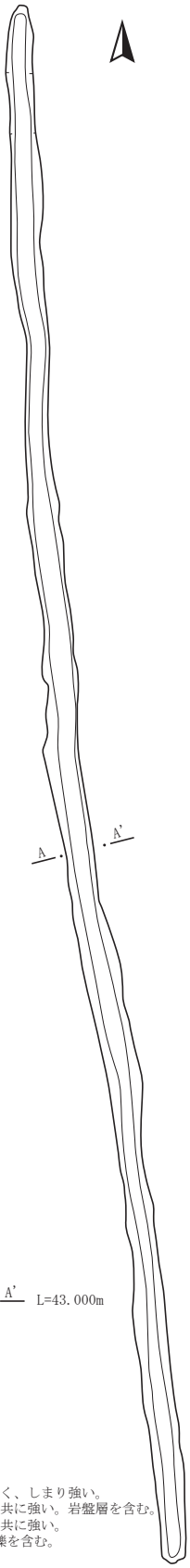


1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性弱く、しまりやや強い。
φ1～5mmの礫を多く含む。

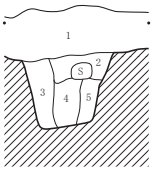
B ・ L=36.700m ・ B'

1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性弱く、しまりやや強い。
レキφ1～5mmを多く含む。

6号溝



A ・ ・ A'　L=43.000m



1. 版築
2. 褐色土(10YR4/4)　粘性やや強く、しまり強い。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/4)　粘性しまり共に強い。岩盤層を含む。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2)　粘性しまり共に強い。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4)のブロック礫を含む。

溝平面 (1：120)　0　4m

断面 (1：40)　0　1m

第24図　1・6号溝

３号溝

［位置］ⅣＣ・Ｄグリッドに位置しており、副郭の東側、標高38～39ｍの緩やかに下る斜面上に形成されている。４号切岸の下方にあり、４・５号溝と平行している。［形状・規模］南北方向（両端の軸線N-５°-W・E）に延び、やや弧状になる。全長は約19.5ｍ、上幅は0.3～0.5ｍである。断面形は箱形、深さが15～20㎝である。［堆積土］にぶい黄褐色土が主体で２層に細分される。［遺物］出土していない。

４号溝

［位置］ⅣＣ・Ｄグリッドに位置しており、副郭の東側、標高35.5～38ｍの緩やかに下る斜面上に形成されている。３号溝の下方にあり、３・５号溝とほぼ平行している。［形状・規模］南北方向（軸線N-10°-W）に延び、概ね直線的である。ⅣＣ９グリッド付近で屈曲し、さらに東側へと続いていく。南北が21ｍ、東西が４ｍあり、全長は約25ｍ、上幅は0.6～1.2ｍである。断面形は皿形、深さが10～20㎝である。［堆積土］灰黄褐色土が主体で４層に細分される。［遺物］出土していない。［備考］溝の様相は２号溝と類似している。

５号溝

［位置］ⅣＣ・Ｄグリッドに位置しており、副郭の東側、標高37.1ｍの斜面上に形成されている。４号切岸の下端にあり、３・４号溝と平行している。［形状・規模］南北方向（軸線N-５°-W）に延び、直線的である。全長は約14.5ｍである。断面形は皿形、深さが３～５㎝である。［堆積土］にぶい黄褐色土である。［遺物］出土していない。［備考］幅については判然とせず、溝の底面部分を本遺構として捉えている。

６号溝

［位置］ⅣＡ・Ｂグリッドに位置しており、主郭の西側、標高41.5～43.6ｍの緩やかに下る斜面上に形成されている。５号土塁と版築と重複しており、本遺構が古い。［形状・規模］南北方向（軸線N-５°-W）に延び、直線的である。全長は約26.5ｍ、上幅は35～60㎝である。断面形は箱形、深さが30～35㎝である。［堆積土］褐色土やにぶい黄褐色土が主体で５層に細分される。上層には版築に用いられた褐色土が堆積している。［遺物］出土していない。

柱穴

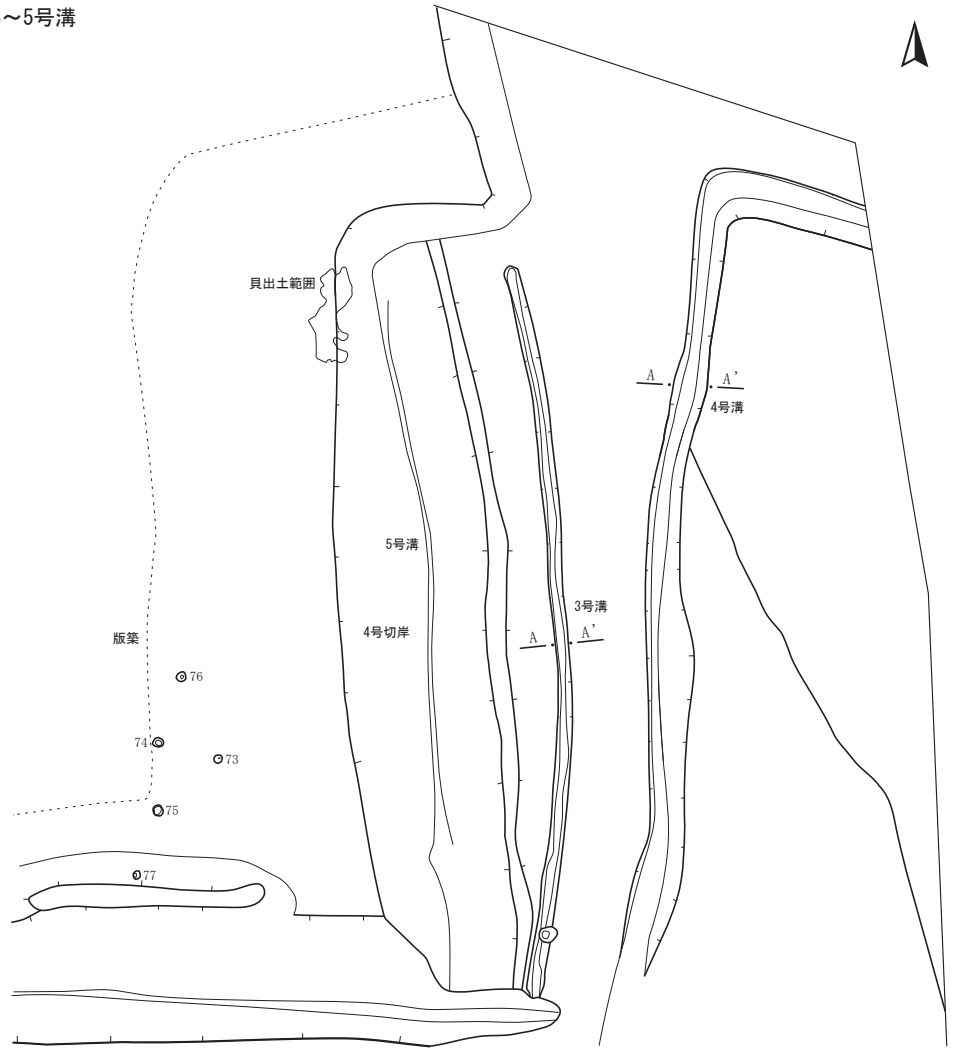
柱穴は81個ある。それらは主郭北側を中心に、その南東・南西隅で確認している。主郭北側では建物を構成する柱穴を確認できているが、それ以外の箇所においては建物の把握までには至っていない。主郭の北側、２号建物の南側にさらに柱穴が広がりを見せるものの、その様相は判然としない。

出土遺物

当該期の遺物には国産陶器、中国産磁器、鉄製品などがあり、それらについては以下の通りである。その大半は１号堀や版築中からであるが、各遺構の構築時期を特定できるような遺物は極めて少ない。

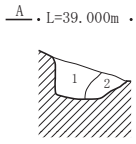
［国産陶器］国産陶器は常滑産陶器の甕（１～77）、在地産の甕（79～96）、古瀬戸産の盤（78）がある。これらのなかで常滑産陶器が主体をなしている。これらは欠損品が多いためその様相については

3～5号溝



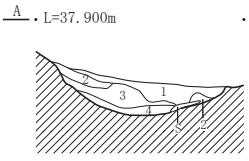
0 (1：200) 5m

3号溝



1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性、しまり共にやや強い。φ1～10㎜の礫を少量含む。
2. 褐色土(10YR4/6) 粘性、しまり共に強い。地山崩落土。

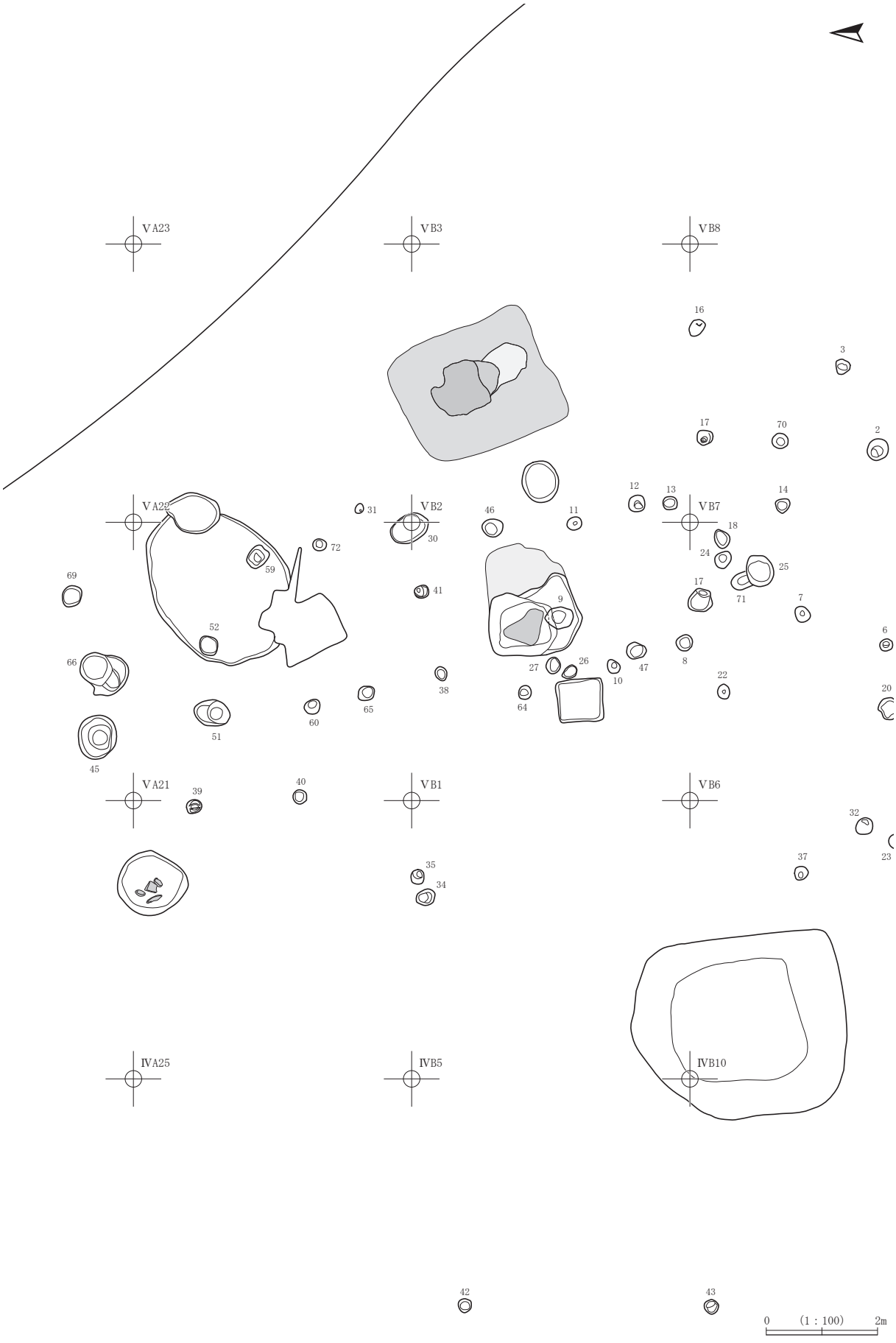
4号溝



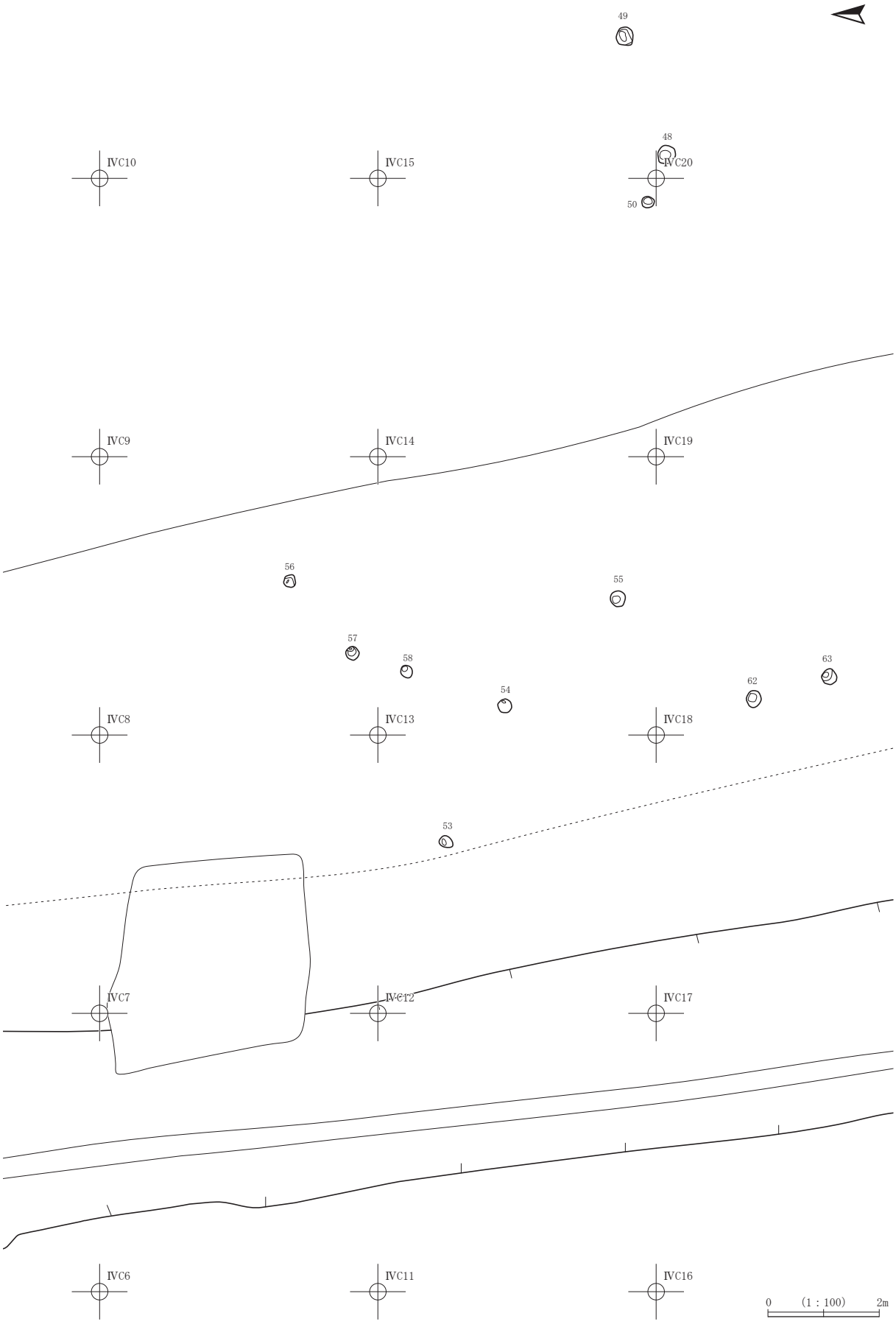
1. 黒褐色土(10YR3/1) 粘性なし しまり弱い 表土
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粘性、しまり共に強い 地山崩落土。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘性やや強く、しまり強い。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性しまり共に強い 崩落度ブロック少量混入。

0 (1：40) 1m

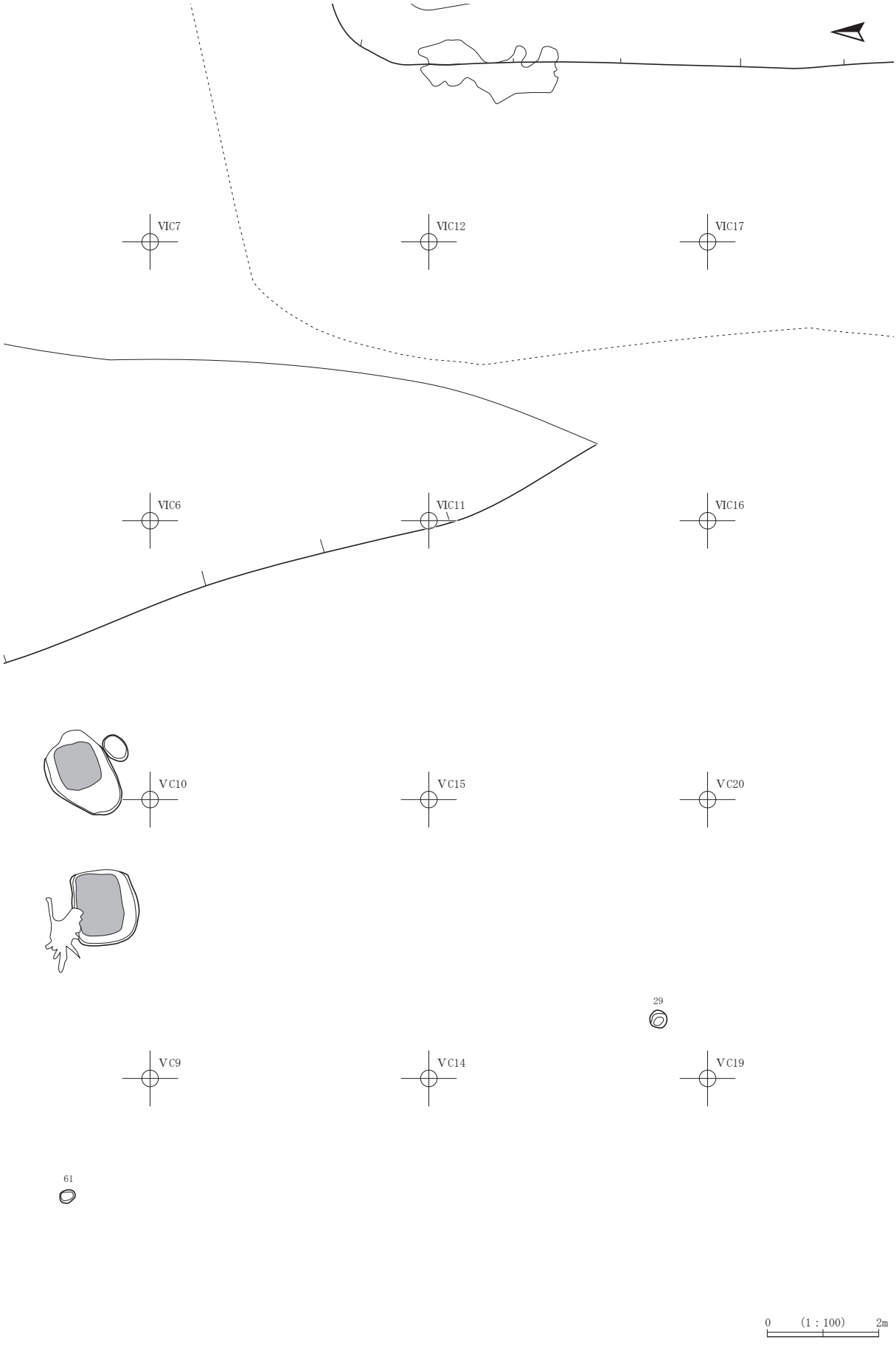
第25図 3～5号溝



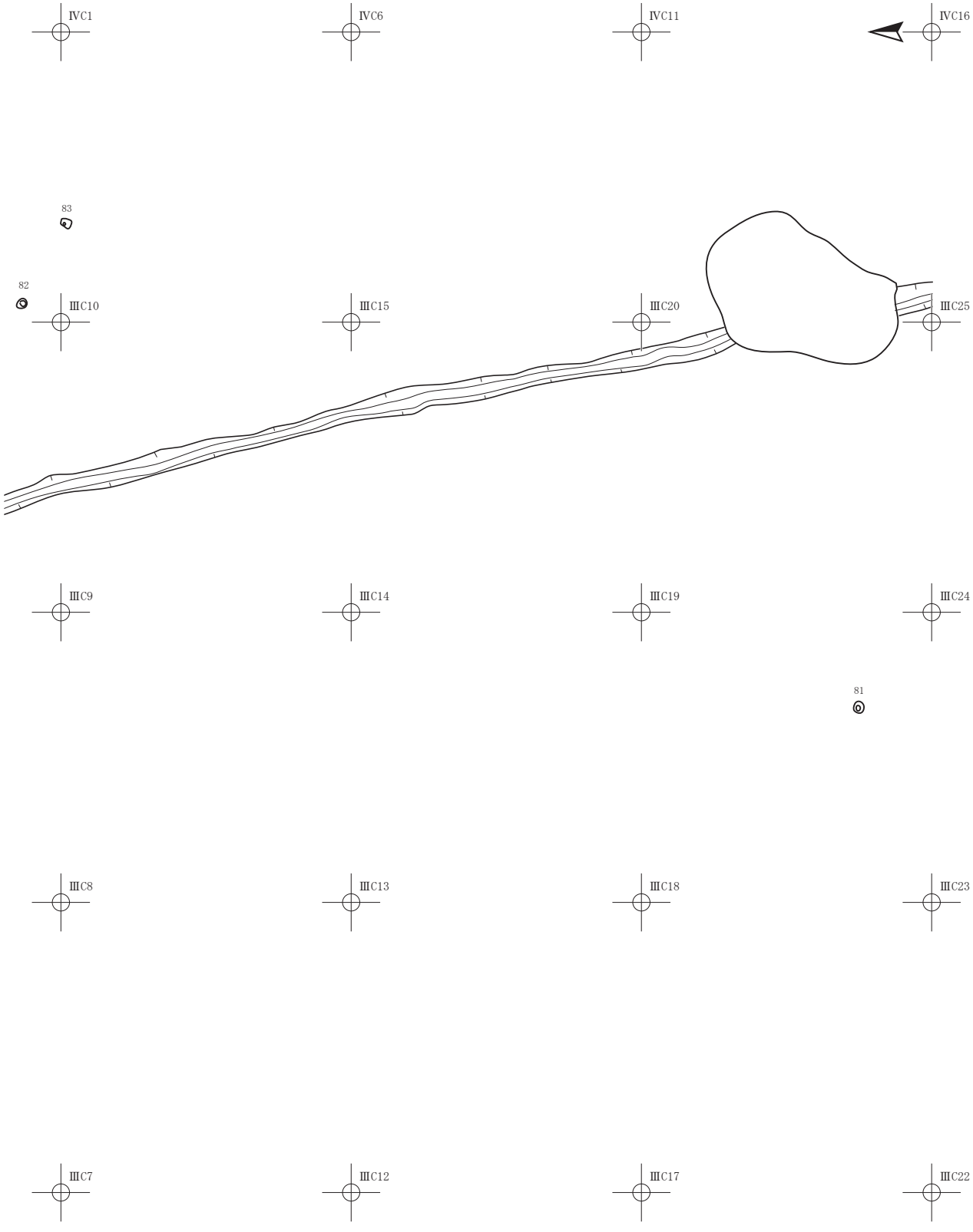
第26図　柱穴分割図（1）


49
48
IVC10
IVC15
IVC20
50
IVC9
IVC14
IVC19
56
55
57
58
54
63
62
IVC8
IVC13
IVC18
53
IVC7
IVC12
IVC17
IVC6
IVC11
IVC16
0 (1 : 100) 2m

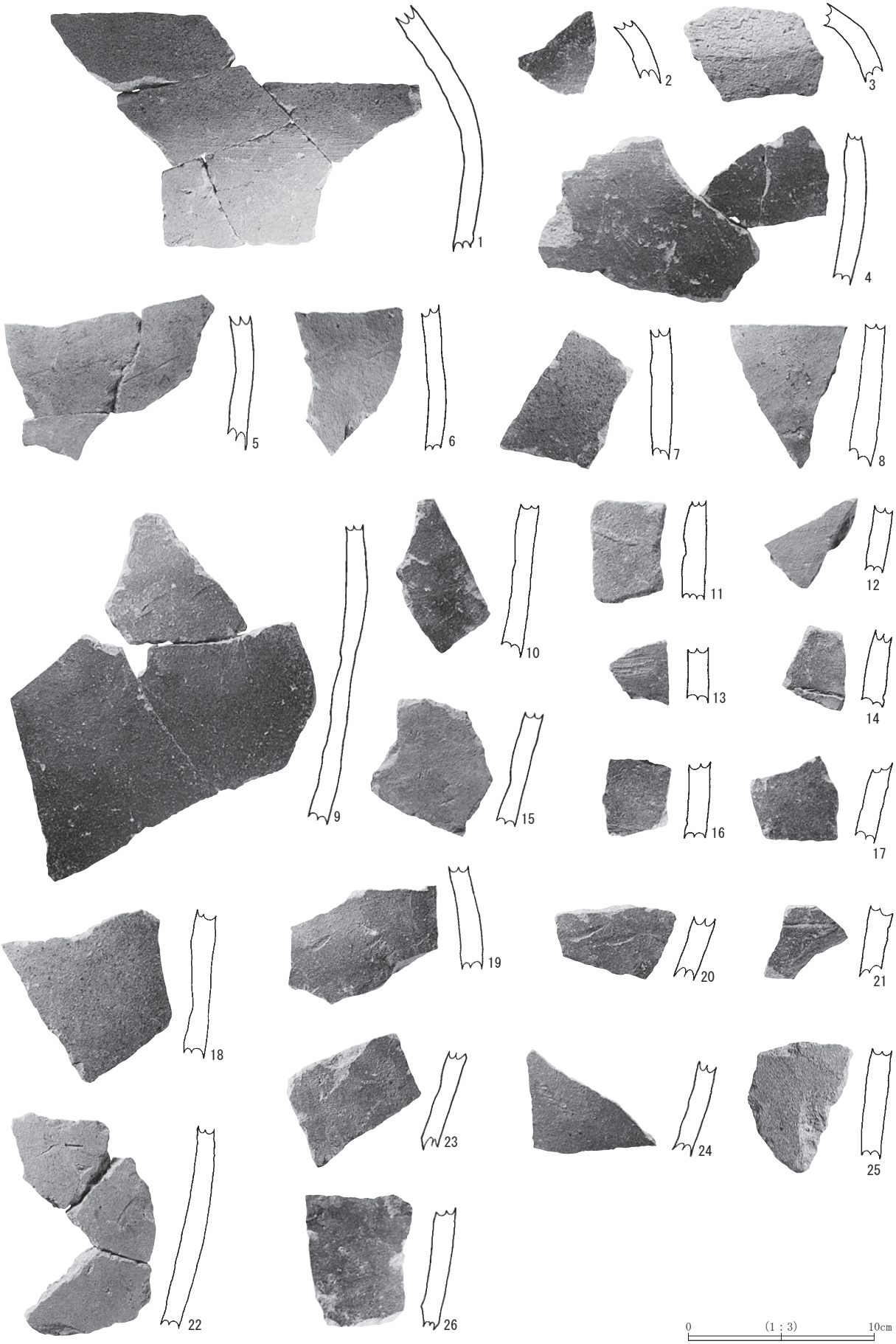
第27図　柱穴分割図（２）


ⅥC7
ⅥC12
ⅥC17
ⅥC6
ⅥC11
ⅥC16
ⅤC10
ⅤC15
ⅤC20
29
ⅤC9
ⅤC14
ⅤC19
61
0 (1：100) 2m

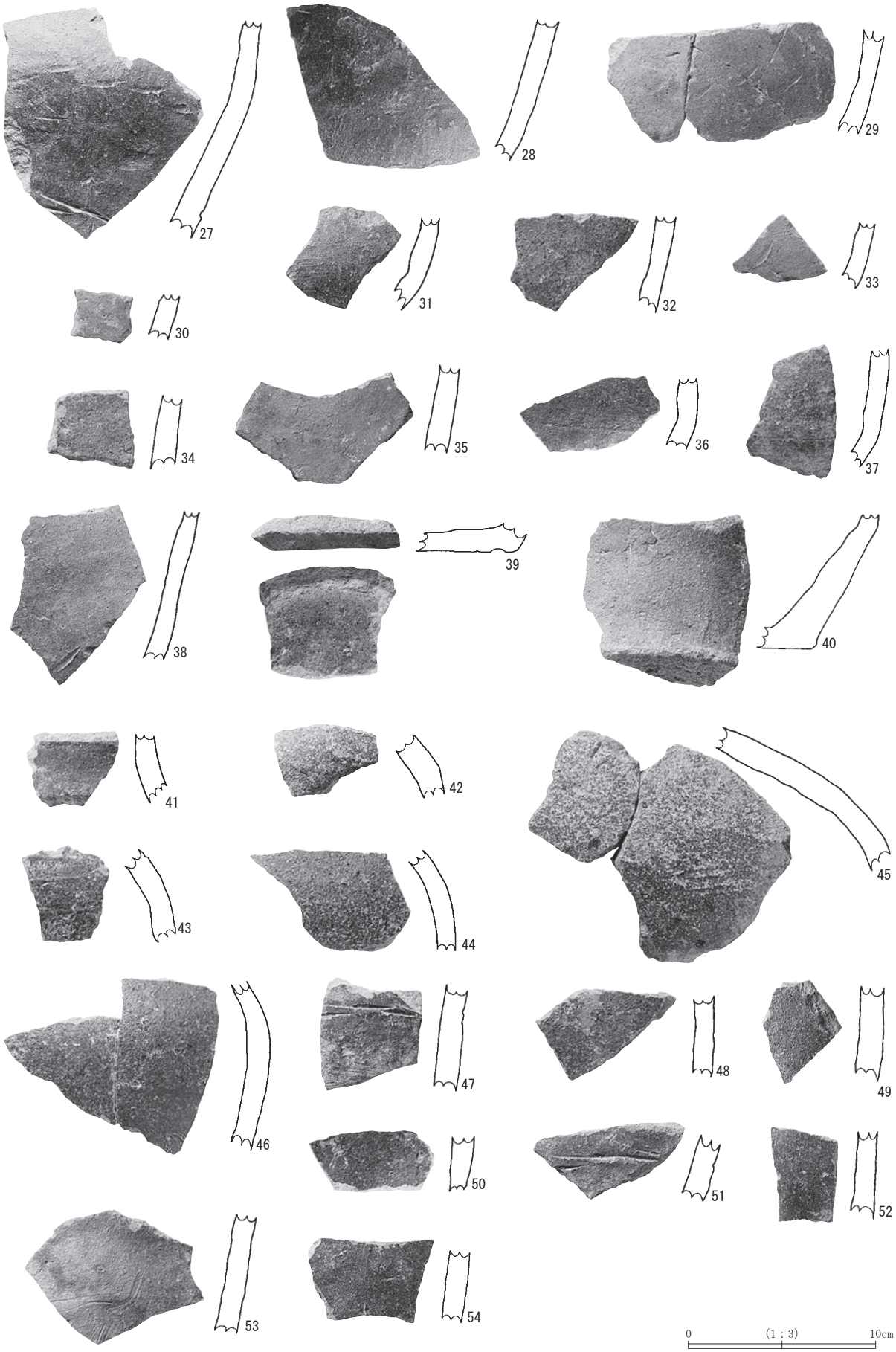
第28図　柱穴分割図（3）


ⅣC1
ⅣC6
ⅣC11
ⅣC16
83
82
ⅢC10
ⅢC15
ⅢC20
ⅢC25
ⅢC9
ⅢC14
ⅢC19
ⅢC24
81
ⅢC8
ⅢC13
ⅢC18
ⅢC23
ⅢC7
ⅢC12
ⅢC17
ⅢC22
0 (1：100) 2m

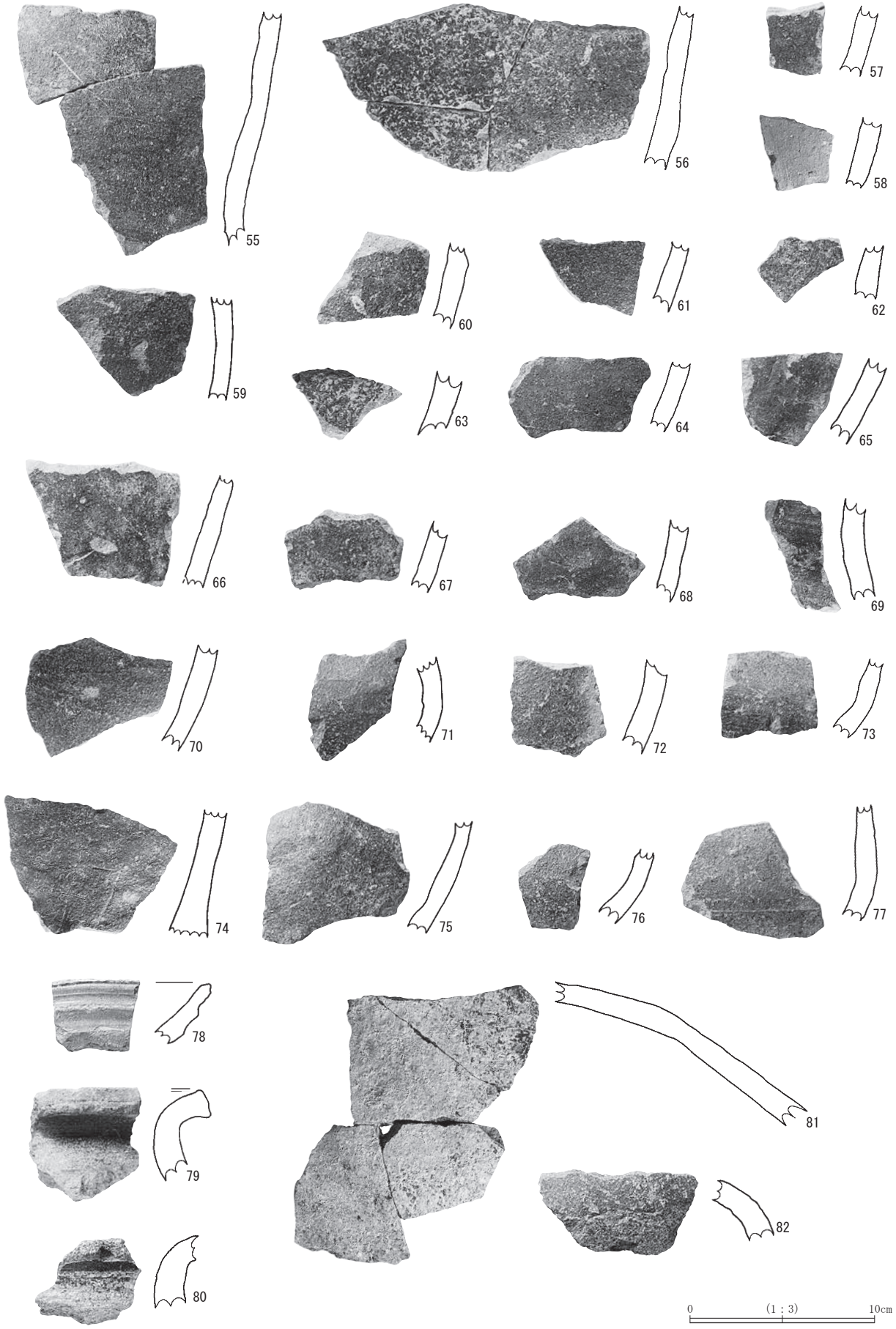
第29図　柱穴分割図（４）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
(1 : 3)
10cm

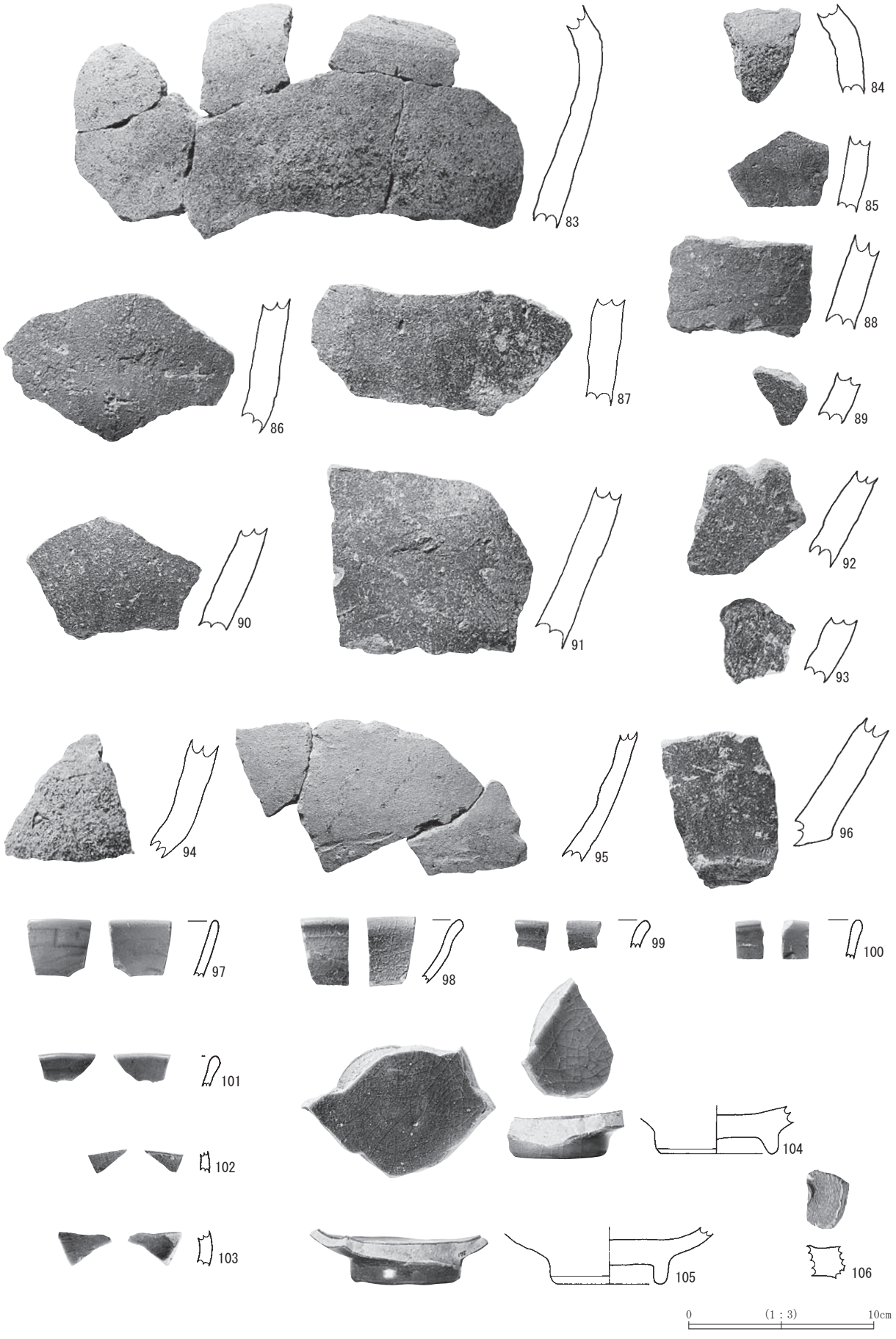
第30図　出土遺物（１）


27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
0
(1：3)
10cm

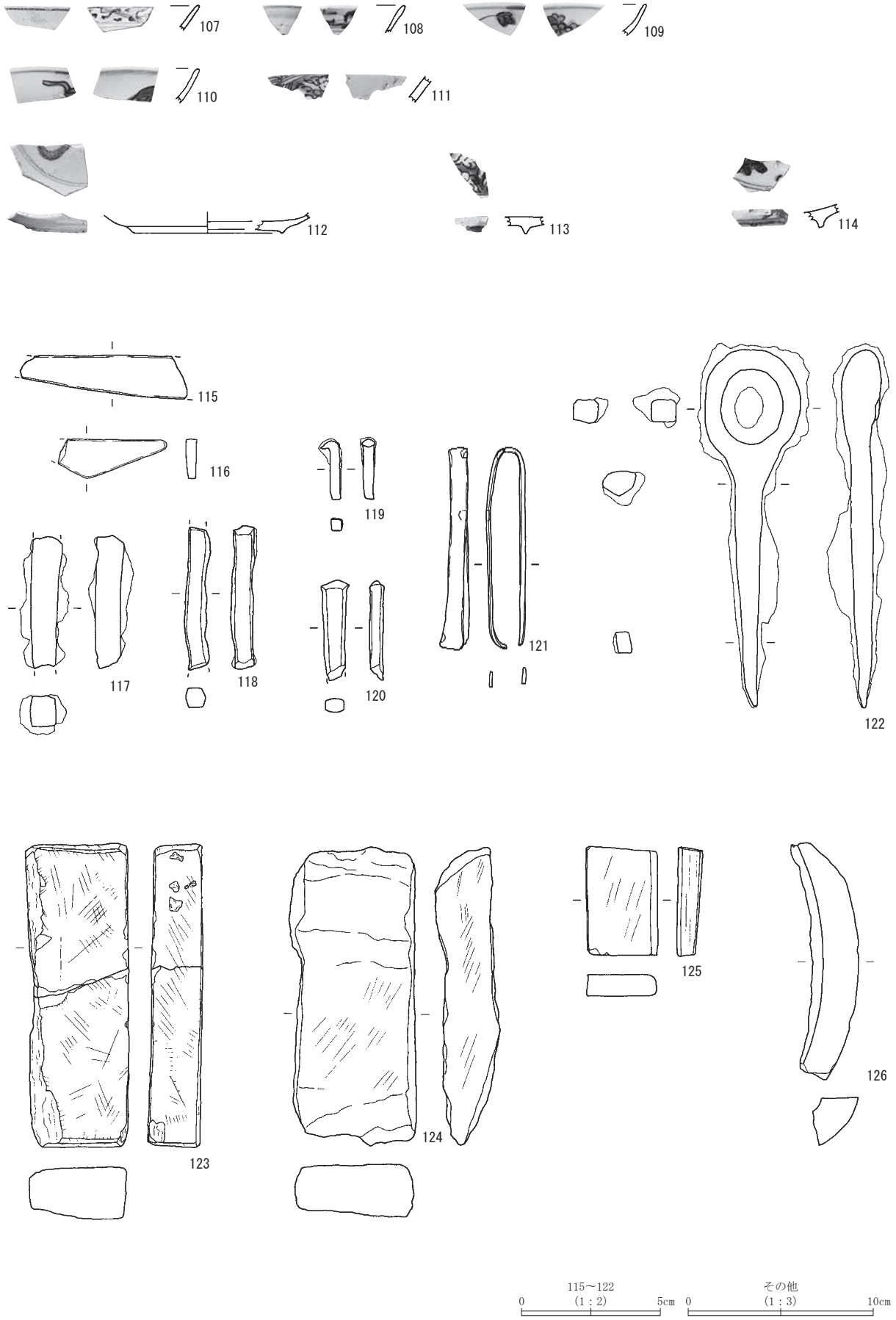
第31図　出土遺物（２）


55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
0
(1：3)
10cm

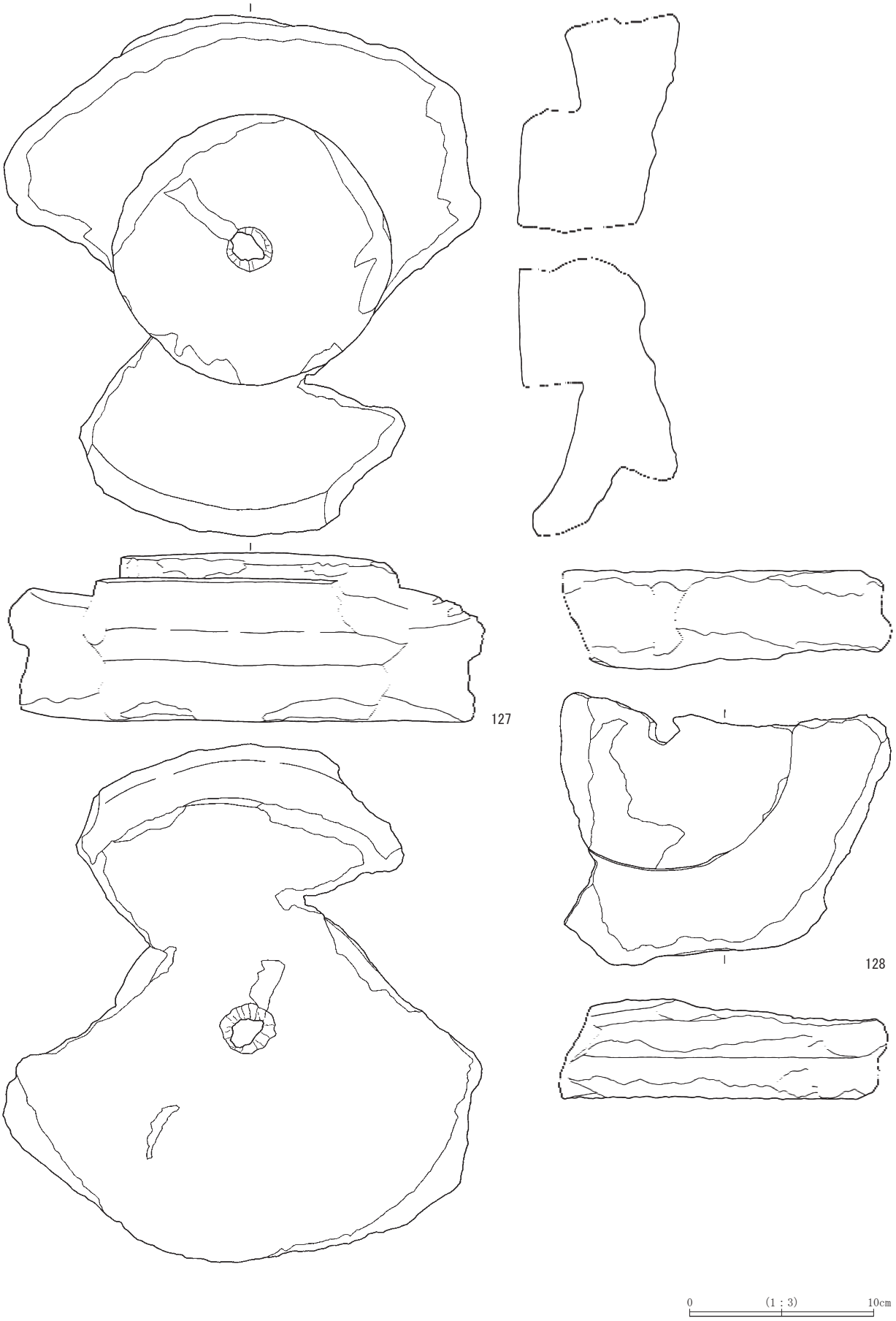
第32図　出土遺物（３）


83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
0
(1 : 3)
10cm

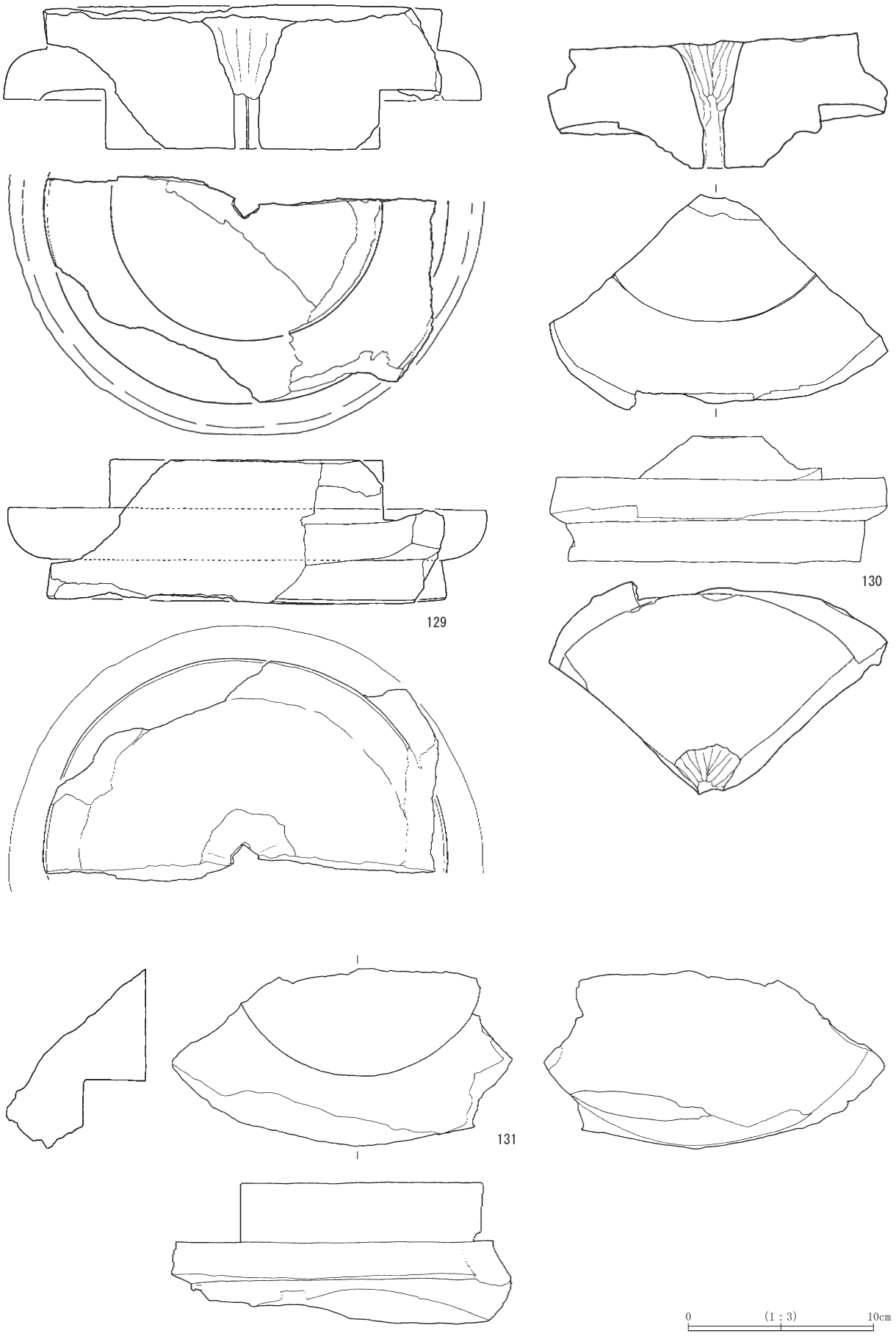
第33図　出土遺物（４）


107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
115～122
(1：2)
0
5cm
その他
(1：3)
0
10cm

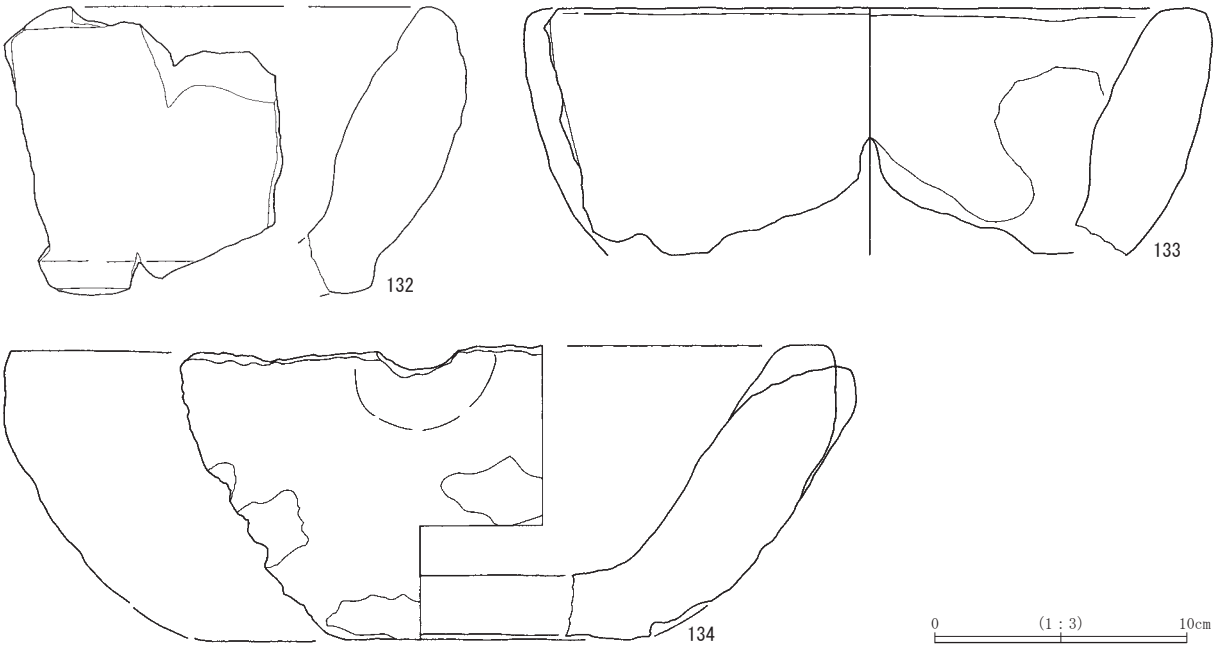
第34図　出土遺物（５）



第35図　出土遺物（6）



第36図　出土遺物（7）



第37図　出土遺物（８）

判然としていない。常滑産甕には、釉薬が認められず器厚が薄いもの（１～40）と釉薬が認められる器厚がやや厚いもの（41～77）がある。両者は出土層位が混在しているため、釉薬の有無をもって時期区分の基準とすることに対しては難しい状況にある。このことを前提として検討すると、当該資料の年代については遺構形成時期と伴出する遺物から判断せざるを得ない。その結果、本遺跡の遺構形成時期は15・16世紀代に分けられることから、前者が15世紀代、後者が16世紀代と想定することができる。ただし、前者については、13・14世紀代とご教示を受けたこともあるため、上記の基準が不明瞭であることも否めない。このように今回の報告では、13～14世紀代に相当する時期の遺構は確認できないうえに、県内に当該期の資料が少ないことからも、上記の基準を設けて捉えておきたい。

在地産は１個体分のみの出土である。口縁部形態が当該期の一般的な口縁部とは異なり、特徴的な形状である。また、胎土が粗く、自然釉が認められる。これらは上記の国産陶器に見られないことから在地産と判断している。

古瀬戸は１点のみの出土であり、その様相は判然としない。

［中国産磁器］青磁碗（97～106）、染付碗（107～114）である。破片資料が大半で有り、青磁碗は龍泉窯で、15世紀代である。これらの中には雷文帯（97）が認められるものがある。染付碗は景徳鎮窯で、16世紀代である。

［鉄製品］刀子（115・116）、釘（117～120）、毛抜（121）、縫針（122）などがある。

［石製品］砥石（123～125）、茶臼（127～131）、坩堝（132～134）などがある。坩堝はいずれも内面が焼けこげ、外面が赤く変色している。鍛冶炉で鋳物などが行われた可能性が考えられる。

［鉄滓］鉄滓は１点出土している。それは分析の結果、椀形鍛冶滓とのことであった。また、鉄滓と判断して分析したものが１点あるが、それは鍛造品であることが判明している。

3　その他の時期の遺構・遺物

１号住居状遺構

［位置］ＶＡ21グリッドに位置しており、標高43.5ｍの頭頂部に形成されている。P52・59、６号土坑と重複しており、本遺構の方が古い。［形状・規模］平面形は楕円形である。規模は2.98×2.36ｍ、深さが20～30㎝である。［堆積土］黒褐色土が主体で３層に細分される。［壁・底面］壁は外傾して立ち上がる。底面は若干の凹凸が認められるものの概ね皿状である。［遺物］土器3,161.8ｇが出土している。これらの大半は１層からの出土であり、床面付近では殆ど認められない。135～144は甕形土器である。口縁には135がRL縄文、137・139が附加条？が施文されている。これらは体部の括れ部分から下位にかけて附加条？が施文されており、頸部には無文帯が認められている。また、137のように刺突列が施されているものもある。これらは弥生時代後期の特徴として捉えられるものである。［遺構時期］出土土器から弥生時代後期に属する。

２号住居状遺構

［位置］ＶＣ20、ＶＤ１グリッドに位置しており、標高41.7ｍの頭頂部縁辺に形成されている。４号土塁と重複しており、本遺構の方が古い。［形状・規模］平面形は不整の半楕円形である。規模は南北3.32×東西3.34ｍ、深さが20㎝前後である。［堆積土］黒褐～暗褐色土主体で２層に細分される。１層からは炭化材が大量に含まれている。［壁・底面］壁は外傾から直立して立ち上がる。底面は斜面と平行するように緩やかに傾斜しているものの、概ね平坦である。［遺物］２層中より土器224.5ｇが出土している。磨滅した破片が多く、掲載できたものは１点のみである。不掲載の多くは１号住居状遺構と同じく体部に附加条？が認められるものである。145はミニチュア土器の脚部である。［遺構時期］出土土器から弥生時代後期に属する。［備考］堆積土１層中より出土した炭化材を年代測定しており、1450-1491calADと得られている。これは土塁直下に位置することから、土塁以前の生産活動の年代、構築年代の上限を示すものと思われる。

SK01

［位置］ⅣＤ18グリッドに位置しており、標高38.4～38.8ｍの斜面上に形成されている。［形状・規模］平面形は不整楕円形である。規模は3.28×1.99ｍ、深さが42～51㎝である。［壁・底面］壁は外傾しており、北壁のみ段を有する。底面は傾斜するものの概ね平坦な面が形成されている。さらに、その平坦面には柱穴状の小さな土坑が認められる。また、部分的に焼土が広がる。［堆積土］褐色土を主体に15層に細分される。中位と底面では焼土を確認している。［出土遺物］弥生土器や陶磁器などが出土している。［備考］最下層から出土した炭化材を年代測定しており、918-966calADと得られている。

出土遺物

中世以外の時期の遺物については以下の通りであり、弥生時代から近世にかけての遺物が認められている。これらは表土や攪乱から出土したものである。

［弥生］土器は弥生時代後期の甕形土器である（146～153）。いずれの土器も器厚が極めて薄く、附加条？が施文されているものと沈線が施文されているものがある。所属時期については、１号住居状遺構出土土器と類似していることから判断している。147～149は基本的に附加状？、また沈線によ

り150が山形文、151～153が格子状に施されている。

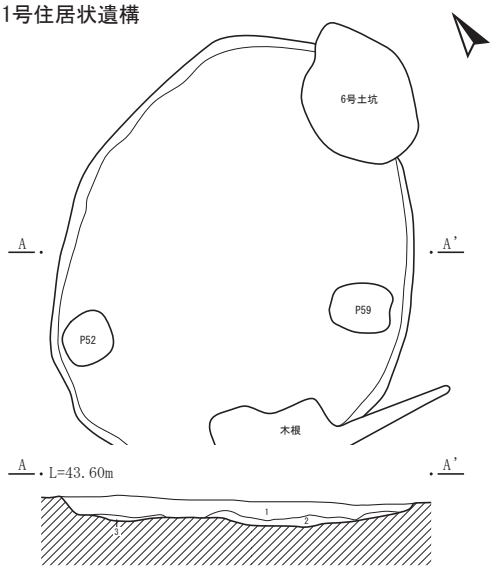
石器は頁岩製石匙（154）で、土器と同時期のものと思われる。

［古代］土器は内外面黒色処理の土師器坏（155）、須恵器甕（156・157）がある。いずれの土器も破片であるが、土師器の特徴から所属年代は９世紀以降と想定される。ただし、須恵器の年代については判然としない

［近世］陶磁器は肥前産磁器（158～164）と相馬産陶器（166～168）、在地産陶器（169～171）がある。肥前産は18世紀代と相馬産は概ね19世紀代と捉えられるが、在地産の時期については判然としない。

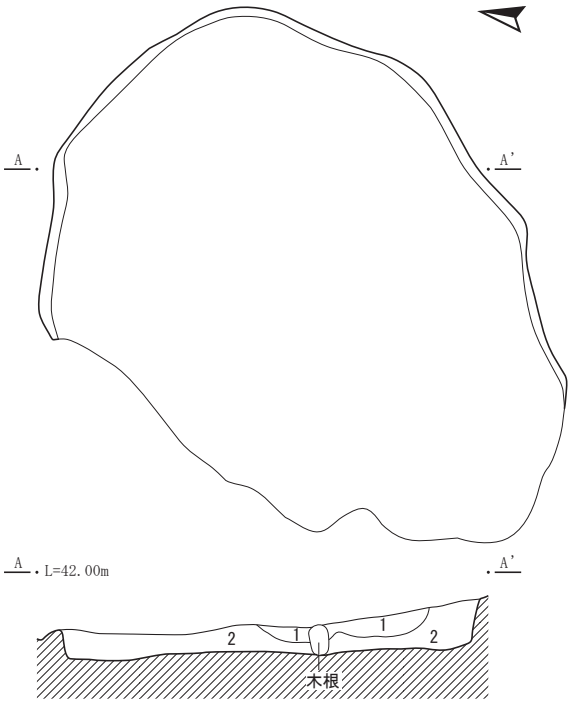
銭貨は寛永通寶（172～174）、雁首銭（175）がある。

1号住居状遺構



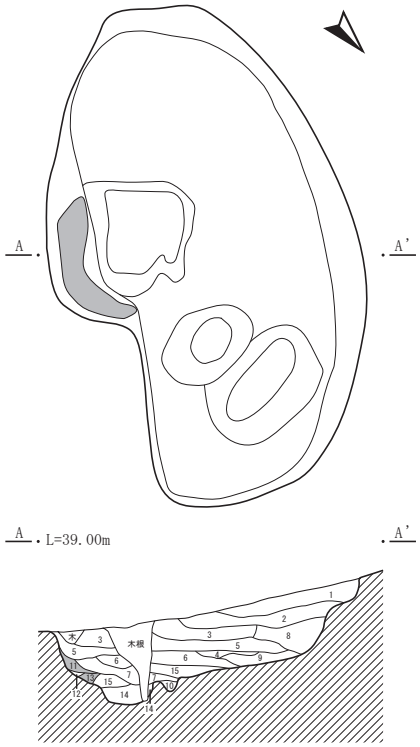
1. 黒褐色土(10YP3/2)　粘性並、しまり強い。上部に土器を含む。
2. 褐色土 (10YR4/4)　粘性、しまり共に強い。地山崩落土に近い。
3. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性やや強く、しまり強い。

2号住居状遺構



1. 黒褐色土(10YR3/2) 粘性やや強く、しまり強い。炭化粒を多く含む。
2. 暗褐色土(10YR3/4) 粘性、しまり共に強い。炭化粒を少量含む。

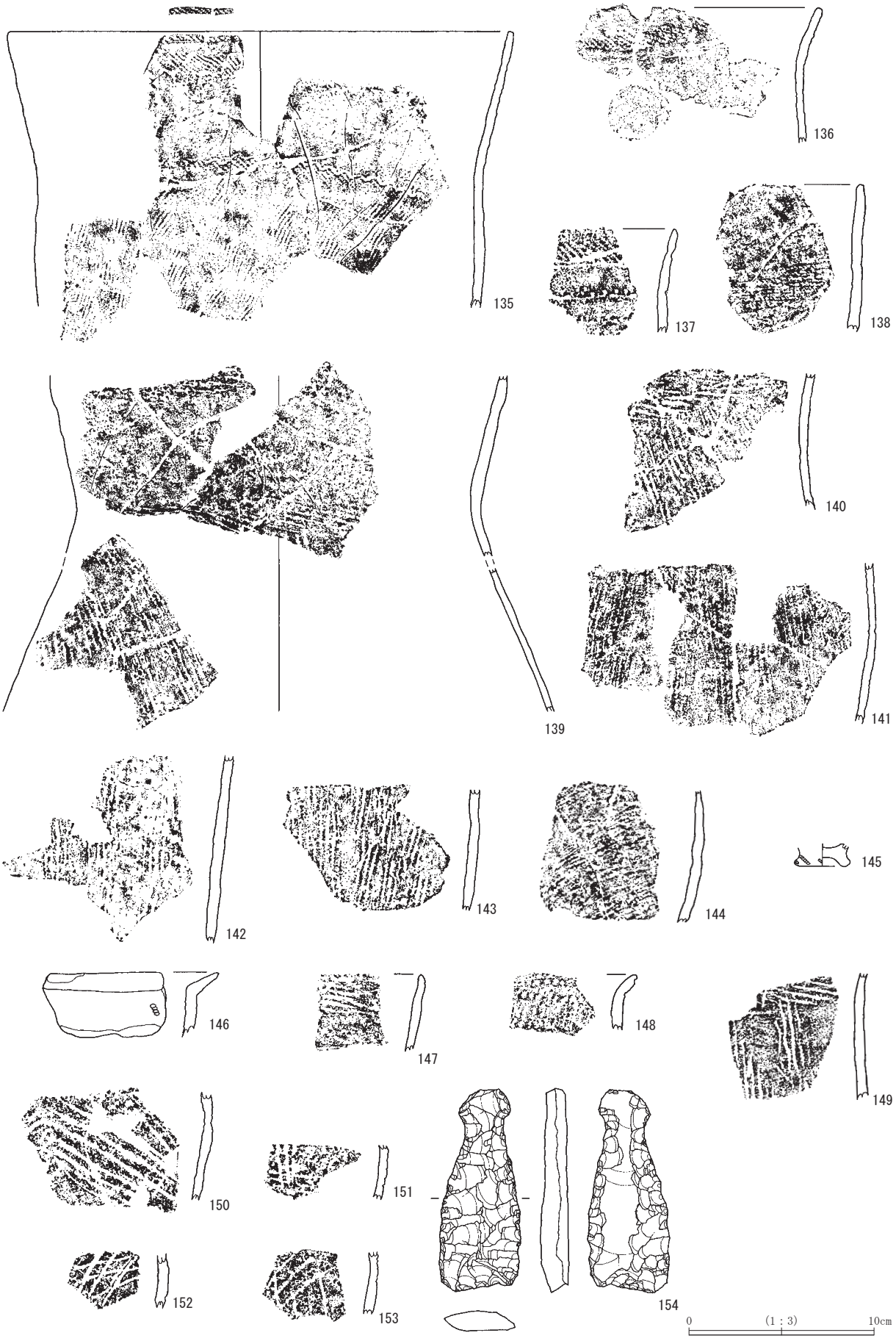
1号土坑



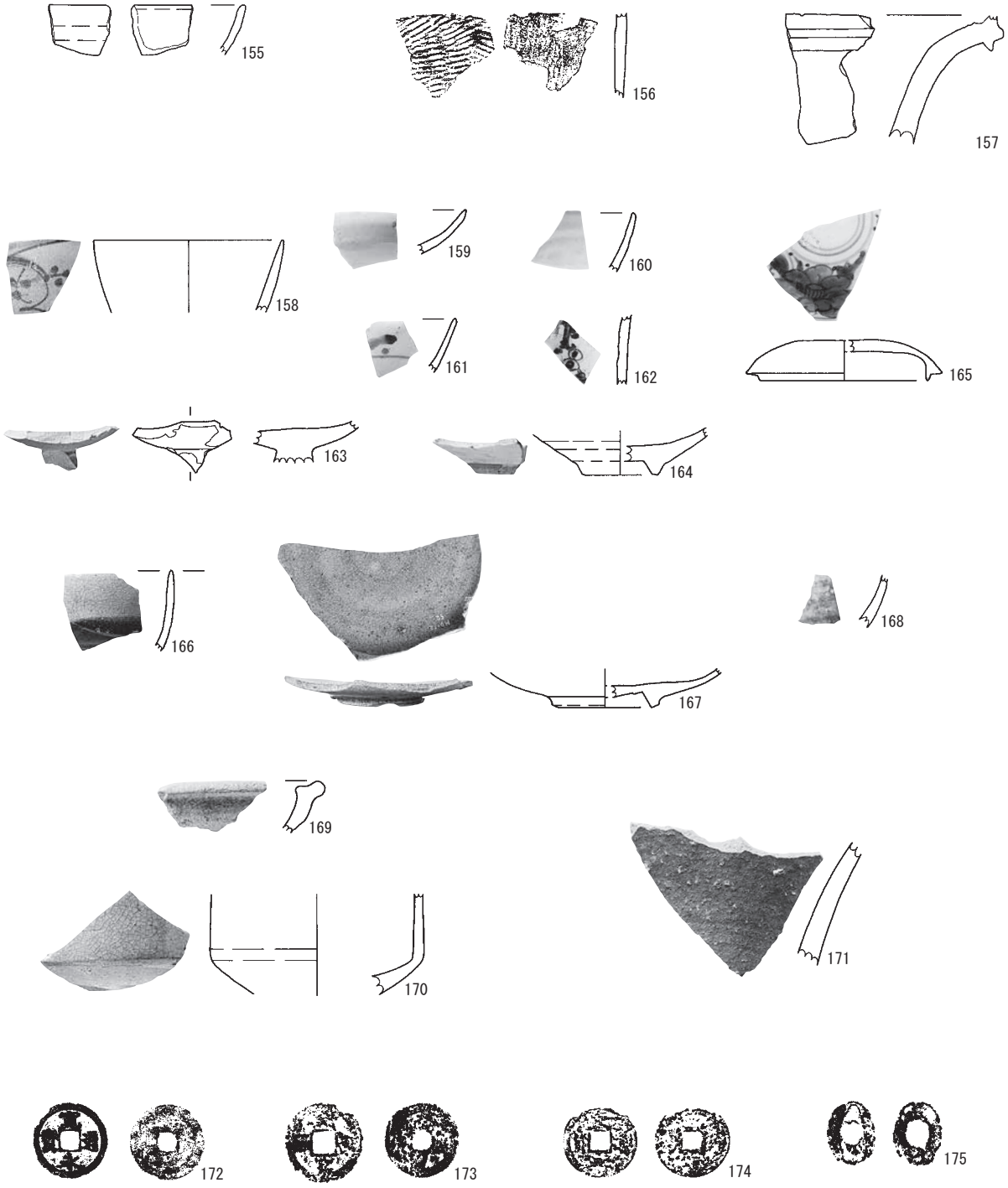
1. にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性並しまりやや強い　1mmの炭化粒を微量含む。
2. 褐色土(10YR4/4)　粘性しまりやや強　炭化材を多量に含む。
3. 褐色土(7.5YR4/4)　粘性しまり共に強い　地産ブロック、炭化粒、焼土をやや多く含む。
4. 赤褐色土(5YR4/6)　焼土、粘性なし　しまり強い。
5. 褐色土(7.5YR4/3)　粘性やや強く　しまり強い　3層に類似するか　混入物がなくなる。
6. 黄褐色土(10YR5/6)　粘性しまり共に強い　地産ブロック
7. 褐色土(7.5YR4/6)　粘性しまり共に強い　地産ブロック、焼土を少量含む。
8. 褐色土(10YR4/6)　粘性やや強く　しまり強い。砂、地産ブロックを少量含む。
9. 黄褐色土(10YR5/8)　粘性しまり共に強い　地産崩落土
10. 暗褐色土(10YR3/4)　15層に類似。
11, 13. にぶい赤褐色土(5YR4/4)　焼土、粘性なし、しまり強い。
12. 黒色土(10YR1.7/1)　炭化物　粘性なし、しまり並。
14. 暗褐色土(10YR3/3)　粘性やや強く、しまりやや強い。
15. 暗褐色土(10YR3/4)　粘性強く、しまりやや強い　焼土、炭化粒をやや多く含む。

0　(1：50)　1m

第38図　１・２号住居状遺構、１号土坑


135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
0
(1：3)
10cm

第39図　出土遺物（９）


155
156
157
158
159
160
161
162
165
163
164
166
168
167
169
171
170
172
173
174
175
172～175
(1：2)
0
5cm
その他
(1：3)
0
10cm

第40図　出土遺物（10）

第２表－１　柱穴観察表

番号	検出位置	平面形	堆積土	規模(cm)	深さ(cm)	底面標高(cm)	混入物、出土遺物
1	ⅤB7	楕円	灰黄褐色土　10YR5/2	29×24	50	42.790	
2	ⅤB7	円	灰黄褐色土　10YR5/2	41×37	66	42.695	
3	ⅤB7	不整	灰黄褐色土　10YR5/2	28×26	41	42.890	
4	ⅤB7	不整	灰黄褐色土　10YR5/2	24×22	57.5	42.665	
5	ⅤB12	楕円	灰黄褐色土　10YR5/2	37×30	10	43.155	
6	ⅤB6	円	灰黄褐色土　10YR5/2	23×21	42.5	42.945	
7	ⅤB6	楕円	灰黄褐色土　10YR5/2	29×25	51	42.910	
8	ⅤB1	円	黄褐色土　10YR5/6	29×29	21	43.265	
9	ⅤB1	楕円	黄褐色土　10YR5/6	51×39	21	43.203	
10	ⅤB1	楕円	灰黄褐色土　10YR5/2	27×21	32	43.170	
11	ⅤB1･2	楕円	黄褐色土　10YR5/6	28×22	28.5	43.115	
12	ⅤB2	隅丸方	黄褐色土　10YR5/6	29×29	57.5	42.927	
13	ⅤB2	隅丸方	にぶい黄褐色土　10YR5/3	25×24	20	44.090	
14	ⅤB7	不整	黄褐色土　10YR5/6	27×24	19.5	43.175	
15	ⅤB7	楕円	灰黄褐色土　10YR5/2	23×18	48	42.900	
16	ⅤB7	楕円	灰黄褐色土　10YR5/2	33×24	86.5	42.470	
17	ⅤB6	隅丸方	にぶい黄褐色土　10YR4/3	31×26	89.5	42.490	
18	ⅤB6	楕円	灰黄褐色土　10YR5/2	34×26	16.5	42.670	
20	ⅤB6	不整	褐灰色土　10YR4/1	39×38	10	43.145	
21	ⅤB12	不整	灰黄褐色土　10YR5/2	25×23	83	42.435	
22	ⅤB6	楕円	褐灰色土　10YR4/1	26×22	40.5	43.050	
23	ⅣB10	円	灰黄褐色土　10YR5/2	26×25	84	42.690	
24	ⅤB6	楕円	灰黄褐色土　10YR4/2	32×27	40.5	43.035	
25	ⅤB6	楕円	灰黄褐色土　10YR4/2	59×48	51.5	42.945	
26	ⅤB1	楕円	灰黄褐色土　10YR4/2	31×22	17	43.290	
27	ⅤB1	楕円	灰黄褐色土　10YR4/2	30×26	19	43.275	
28	ⅤB22	楕円	黒褐色土　10YR3/2	36×26	31	42.645	
29	ⅤC14	円	黒褐色土　10YR3/2	32×32	25	42.050	
30	ⅤA21･22	楕円	灰黄褐色土　10YR4/2	72×46	28	43.180	
31	ⅤA22	楕円	灰黄褐色土　10YR4/2	18×15	44	42.950	
32	ⅣB10	円	褐灰色土　10YR4/1	33×30	35	43.150	
34	ⅣB5	楕円	黒褐色土　10YR3/1	35×26	46	43.160	
35	ⅣB5	隅丸方	黒褐色土　10YR3/1	27×23	30.5	43.320	
36	ⅣB15	隅丸方	黒褐色土　10YR3/1	22×22	64.5	42.685	
37	ⅣB10	円	黒褐色土　10YR3/1	25×24	59.5	42.970	
38	ⅤB1	楕円	黒褐色土　10YR3/1	26×21	16.5	43.315	
39	ⅣA25　ⅤA21	円	黒褐色土　10YR3/1	28×24	27.5	43.280	
40	ⅤA21	円	黒褐色土　10YR3/1	26×25	18.5	43.415	
41	ⅤA21　ⅤB1	隅丸方	黒褐色土　10YR3/1	25×23	45	43.010	
42	ⅣB4	円	黒褐色土　10YR3/1	25×24	31.5	43.495	
43	ⅣB9	円	黒褐色土　10YR3/1	26×24	42	43.250	
44	ⅤB21	楕円	黒褐色土　10YR3/2	32×26	39	42.510	
45	ⅤA16	楕円	黒褐色土　10YR3/1	80×70	51.5	42.970	
46	ⅤB1･2	楕円	灰黄褐色土　10YR4/2	36×32	47	42.905	
47	ⅤB1	不整	灰黄褐色土　10YR4/2	35×30	20.5	43.265	
48	ⅣC20	不整	黒褐色土　10YR3/1	35×31	45.5	40.450	

第２表－２　柱穴観察表

番号	検出位置	平面形	堆積土	規模(cm)	深さ(cm)	底面標高(cm)	混入物、出土遺物
49	ⅣC15	不整	黒褐色土　10YR3/1	36×32	34	40.960	
50	ⅣC14	円	黒褐色土　10YR3/1	22×22	19.5	40.590	
51	ⅤA21	楕円	黒褐色土　10YR3/1	65×48	58	42.925	
52	ⅤA21	隅丸方	黒褐色土　10YR3/1	38×34	18.5	43.130	
53	ⅣC12	楕円	黒褐色土　10YR2/2	26×20	82	39.100	
54	ⅣC13	円	黒褐色土　10YR2/2	24×24	88	39.135	
55	ⅣC13	円	黒褐色土　10YR2/2	29×28	39	39.635	陶磁器1点出土
56	ⅣC8	隅丸方	黒褐色土　10YR2/2	23×23	59	39.780	
57	ⅣC8	隅丸方	黒褐色土　10YR2/2	24×23	42.5	39.710	
58	ⅣC13	円	黒褐色土　10YR2/2	24×21	46	39.364	陶磁器1点出土
59	ⅤA21	隅丸方	黒褐色土　10YR3/1	40×34	135.5	42.820	
60	ⅤA21	円	灰黄褐色土　10YR4/2	29×26	45	43.130	
61	ⅤC３	楕円	黒褐色土　10YR3/1	28×22	7.5	42.455	焼土混じり
62	ⅣC18	楕円	黒褐色土　10YR2/2	31×27	46.5	39.320	
63	ⅣC18	隅丸方	黒褐色土　10YR2/2	28×28	60.5	39.120	
64	ⅤB1	円	灰黄褐色土　10YR4/2	24×22	19.5	44.155	
65	ⅤA21	不整	灰黄褐色土　10YR4/2	34×26	39	43.165	
66	ⅤA16	楕円	黒褐色土　10YR3/1	88×82	62	42.835	
67	ⅤD13	円	にぶい黄褐色土　10YR5/4	19×17	28	41.010	
68	ⅤD13	楕円	にぶい黄褐色土　10YR5/4	22×18	14.5	41.210	
69	ⅤA16	楕円	褐灰色土　10YR4/1	41×35	44	42.880	
70	ⅤB7	円	褐灰色土　10YR4/1	30×29	76	42.630	
71	ⅤB6	楕円	褐灰色土　10YR4/1	32×28	27	43.220	
72	ⅤA21	円	灰黄褐色土　10YR4/2	24×22	27.5	43.175	
73	ⅥC21	円	暗褐色土　10YR3/4	24×22	42.5	41.180	
74	ⅥC21	楕円	暗褐色土　10YR3/4	28×22	25	41.455	
75	ⅥC21	隅丸方	暗褐色土　10YR3/4	30×29	26	41.540	
76	ⅥC21	円	暗褐色土　10YR3/4	24×24	44.5	40.810	
77	ⅥD1	不整	暗褐色土　10YR3/4	24×18	58	40.960	
78	ⅢD5	楕円	灰黄褐色土　10YR4/2	26×16	42.5	35.705	
79	ⅢD2	楕円	灰黄褐色土　10YR4/2	18×16	12.5	38.120	
80	ⅢC21	隅丸方	灰黄褐色土　10YR4/2	22×18	43.5	37.855	
81	ⅢC18	円	灰黄褐色土　10YR4/2	18×18	15	33.015	
82	ⅢC5	不整	灰黄褐色土　10YR4/2	18×16	15	32.725	
83	ⅢC5	円	灰黄褐色土　10YR4/2	22×18	48	34.425	

第３表－１　陶磁器観察表

掲載No		器種	部位	出土地点	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	釉薬	絵付	産地	年代
1	陶器	甕	体部	１号堀　版築	埋土　埋土中～上位	-	<12.7>	-			常滑産	15ｃ代
2	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.4>	-			常滑産	15ｃ代
3	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<4.1>	-			常滑産	15ｃ代
4	陶器	甕	体部	1号堀・1号切岸、1号性格不明遺構　版築	埋土　埋土中位　埋土中～上位	-	<8.0>	-			常滑産	15ｃ代
5	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<7.1>	-			常滑産	15ｃ代
6	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<7.5>	-			常滑産	15ｃ代
7	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<7.1>	-			常滑産	15ｃ代
8	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<7.5>	-			常滑産	15ｃ代
9	陶器	甕	体部	主郭　１号堀・１号切岸	検出面　埋土	-	<16.2>	-			常滑産	15ｃ代
10	陶器	甕	体部	版築	直下	-	<8.2>	-			常滑産	15ｃ代
11	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<5.4>	-			常滑産	15ｃ代
12	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.4>	-			常滑産	15ｃ代
13	陶器	甕	体部	２号堀	埋土	-	<2.8>	-			常滑産	15ｃ代
14	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.7>	-			常滑産	15ｃ代
15	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<6.0>	-			常滑産	15ｃ代
16	陶器	甕	体部	表採	－	-	<4.0>	-			常滑産	15ｃ代
17	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<4.2>	-			常滑産	15ｃ代
18	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<7.7>	-			常滑産	15ｃ代
19	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<5.5>	-			常滑産	15ｃ代
20	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<5.8>	-			常滑産	15ｃ代
21	陶器	甕	体部	版築	埋土上位	-	<2.9>	-			常滑産	15ｃ代
22	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<11.6>	-			常滑産	15ｃ代
23	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<5.0>	-			常滑産	15ｃ代
24	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<5.1>	-			常滑産	15ｃ代
25	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<5.9>	-			常滑産	15ｃ代
26	陶器	甕	体部	版築	埋土上位	-	<6.6>	-			常滑産	15ｃ代
27	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<11.3>	-			常滑産	15ｃ代
28	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<7.8>	-			常滑産	15ｃ代
29	陶器	甕	体部	１号堀　版築	検出面　直下	-	<5.2>	-			常滑産	15ｃ代
30	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<2.4>	-			常滑産	15ｃ代
31	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<4.9>	-			常滑産	15ｃ代
32	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<5.2>	-			常滑産	15ｃ代
33	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.5>	-			常滑産	15ｃ代
34	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.5>	-			常滑産	15ｃ代
35	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<4.1>	-			常滑産	15ｃ代
36	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<3.8>	-			常滑産	15ｃ代
37	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<6.4>	-			常滑産	15ｃ代
38	陶器	甕	体部	主郭	Ⅰ層	-	<7.9>	-			常滑産	15ｃ代
39	陶器	甕	底部	版築	埋土中～上位	-	<1.0>	-			常滑産	15ｃ代
40	陶器	甕	底～体部	４号土塁	直下	-	<8.3>	-			常滑産	15ｃ代
41	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<2.5>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
42	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<4.9>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
42	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.1>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
43	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<4.5>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
44	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<5.3>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
45	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<6.5>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
46	陶器	甕	体部	主郭　２号切岸	検出面　埋土	-	<9.1>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
47	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<5.3>	-			常滑産	16ｃ代
48	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<4.3>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
49	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<5.0>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
50	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<2.9>	-			常滑産	16ｃ代
51	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<3.1>	-			常滑産	16ｃ代
52	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<4.6>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
53	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<6.3>	-			常滑産	16ｃ代
54	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<3.6>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
55	陶器	甕	体部	１号堀　版築中～上位	埋土	-	<11.9>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
56	陶器	甕	体部	1号堀・号切岸、1号性格不明遺構　版築	埋土　埋土中位　埋土中～上位	-	<8.5>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
57	陶器	甕	体部	版築	埋土上位	-	<4.5>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
58	陶器	甕	体部	４号切岸	埋土	-	<4.4>	-			常滑産	16ｃ代
59	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<5.5>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
60	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<4.5>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
61	陶器	甕	体部	５号土坑	埋土	-	<3.7>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
62	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<2.9>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
63	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<2.5>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代

第３表－２　陶磁器観察表

掲載No		器種	部位	出土地点	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	釉薬	絵付	産地	年代
64	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.7>	-			常滑産	16ｃ代
65	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<4.3>	-			常滑産	16ｃ代
66	陶器	甕	体部	版築	埋土上位	-	<6.9>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
67	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.2>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
68	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<4.0>	-			常滑産	16ｃ代
69	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<4.7>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
70	陶器	甕	体部	５号土塁	検出面	-	<5.7>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
71	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<4.6>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
72	陶器	甕	体部	５号土塁	検出面	-	<4.3>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
73	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<4.0>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
74	陶器	甕	体部	主郭	検出面	-	<6.2>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
75	陶器	甕	体部	土塁	検出面	-	<6.0>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
76	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<4.3>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
77	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<5.9>	-	鉄釉		常滑産	16ｃ代
78	陶器	盤	口縁	１号切岸	埋土	-	<3.2>	-			古瀬戸	15c代
79	陶器	甕	口縁	版築	埋土中～上位	-	<4.1>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
80	陶器	甕	頸部	版築	埋土中～上位	-	<2.4>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
81	陶器	甕	体部	主郭・５号土塁	検出面	-	<7.1>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
82	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.1>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
83	陶器	甕	体部	1号堀・1号切岸、1号性格不明遺構　版築	埋土　埋土中位　埋土中～上位	-	<12.0>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
84	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<4.8>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
85	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<4.8>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
86	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<7.4>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
87	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<5.7>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
88	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<4.3>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
89	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<2.2>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
90	陶器	甕	体部	P55	埋土	-	<4.4>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
91	陶器	甕	体部	１号切岸	埋土	-	<8.3>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
93	陶器	甕	体部	版築	埋土中～上位	-	<3.5>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
94	陶器	甕	体部	１号堀	埋土	-	<6.0>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
95	陶器	甕	体部	１号堀　版築中～上位	埋土	-	<7.0>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
96	陶器	甕	底～体部	１号堀	埋土	-	<5.0>	-	自然釉		在地産？	16ｃ代
97	磁器	青磁碗	口縁部	１号堀	埋土	-	<3.5>	-	青磁釉		中国・龍泉窯	15ｃ前半
98	磁器	青磁碗	口～体部	主郭	検出面	-	<3.4>	-	青磁釉		中国・龍泉窯	15ｃ前半
99	磁器	青磁碗	口縁部	主郭	検出面	-	<1.8>	-	青磁釉		中国・龍泉窯	15ｃ前半
100	磁器	青磁碗	口縁部	主郭	検出面	-	<2.1>	-	青磁釉		中国・龍泉窯	15ｃ代
101	磁器	青磁碗	口縁	主郭	埋土下位	-	<1.6>	-	青磁釉		中国・龍泉窯	15ｃ代
102	磁器	青磁碗	体部	主郭	検出面	-	<1.0>	-	青磁釉		中国・龍泉窯	15ｃ代
103	磁器	青磁碗	体部	主郭	検出面	-	<1.8>	-	青磁釉		中国・龍泉窯	15ｃ代
104	磁器	青磁碗	底～体部	４号切岸版築	直下	-	<2.7>	(5.7)	青磁釉		中国・龍泉窯	15ｃ代
105	磁器	青磁碗	底～体部	１号性格不明遺構	検出面	-	<1.9>	(6.0)	青磁釉		中国・龍泉窯	15ｃ代
106	磁器	青磁皿	底部	表採	－	-	<1.8>	-	青磁釉		中国・龍泉窯	中世
107	磁器	染付碗	口縁部	主郭	検出面	-	<1.3>	-	透明釉		中国・景徳鎮	16ｃ
108	磁器	染付碗	口縁部	表採	－	-	<1.8>	-	透明釉	草花文	中国・景徳鎮	16ｃ
109	磁器	染付碗	口縁	版築	埋土中～上位	-	<2.2>	-	透明釉	草花文	中国・景徳鎮	16ｃ
110	磁器	染付碗	口縁	版築	埋土中～上位	-	<1.6>	-	透明釉	草花文	中国・景徳鎮	16ｃ
111	磁器	染付碗	体部	主郭	検出面	-	<1.2>	-	透明釉	草花文	中国・景徳鎮	16ｃ
112	磁器	染付皿	底～体部	主郭	Ⅰ層	-	<0.9>	(8.0)	透明釉	草花文	中国・景徳窯	15ｃ代
113	磁器	染付碗	底部	主郭	検出面	-	<0.9>	-	透明釉	草花文	中国・景徳鎮	16ｃ
114	磁器	染付碗	底～体部	－	検出面	-	<0.9>	-	透明釉	草花文	中国・景徳鎮	16ｃ
158	磁器	碗	口～体部	２号切岸	埋土	(9.0)	<3.4>	-				
159	磁器	皿	口縁部	主郭	検出面	-	<2.0>	-	透明釉	二重格子文	肥前	18ｃ後半
160	磁器	皿	口～体部	主郭	検出面	-	<2.7>	-	透明釉	草花文	肥前	18ｃ後半
161	磁器	碗	口縁部	主郭	検出面	-	<1.8>	-	透明釉	草花文	肥前	18ｃ
162	磁器	瓶・徳利	体部	主郭	検出面	-	<3.1>	-	透明釉	草花文	肥前	18ｃ後～19ｃ
163	磁器	仏飯器	底～体部	表採	－	-	<2.5>	-			不明	19ｃ？
164	磁器	瓶	体部	９号土坑	Ⅱ層	-	<1.9>	(3.5)				
165	磁器	蓋		表採	－	-	1.9	(8.0)		草花文	肥前	18ｃ
166	陶器	碗	口～体部	主郭	検出面	-	<3.7>	-			大堀相馬	19c
167	陶器	皿	底～体部	表採	－	-	<1.8>	(4.4)			大堀相馬	19c
168	陶器	碗	体部	１号住居状遺構	埋土上位	-	<1.8>	-			大堀相馬	19c
169	陶器	皿	口縁部	１号堀	埋土	-	<1.8>	-			在地	19ｃ
170	磁器	香炉	体部	表採	－	-	<4.8>	-			在地	19ｃ
171	陶器	擂鉢	体部	副郭	検出面	-	<5.3>	-	鉄釉		在地	19代

第４表　石製品観察表

掲載No	器種	出土地点	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	材料
123	砥石	副郭	表採	16.4	5.6	2.9	532.4	粘板岩
124	砥石	１号堀	埋土上位	16.2	6.9	3.55	573	粘板岩
125	砥石	１号堀	埋土	5.9	3.8	1.3	3200	凝灰岩
126	茶臼	２号切岸	埋土上位	<17.2>	<5.0>	<3.4>	277.7	安山岩
127	茶臼	２号堀	埋土中位	<37.7>	<34.8>	12.2	5190	安山岩
128	茶臼	１号堀	埋土上位	<24.0>	<19.2>	<7.2>	573	安山岩
129	石臼	４号土塁	検出面	(28.7)	(15.9)	10.5	4230	安山岩
130	茶臼	版築	埋土中～上位	<24.4>	<24.7>	9.2	3040	安山岩
131	茶臼	版築	埋土中～上位	<24.6>	<12.7>	<9.8>	2060	安山岩
132	坩堝	１号性格不明遺構	埋土中位	-	<15.3>	-	430	安山岩
133	坩堝	１号性格不明遺構	埋土中位	(34.0)	<13.1>	-	1200	安山岩
134	坩堝	４号切岸	埋土	(44.0)	15.5	(30.6)	2470	安山岩
154	石匙	２号曲輪	検出面	5.6	2.2	0.7	9.2	頁岩

第５表　鉄製品観察表

掲載No	器種	出土地点	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
115	刀子	主郭	検出面	<6.0>	1.5	0.25	9.8	
116	刀子	主郭	検出面	<3.9>	1.4	0.4	6.4	
117	釘	主郭	検出面	<4.7>	1.7	1.4	17.7	
118	釘	主郭	検出面	<5.1>	0.8	0.7	8.7	
119	釘	版築	中～上位	<2.2>	0.8	0.4	1	
120	釘	主郭	検出面	<3.6>	1.0	0.5	5.4	
121	毛抜	４号土塁	検出面	7.3	1.1	0.15	6.3	
122	縫針	主郭	検出面	13.2	4.0	2.1	59	
172	寛永通寶	主郭	検出面	2.3			1.9	
173	寛永通寶	版築	中～上位	2.4			4.7	２点重なっている
174	寛永通寶	版築	中～上位	2.2			1.6	
175	雁首銭	１号堀	埋土上位					

第６表　土器観察表

掲載No		器種		出土地点	層位	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	文様・調整	時代
135	土器	甕	口縁～体部	１号住居状遺構	埋土上位	(27.4)	<15.0>	-	RL、附加条？L	弥生
136	土器	甕	口縁～体部	１号住居状遺構	埋土上位	-	<7.3>	-	ＲＬ	弥生
137	土器	甕	口縁～体部	１号住居状遺構	検出面	-	<5.6>	-	刺突列・RL	弥生
138	土器	甕	口縁～体部	１号住居状遺構	埋土上位	-	<8.0>	-	RL	弥生
139	土器	甕	体部	１号住居状遺構　版築	埋土上位　中～上位	-	<18.2>	-	附加条縄文？Ｌ	弥生
140	土器	甕	体部	１号住居状遺構	埋土上位	-	<7.4>	-	附加条？Ｌ	弥生
141	土器	甕	体部	１号住居状遺構	埋土上位	-	<8.7>	-	附加条？Ｌ	弥生
142	土器	甕	体部	１号住居状遺構	埋土上位	-	<10.2>	-	附加条？Ｌ	弥生
143	土器	甕	体部	１号住居状遺構	埋土上位	-	<4.5>	-	附加条？L	弥生
144	土器	甕	体部	１号住居状遺構	埋土上位	-	<7.2>	-	附加条？Ｌ	弥生
145	土器	ミニチュア	脚部	２号住居状遺構	埋土	-	<1.1>	(2.5)	ＬＲ	弥生？
146	土器	甕	口縁～体部	１号堀	埋土	-	<4.0>	-	ＬＲ	縄文？
147	土器	甕	口縁～体部	主郭	検出面	-	<4.0>	-	附加条？Ｌ	弥生
148	土器	甕	口縁～体部	主郭	検出面	-	<2.9>	-	刺突列・附加条？Ｌ	弥生
149	土器	甕	体部	副郭	検出面	-	<5.8>	-	附加条？Ｌ	弥生
150	土器	甕	体部	副郭　風倒木	埋土	-	<5.8>	-	山形平行沈線	弥生
151	土器	甕	体部	副郭　風倒木	埋土	-	<2.9>	-	平行沈線	弥生
152	土器	甕	体部	副郭　風倒木	埋土	-	<2.9>	-	格子状沈線	弥生
153	土器	甕	体部	副郭　カクラン		-	<3.5>	-	格子状沈線	弥生
155	土師器	坏	口縁～体部	２号堀	埋土	-	<2.4>	-	内外面黒色処理	古代
156	須恵器	甕	体部	主郭	検出面	-	<4.0>	-	外面　タタキ	古代
157	須恵器	甕	口縁	版築	直下	-	<6.0>	-	内外面共に回転ナデ	古代

Ⅵ　自然科学分析

1　放射性炭素年代測定

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

岩手県陸前高田市に所在する花館跡（北緯39°1′13″、東経141°38′37″）の測定対象試料は、４号切岸貝層や鍛冶炉等の遺構から出土した木炭、種子、貝殻の合計15点である（表１）。試料13～15は種実と骨貝類の同定に伴って行われた貝層サンプルの洗い出しによって得られた試料である。貝殻13は貝層サンプルNo.１仮a、貝殻14は貝層サンプルNo.３仮eから各１点、種子15は貝層サンプルNo.１仮bから２点（１試料分）を選定した。貝殻13、14はいずれもコタマガイ、種子15はコムギ胚乳に同定された。４号切岸貝層出土種実・骨貝類全体の同定結果については別稿（種実・骨貝類同定報告）に示している。また、この貝層の検出状況を図版２に示した。

2　測定の意義

遺構の時期を特定する。

3　化学処理工程

（１）木炭、種子の化学処理

１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（２）貝殻の化学処理

１）メス・ピンセットを使い根・土等の付着物を取り除き、超純水に浸し、超音波洗浄を行う。

２）試料の表面を１mol/ℓ（１M）の塩酸を用いて約30％溶かし、汚染された可能性のある部分を除去する（Edg）。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。なお、試料が特に少量の場合、塩酸の処理を行わない場合がある（Non）。

３）試料中の炭酸カルシウム（$CaCO_3$）を分解し、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

以下、（１）４）以降と同じ。

4 測 定 方 法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算 出 方 法

（1）δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。^{14}C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±1σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下1桁を丸めない^{14}C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、試料中の炭素が大気中の二酸化炭素に由来すると考えられる試料に対してIntCal13データベースを、大気中の二酸化炭素とは由来の異なる炭素を含むと考えられる試料に対してMarine13データベースを用い（Reimer et al. 2013）、いずれもOxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用して較正年代を算出した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6 測 定 結 果

測定結果を表1、2に示す。

4号切岸貝層出土試料は木炭2点、種子1点、貝殻2点が測定された。これらの^{14}C年代は、陸生生物由来の木炭1が510±20yrBP、2が380±20yrBP、種子15が370±20yrBP、海生のコタマガイ貝殻13が1020±20yrBP、14が1030±20yrBPである。2と15、13と14の値は誤差（±1σ）の範囲で一致する。陸生の試料にIntCal13、海生の試料にMarine13（marine100%、ΔR=0の条件）を用いて暦年較正を行うと、5点の較正年代（1σ）は、最も古い貝殻14が1309～1385cal ADの範囲、最も新しい

種子15が1464～1618cal ADの間に２つの範囲で示される。

これらの年代値について試料の特性に基づいて検討すると、まず木炭については一般的に古木効果が影響している可能性がある。また貝殻については、今回海洋リザーバー効果の海域差（ΔR）を考慮せずに較正しており、海洋リザーバー効果の補正が適切であるかという問題がある。このため、５点の中では種子15が最も妥当な年代を示し得ると理屈上は考えられる。この点で、木炭２が種子15と誤差範囲で一致する値であることも注目される。木炭２より上位から出土した木炭１は、木炭２より古い年代値を示し、古木効果が影響している可能性がある。このような年代測定の結果と考古学的な所見とをあわせて、今後検討を深める必要がある。

その他の遺構から出土した試料10点のうち、９点（試料３～９、11、12）の^{14}C年代は、390±20yrBP（試料12）から290±20yrBP（試料11）の間に収まり、誤差範囲で一致するものも含まれる。IntCal13によるこれら９点の暦年較正年代（1σ）は、最も古い12が1450～1610cal AD、最も新しい11が1524～1650cal ADの間に各々２つの範囲で示され、相互に重なり合う範囲が少なくない。試料10はこれらよりも明瞭に古く、較正年代（1σ）が888～966cal ADの間に２つの範囲で示される。

同一遺構から複数の試料が測定された結果を検討すると、１号鍛冶炉、３号鍛冶炉、５号鍛冶炉出土試料の年代値は、各２点の値がおおむね近いか、もしくは上下関係と整合する結果となっている。

試料の炭素含有率は、木炭と種子がすべて50％以上、貝殻が100％程度の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-130693	1	４号切岸貝層　上面	木炭	AAA	−24.51±0.44	510±20	93.81±0.27
IAAA-130694	2	４号切岸貝層　直下	木炭	AAA	−25.46±0.54	380±20	95.38±0.26
IAAA-130695	3	１号鍛冶炉　焼土直上	木炭	AAA	−25.81±0.39	310±20	96.17±0.26
IAAA-130696	4	１号鍛冶炉　焼土直下	木炭	AaA	−25.86±0.40	350±20	95.79±0.27
IAAA-130697	5	２号鍛冶炉　焼土直上	木炭	AAA	−25.45±0.44	360±20	95.56±0.27
IAAA-130698	6	３号鍛冶炉　焼土直上	木炭	AAA	−28.80±0.55	310±20	96.22±0.27
IAAA-130699	7	３号鍛冶炉　焼土内	木炭	AAA	−26.85±0.32	350±20	95.69±0.26
IAAA-130700	8	５号鍛冶炉　焼土直上	木炭	AAA	−25.39±0.39	330±20	95.97±0.27
IAAA-130701	9	５号鍛冶炉　土坑内	木炭	AAA	−23.73±0.46	360±20	95.64±0.26
IAAA-130702	10	１号土坑　最下層	木炭	AAA	−26.65±0.46	1,140±20	86.80±0.26
IAAA-130703	11	１号性格不明遺構　床面直上	木炭	AAA	−26.41±0.47	290±20	96.46±0.28
IAAA-130704	12	２号住居状遺構　埋土中位	木炭	AAA	−24.83±0.61	390±20	95.30±0.27
IAAA-133163	13	４号切岸貝層	貝殻	Edg	−1.90±0.41	1,020±20	88.08±0.26
IAAA-133164	14	４号切岸貝層	貝殻	Edg	0.29±0.41	1,030±20	87.93±0.27
IAAA-133165	15	４号切岸貝層	種子	AaA	−27.95±0.69	370±20	95.54±0.28

［＃5901、6362］

表２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値、暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（％）			
IAAA-130693	510±20	93.90±0.25	513±22	1411calAD－1432calAD(68.2%)	1401calAD－1442calAD(95.4%)
IAAA-130694	390±20	95.29±0.23	380±21	1452calAD－1495calAD(53.3%) 1602calAD－1616calAD(14.9%)	1446calAD－1523calAD(71.3%) 1574calAD－1584calAD(1.8%) 1589calAD－1625calAD(22.3%)
IAAA-130695	330±20	96.01±0.25	314±21	1522calAD－1575calAD(49.9%) 1584calAD－1590calAD(4.6%) 1625calAD－1641calAD(13.8%)	1492calAD－1603calAD(74.7%) 1615calAD－1645calAD(20.7%)
IAAA-130696	360±20	95.62±0.26	345±22	1489calAD－1523calAD(27.1%) 1572calAD－1603calAD(24.6%) 1609calAD－1630calAD(16.5%)	1467calAD－1531calAD(37.7%) 1538calAD－1635calAD(57.7%)
IAAA-130697	370±20	95.47±0.26	364±22	1465calAD－1519calAD(45.8%) 1593calAD－1619calAD(22.4%)	1452calAD－1525calAD(54.5%) 1558calAD－1632calAD(40.9%)
IAAA-130698	370±20	95.47±0.25	309±22	1522calAD－1575calAD(49.3%) 1584calAD－1590calAD(3.9%) 1625calAD－1643calAD(15.0%)	1494calAD－1602calAD(73.2%) 1616calAD－1647calAD(22.2%)
IAAA-130699	380±20	95.32±0.25	354±21	1475calAD－1521calAD(37.5%) 1575calAD－1583calAD(4.7%) 1591calAD－1623calAD(25.9%)	1458calAD－1528calAD(46.2%) 1554calAD－1634calAD(49.2%)
IAAA-130700	340±20	95.89±0.26	330±22	1512calAD－1529calAD(12.1%) 1542calAD－1601calAD(42.9%) 1616calAD－1634calAD(13.2%)	1485calAD－1642calAD(95.4%)
IAAA-130701	340±20	95.88±0.25	358±21	1470calAD－1521calAD(43.3%) 1592calAD－1620calAD(24.9%)	1456calAD－1526calAD(49.6%) 1556calAD－1633calAD(45.8%)
IAAA-130702	1,160±20	86.51±0.24	1,136±23	888calAD－900calAD(14.1%) 918calAD－966calAD(54.1%)	784calAD－787calAD(0.5%) 822calAD－842calAD(3.0%) 862calAD－983calAD(91.9%)
IAAA-130703	310±20	96.18±0.26	289±23	1524calAD－1559calAD(42.5%) 1631calAD－1650calAD(25.7%)	1515calAD－1598calAD(61.8%) 1617calAD－1660calAD(33.6%)
IAAA-130704	390±20	95.33±0.24	387±22	1450calAD－1491calAD(59.6%) 1603calAD－1610calAD(8.6%)	1443calAD－1522calAD(76.6%) 1578calAD－1582calAD(0.6%) 1591calAD－1620calAD(18.2%)
IAAA-133163	640±20	92.30±0.27	1,019±24	1322calAD－1388calAD(68.2%)*	1303calAD－1411calAD(95.4%)*
IAAA-133164	620±20	92.55±0.28	1,032±24	1309calAD－1385calAD(68.2%)*	1295calAD－1405calAD(95.4%)*
IAAA-133165	420±20	94.96±0.25	366±23	1464calAD－1517calAD(46.8%) 1595calAD－1618calAD(21.4%)	1451calAD－1524calAD(55.5%) 1558calAD－1632calAD(39.9%)

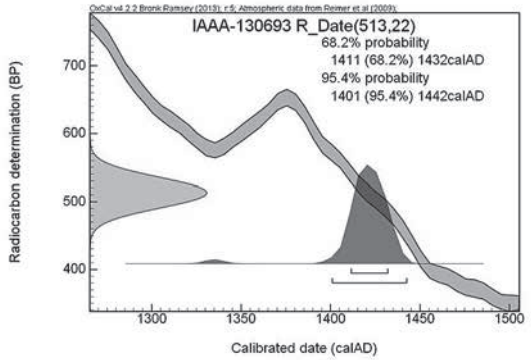
*はMarine13marinecurveを用いmarine100%で較正、その他はIntCal13で較正（Reimeretal2013）。［参考値］

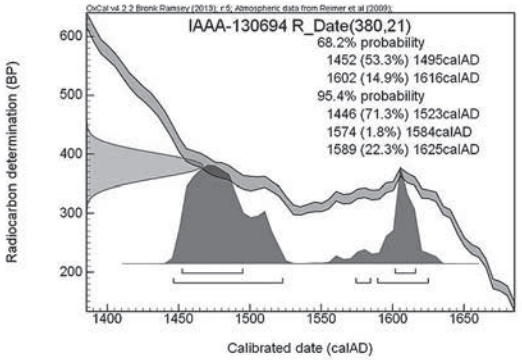
文献

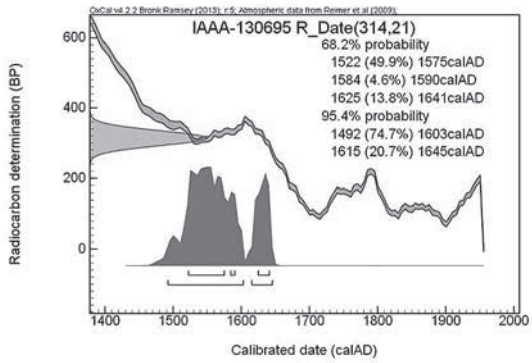
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337–360

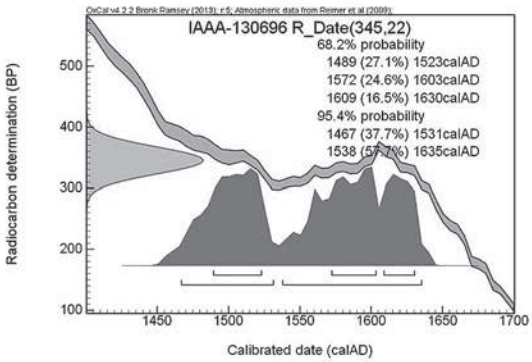
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111–1150

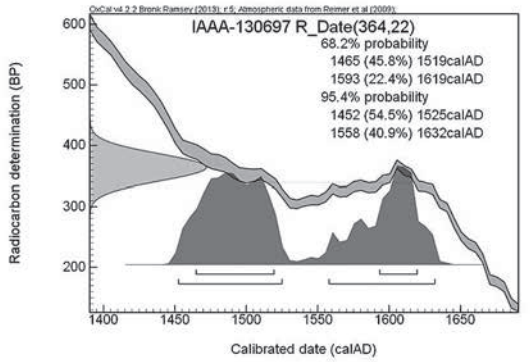
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355–363

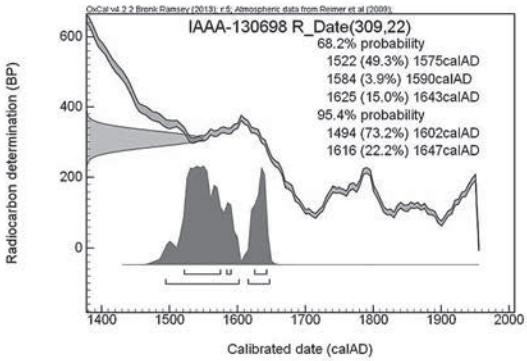


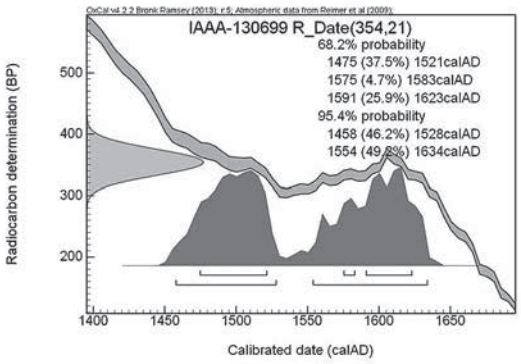


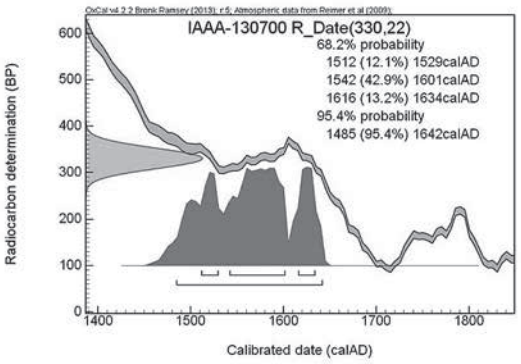


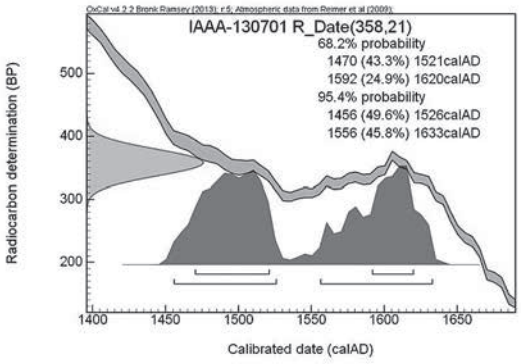


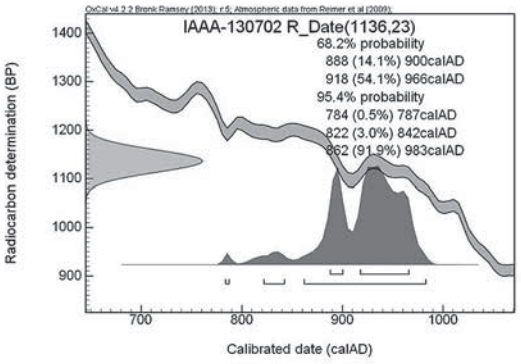


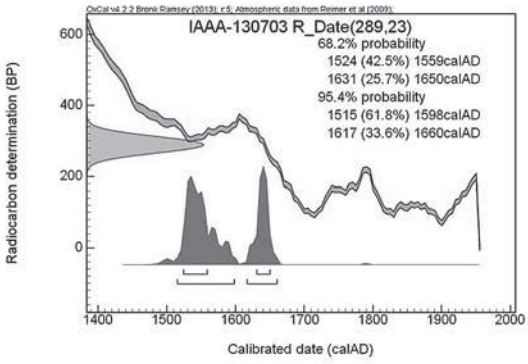


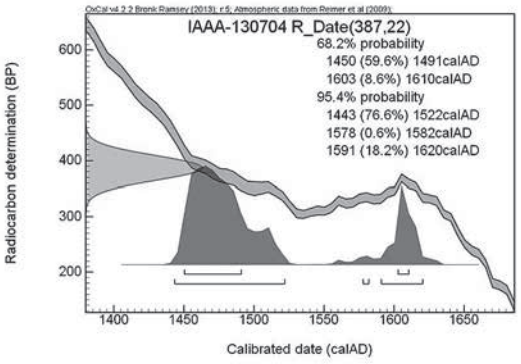

OxCal v4.2.2 Bronk Ramsey (2013); r:5; Atmospheric data from Reimer et al (2009);
IAAA-130699 R_Date(354,21)
68.2% probability
1475 (37.5%) 1521calAD
1575 (4.7%) 1583calAD
1591 (25.9%) 1623calAD
95.4% probability
1458 (46.2%) 1528calAD
1554 (49.2%) 1634calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

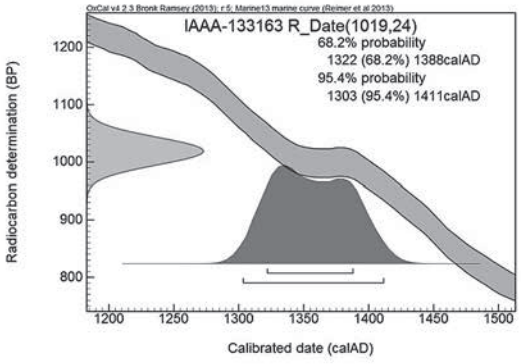

OxCal v4.2.2 Bronk Ramsey (2013); r:5; Atmospheric data from Reimer et al (2009);
IAAA-130700 R_Date(330,22)
68.2% probability
1512 (12.1%) 1529calAD
1542 (42.9%) 1601calAD
1616 (13.2%) 1634calAD
95.4% probability
1485 (95.4%) 1642calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

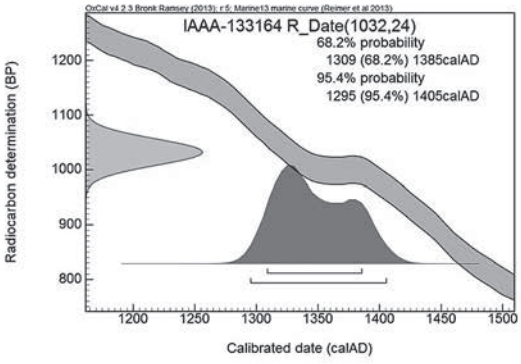

OxCal v4.2.2 Bronk Ramsey (2013); r:5; Atmospheric data from Reimer et al (2009);
IAAA-130701 R_Date(358,21)
68.2% probability
1470 (43.3%) 1521calAD
1592 (24.9%) 1620calAD
95.4% probability
1456 (49.6%) 1526calAD
1556 (45.8%) 1633calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

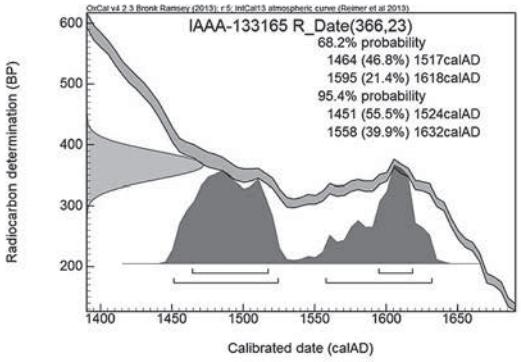

OxCal v4.2.2 Bronk Ramsey (2013); r:5; Atmospheric data from Reimer et al (2009);
IAAA-130702 R_Date(1136,23)
68.2% probability
888 (14.1%) 900calAD
918 (54.1%) 966calAD
95.4% probability
784 (0.5%) 787calAD
822 (3.0%) 842calAD
862 (91.9%) 983calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)


OxCal v4.2.2 Bronk Ramsey (2013); r:5; Atmospheric data from Reimer et al (2009);
IAAA-130703 R_Date(289,23)
68.2% probability
1524 (42.5%) 1559calAD
1631 (25.7%) 1650calAD
95.4% probability
1515 (61.8%) 1598calAD
1617 (33.6%) 1660calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

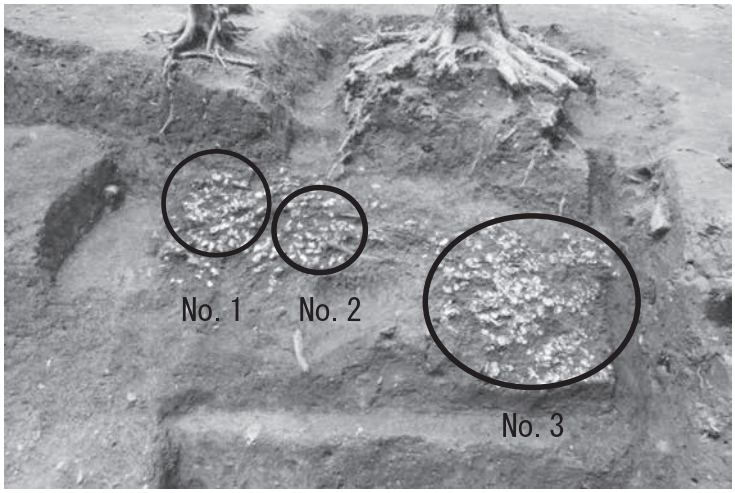

OxCal v4.2.2 Bronk Ramsey (2013); r:5; Atmospheric data from Reimer et al (2009);
IAAA-130704 R_Date(387,22)
68.2% probability
1450 (59.6%) 1491calAD
1603 (8.6%) 1610calAD
95.4% probability
1443 (76.6%) 1522calAD
1578 (0.6%) 1582calAD
1591 (18.2%) 1620calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)


OxCal v4.2.3 Bronk Ramsey (2013); r:5; Marine13 marine curve (Reimer et al 2013)
IAAA-133163 R_Date(1019,24)
68.2% probability
1322 (68.2%) 1388calAD
95.4% probability
1303 (95.4%) 1411calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)


OxCal v4.2.3 Bronk Ramsey (2013); r:5; Marine13 marine curve (Reimer et al 2013)
IAAA-133164 R_Date(1032,24)
68.2% probability
1309 (68.2%) 1385calAD
95.4% probability
1295 (95.4%) 1405calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)



［図版1］暦年較正年代グラフ（参考）



［図版2］４号切岸貝層の検出状況
（No.1～3は貝層サンプルの位置を示す）

2　種実・骨貝類の同定

（株）加速器分析研究所

はじめに

本分析調査では、花館跡（岩手県陸前高田市に所在）の発掘調査で検出された貝層を対象として、微細物の洗い出しによる種実・骨貝類の抽出同定を実施し、当時の動植物利用に関する資料を得る。

1　試　　料

試料は、版築土中の４号切岸貝層から採取された貝層サンプルで、No.１が２試料（仮a,b）、No.２が１試料（仮c）、No.３が２試料の合計５試料（25.0kg）である。そこで、便宜的に仮番号を付けて整理し、No.１を仮a,b、No.２を仮c、No.３を仮d,eとした。

試料は湿った状態で、多量の二枚貝類や炭化物が確認される。種実同定用の微細物洗い出しは、炭化物が多い部分を選択抽出し、各500gを対象とする。貝同定は、残り全ての土壌試料と、微細物洗い出しで回収された貝類全てを対象とする。なお、本分析では、栽培種の炭化種実が確認されたため、分析対象外である貝同定用試料中の種実も同定対象としている。

なお、これらの貝層サンプルから得られた試料より、放射性炭素年代測定用試料としてコタマガイ貝殻２点（年代測定試料13、14）、コムギ胚乳２点（１試料分、年代測定試料15）を抽出した。13は貝層サンプルNo.１仮a、14は貝層サンプルNo.３仮e、15は貝層サンプルNo.１仮bに属する。

４号切岸貝層から出土したこれら３試料を含む５試料（１、２、13～15）を年代測定した結果、中世ないし近世初頭頃の年代値が示された（年代測定報告参照）。

2　分　析　方　法

（１）微細物洗い出し・種実同定

土壌試料から炭化物を可能な限り壊さず回収するために、以下の方法を実施する。

a）水洗前抽出

試料を常温乾燥後、肉眼観察で確認された炭化種実や炭化材を抽出する。

b）水　　洗

乾燥後の試料を、水を満たした容器に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5㎜の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す（20回程度）。残土を粒径0.5㎜の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別に常温乾燥させる。

c）種実の抽出同定

水洗乾燥後の試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体をはじめ、主に径4㎜超の炭化材などの貝類以外の遺物を抽出する。種実遺体の同定は、現生標本および吉崎（1992）、石川（1994）、中山ほか（2000）、小畑（2008;2011）などを参考に実施し、部位別に個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下で区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。

分析後は、炭化種実等を容器に入れて返却する。

（２）骨貝類洗い出し・同定

a）水洗前抽出および水洗

微細物分析と同様である。水洗前抽出は、両殻が合わさった完形殻などの、保存状態が良好な個体を対象とする。

b）骨貝類の抽出同定

水洗乾燥後の試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、手やピンセットを用いて、骨・貝類を抽出する。形態的特徴から、種と部位の同定を行う。計測は、デジタルノギスを用いる。なお、同定は、奥谷ほか（2000）、奥谷編著（2004）などを参考に実施し、個数や重量を求めて結果を一覧表で示す。

表３　微細物洗い出し・種実同定結果

分類群	部位	状態	HD13 貝層 No.1 仮 a		No.1 仮 b		No.2 仮 c		No.3 仮d		No.3 仮e		備　考
炭化種実													
栽培種													
イネ	穎（基部）	破片	-	-	-	-	-	11	-	-	-	-	
	穎	破片	-	1	-	-	1	2	-	-	1	-	
	穎・胚乳	完形	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	
	胚乳	完形	-	9	2	7	-	2	-	1	-	1	
		破片	-	4	2	-	1	2	-	-	-	-	
オオムギ	胚乳	完形	-	3	-	5	-	1	-	-	-	-	
		破片	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
オオムギ-コムギ	胚乳	破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
	穂軸	破片	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	
コムギ	穎・胚乳	完形	-	-	-	2	-	3	-	-	-	-	
	胚乳	完形	8	7	2	20	1	2	-	2	-	2	
		破片	2	7	2	12	-	10	2	1	-	1	
アワ	穎・胚乳	完形	1	-	1	2	-	-	-	-	-	-	
	胚乳	完形	-	-	-	3	-	2	-	-	-	-	
		破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	基部
ヒエ	穎・胚乳	完形	-	1	-	1	-	1	-	1	-	-	
キビ	穎・胚乳	完形	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	
栽培種の可能性													
マメ科（ダイズ類）	種子	完形	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	臍残存
マメ科（アズキ類）	種子	破片	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	
その他													
オニグルミ	核	破片	-	-	-	-	-	1	-	7	-	4	
イネ科	胚乳	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	頂部欠損
ホタルイ属	果実	完形	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ヤエムグラ属	核	完形	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	
		破片	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	
不明		完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
炭化材（主に径４㎜超）			1.20	0.97	1.14	1.48	0.24	0.58	0.42	0.34	0.04	0.38	乾重(g)
			13.13	11.03	11.85	25.54	11.93	11.16	10.07	9.04	7.05	11.95	最大径(㎜)
菌類	菌核		-	-	-	4	-	-	-	-	-	4	個数
昆虫類			-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
土器片（縄文）？			-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	個数,最大15.4㎜
分析残渣（植物・炭化物主体）													
植物片（非炭化）			0.10	0.47	0.05	1.22	0.07	0.48	0.21	0.92	0.10	0.65	乾重(g)
植物片主体	径 2-0.5㎜		-	1.05	-	-	-	-	-	1.75	-	-	
炭化材主体	径 2-0.5㎜		0.35	0.65	0.23	2.77	0.27	-	0.24	-	0.04	0.40	乾重(g)
分析残渣（砂礫・貝類主体）													
砂礫主体	径４㎜超		11.77	*	32.58	*	13.26	*	8.37	*	14.85	*	乾重(g)
	径４－２㎜		16.49	*	26.00	*	13.55	*	14.96	*	19.21	*	乾重(g)
砂礫主体（貝殻片含む）	径２-1㎜		9.27	*	6.75	*	8.59	*	10.20	*	5.87	*	乾重(g)
	径１-0.5㎜		5.52	*	6.25	*	5.72	*	6.31	*	2.06	*	乾重(g)
貝類	殻	破片	0.93	*	5.41	*	2.69	*	0.35	*	8.80	*	乾重(g),同定対象
分析量（注）			505.4	3514.6	501.6	5498.4	500	3820	500	3560	502.7	6117.3	湿重(g)
試料全量			4.02		6		4.32		4.06		6.62		湿重(kg)

注）左列：微細物洗い出し分析量、右列：貝同定用洗い出し分析量。洗い出しは粒径 0.5㎜篩を使用。「＊」：貝類同定結果を参照。

３　結　　果

（１）微細物洗い出し・種実同定

結果を表３に示す。また、各分類群の写真を図版１に、主な分類群の計測値を表２に示し、同定根

拠とする。全５試料25.0kgより、被子植物12分類群192個の炭化種実が抽出・同定された。１個（No.１）は同定ができなかった。種実以外では、炭化材は、各試料から合計6.8gが検出され、最大2.6㎝を測る（No.１）。その他に、菌類の菌核が８個（No.１,３）、昆虫類が1個（No.１）、土器片（縄文）？が２個（最大1.5㎝）確認された。

同定された炭化種実の出土個数は、No.１の仮ａが52個、仮ｂが72個、No.２の仮ｃが44個、No.３の仮ｄが15個、仮ｅが９個である。No.１が最も多く、No.２が次いで多く、No.３が最も少ない。

栽培種は、イネの穎が16個（No.１～３）、穎・胚乳が３個（No.１）、胚乳が31個（No.１～３）、オオムギの胚乳が11個（No.１～３）、オオムギ-コムギの胚乳が１個（No.２）、穂軸が２個（No.２）、コムギの穎・胚乳が５個（No.１,２）、胚乳が81個（No.１～３）、アワの穎・胚乳が４個（No.１）、胚乳が６個（No.１,２）、ヒエの穎・胚乳が４個（No.１～３）、キビの穎・胚乳が２個（No.１）と、栽培種の可能性があるマメ科（ダイズ類）の種子が１個（No.１）、マメ科（アズキ類）の種子が４個（No.１）の、計171個が確認され、炭化種実群全体の89%を占める。コムギが最も多く、イネ、オオムギが次ぎ、雑穀類のアワ・ヒエ・キビやマメ類（２系統）が混じる組成を示す。

栽培種を除いた分類群は、木本のオニグルミの核の破片が12個（No.２,３）と、草本のイネ科の胚乳が１個（No.１）、ホタルイ属の果実が１個（No.２）、ヤエムグラ属の核が７個（No.１）確認された。

表４　主な炭化種実の計測値

分類群	試料名	長さ	幅	厚さ	図版	備　考
イネ　穎・胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	5.0	2.8	2.2	2	
イネ　穎・胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	5.1	2.5	2.0	-	
イネ　穎・胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	4.4	2.6	1.9	-	表面明瞭
イネ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	4.9	2.7	2.6＊	-	焼き膨れている
イネ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	4.3	2.4	2.1	-	
イネ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	5.4	2.4	2.2	-	
イネ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	4.9	2.5	1.9	-	
イネ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	3.8	2.7	1.7	-	
イネ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	3.7	2.2	2.0	-	
イネ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	4.3	1.9	1.5	-	細身
イネ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	4.1	2.0	1.0	-	偏平
イネ　胚乳	HD13貝層　No.2　仮c	4.9	2.8	2.0	3	表面明瞭,玄米
イネ　胚乳	HD13貝層　No.2　仮c	4.2	1.9	1.4	-	小型,表面明瞭,玄米
イネ　胚乳	HD13貝層　No.3　仮d	3.7	2.1	2.0	-	焼き膨れている,状態やや不良
イネ　胚乳	HD13貝層　No.3　仮e	3.9	2.7	2.0	-	焼き膨れている,表面明瞭
オオムギ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	5.3	2.9	2.1	4	焼き膨れている,状態やや不良
オオムギ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	5.2	3.0	2.2	-	
コムギ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	3.9	2.6	1.9	-	
コムギ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	4.1	2.7	2.5	-	
コムギ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	3.8	2.4	2.5	-	
コムギ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	4.0	2.2	1.9	-	
コムギ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	4.6	2.2	1.7	-	
コムギ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮a	3.6	2.7	1.9	-	
コムギ　胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	3.8	2.3	1.9	6	
コムギ　穎・胚乳	HD13貝層　No.1　仮b	3.5	2.0	1.7	-	
コムギ　穎・胚乳	HD13貝層　No.2　仮c	3.9	2.9	2.2	5	表面明瞭,頂部に毛残存
コムギ　穎・胚乳	HD13貝層　No.2　仮c	4.1	2.2	2.2	-	状態やや不良
コムギ　胚乳	HD13貝層　No.3　仮d	3.8	2.0	1.9	-	表面明瞭
コムギ　胚乳	HD13貝層　No.3　仮d	3.6	2.3	1.6	-	状態不良
マメ科(ダイズ類)　種子	HD13貝層　No.1　仮a	5.7+	4.6＊	2.5	11	
マメ科(ダイズ類)　種子(臍)	HD13貝層　No.1　仮a	2.1	0.9	-	11b	臍:露出タイプ(小畑,2008)
マメ科(アズキ類)　種子	HD13貝層　No.1　仮a	2.7+	2.1＊	1.7+	12	半分厚,アズキグループ(吉崎,1992)
マメ科(アズキ類)　種子	HD13貝層　No.1　仮a	2.9+	2.4＊	1.7+	13	半分厚,アズキグループ(吉崎,1992)

注）計測値（㎜）はデジタルノギスによる。欠損部は「+」、焼き膨れは「＊」で示す

（2）骨貝類洗い出し・同定

検出された種類は、腹足綱２種類（クロタマキビ・コハクガイ科）、二枚貝綱３種類（イガイ目？・ウバガイ？・コタマガイ）である（表３）。表４に同定結果を示す。各試料ともコタマガイが多産する。二枚貝綱およびマルスダレガイ科とした破片も、おそらくはコタマガイの破片とみられる。それ以外の種類としては、クロタマキビがNo.３で、コハクガイ科がNo.３で、イガイ目？がNo.２で、ウバガイの可能性があるバカガイ科がNo.１で検出される程度である。なお、二枚貝綱の中には、数㎜程度の破片のため断定できないが、内面が紫色を呈する貝（ウチムラサキの可能性もある）が少量含まれる。骨はほとんど含まれておらず、No.２とNo.３で硬骨魚綱の鰭棘片が、No.１で焼骨片が検出された程度にとどまる。

表５　検出動物分類群の一覧

軟体動物門　Phylum Mollusca
　腹足綱　Class Gastropoda
　　前鰓亜綱　Subclass Prosobranchia
　　盤足目　Order Discopoda
　　タマキビ科　Family Littorinidae
　　クロタマキビ　*Neritrema sitchana*
　　有肺亜綱　Subclass Pulmonata
　　柄眼目　Order Sylommatophora
　　コハクガイ科　Family Zonitidae
　　属種不明　Gam. et. sp. indet.
　二枚貝綱　Class Bivalvia
　　翼形亜綱　Subclass Pteriomophia
　　イガイ目？　Order Mytiloida?
　　科属不明　Fam. et. gen. indet.
　　異歯亜綱　Order Heterodonta
　　マルスダレガイ目　Order Veneroida
　　バカガイ科　Family Mactridae
　　ウバガイ？　*Pseudocardium sachalinensis?*
　　マルスダレガイ科　Family Veneridae
　　コタマガイ　*Gomphina melanegis*

４　考　　察

微細物洗い出しの結果、４号切岸貝層からは、多量の貝類とともに栽培種の炭化種実が検出された。栽培種は、穀類のコムギが最も多く、イネ、オオムギが次ぎ、アワ・ヒエ・キビなどの微小な雑穀類も確認された。これらは、花館周辺域で栽培されていたか、近辺より持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食糧と示唆される。出土穀粒は、一部焼き膨れた個体もみられるが、概ね保存状態が良好で、表面に穎（籾）が残る個体や、イネ（炭化米）には果皮や種皮が残る「玄米」の状態も確認されたことから、籾がついた生の段階で、食べられることなく火を受け炭化し、廃棄された食料残滓とみなされる。

その他に、No.１より確認されたマメ科には、ダイズ類の特徴をもつ種子と、アズキ類の特徴をもつ種子が確認された。ダイズ類やアズキ類は、近年の土器圧痕調査や種実遺体の研究で、縄文時代における栽培の可能性が検討されている（小畑，2008;2011;西本ほか，2012など）。今回確認されたマメ類も、上述の栽培種とともに当時利用された植物質食料と示唆され、少なくとも２系統の利用が考えられる。

栽培種とその可能性があるものを除いた分類群の中で、木本類としては広葉樹のオニグルミが確認された。オニグルミは、川沿いなどの湿潤な肥沃地に生育する河畔林要素の落葉高木で、核内部の子葉が生食可能な有用植物である（渡辺，1975など）。オニグルミは、本遺跡周辺域の森林から持ち込まれ利用された植物質食料と示唆される。出土核は破片であることから、子葉を取り出した後に廃棄された食料残滓の可能性がある。

草本類は、湿った場所にもやや乾いた場所にも生育可能なイネ科、ヤエムグラ属などの中生植物が確認された。これらは、当時の調査区周辺域の明るく開けた草地環境に生育していた可能性がある。また、水湿地生植物を含むホタルイ属が検出されたことから、水湿地の存在が示唆されるが、この水湿地が城郭内に存在していたのか、あるいは版築時に低地部の堆積物を利用したのかは断定できない。

一方、骨貝類では、二枚貝綱のコタマガイを中心とし、クロタマキビ、コハクガイ科、イガイ目？、ウバガイ？を伴う組成である。これらの種類の中で、コハクガイ科は、陸産の微小貝類であることから、周辺に棲息していたものが入り込んだ、もしくは流入したと思われる。その他の貝類は、いずれも海産の貝類である。最も多く検出されるコタマガイは、北海道南部～九州・朝鮮半島に分布し、潮間帯下部から水深50mの砂底に棲息するとされる。広く食用とされ、ハマグリと形が似通っているため、ハマグリの類似品として流通したこともあるとされている。ウバガイの可能性のあるバカガイ科は、比較的大型個体で殻が強く膨らむ破片である。潮間帯下部～水深20ないし30m付近の砂底に棲息する。クロタマキビは、東北地方太平洋岸及び飛島以北の日本海岸に分布し、潮間帯中部、岩礁に棲息するとされる。これらの貝類は、城郭南側の湾沿岸部で採取されたと想像される。魚類も捕獲されていたとみられるが、それほど数は多くなかったのであろう。このように版築土中の４号切岸貝層がコタマガイを中心とした単調な組成であることについては、食料残滓のコタマガイ等を版築作業時に一括廃棄した場合や、やはり食糧残滓であるコタマガイ等を含む土を版築土に用いた場合などが考えられる。

文献

石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.

西本豊弘・住田雅和・竜子正彦・高橋潔・近藤奈央・吉崎伸，2012，縄文時代のアズキについて―京都市上里遺跡出土のアズキ類の検討―．動物考古学，第29号，45-53.

小畑弘巳，2008，マメ科種子同定法．「極東先史古代の雑穀３」，日本学術振興会平成16～19年度科学研究費補助金（基盤B-2）（課題番号16320110）「雑穀資料からみた極東地域における農耕受容と拡散過程の実証的研究」研究成果報告書，小畑弘巳編，熊本大学埋蔵文化財調査室，225-252.

小畑弘己，2011，東北アジア古民族植物学と縄文農耕．同成社，309p．吉崎昌一，1992，古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル，No.355，2-14.

奥谷喬司・窪寺恒己・黒住耐二・斎藤寛・佐々木猛智・土田英治・土屋光太郎・長谷川和範・濱谷巌・速水格・堀成夫・松隈明彦，2000，日本近海産貝類図鑑．奥谷喬司編，東海大学出版会，1173p.

奥谷喬司編著，2004，改訂新版　世界文化生物大図鑑　貝類．株式会社世界文化社．399p.

渡辺誠，1975，縄文時代の植物食．雄山閣出版，187p.

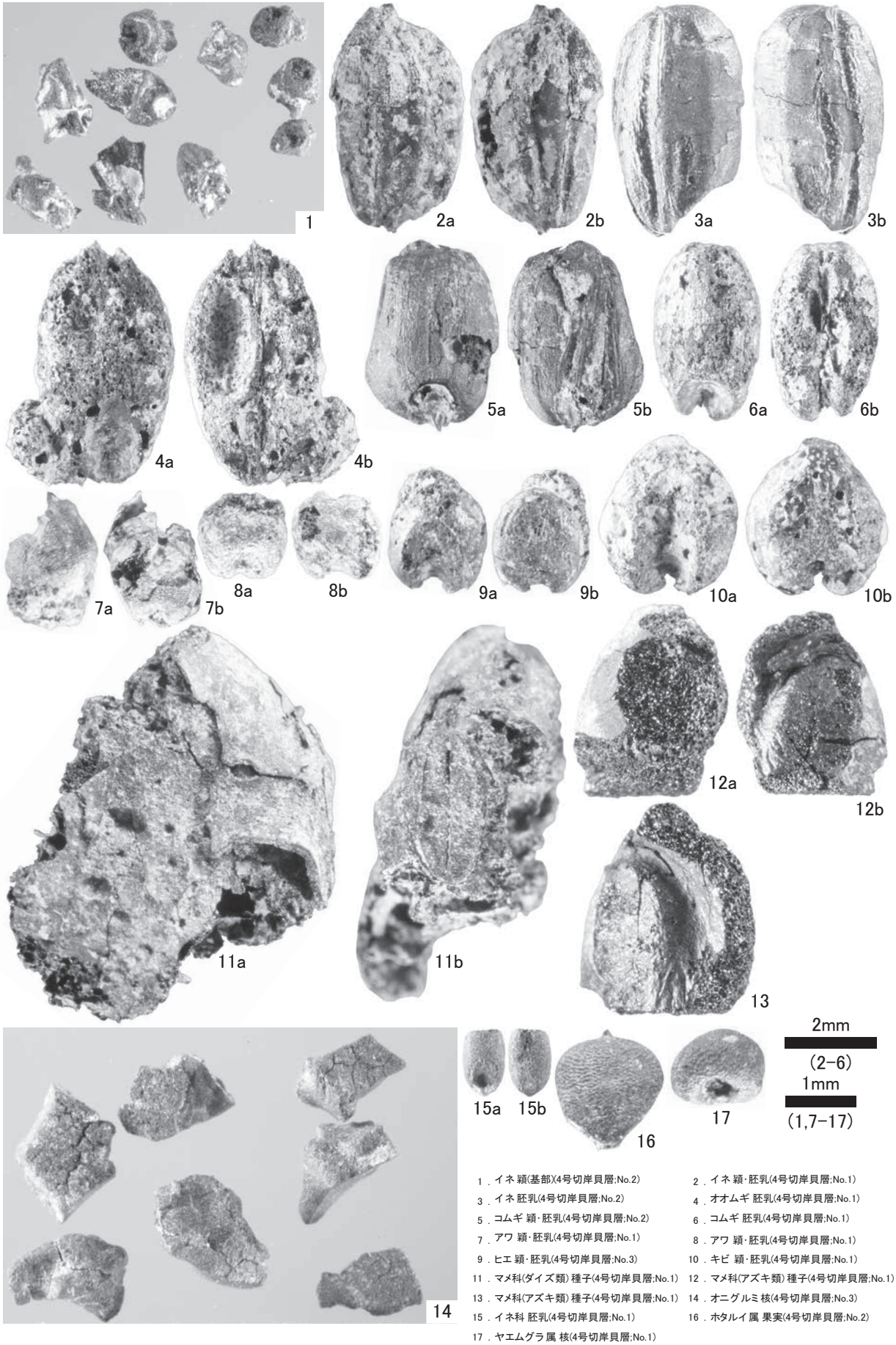
吉崎昌一，1992，古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル，No.355，2-14.

※）本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

表６　骨貝類同定結果

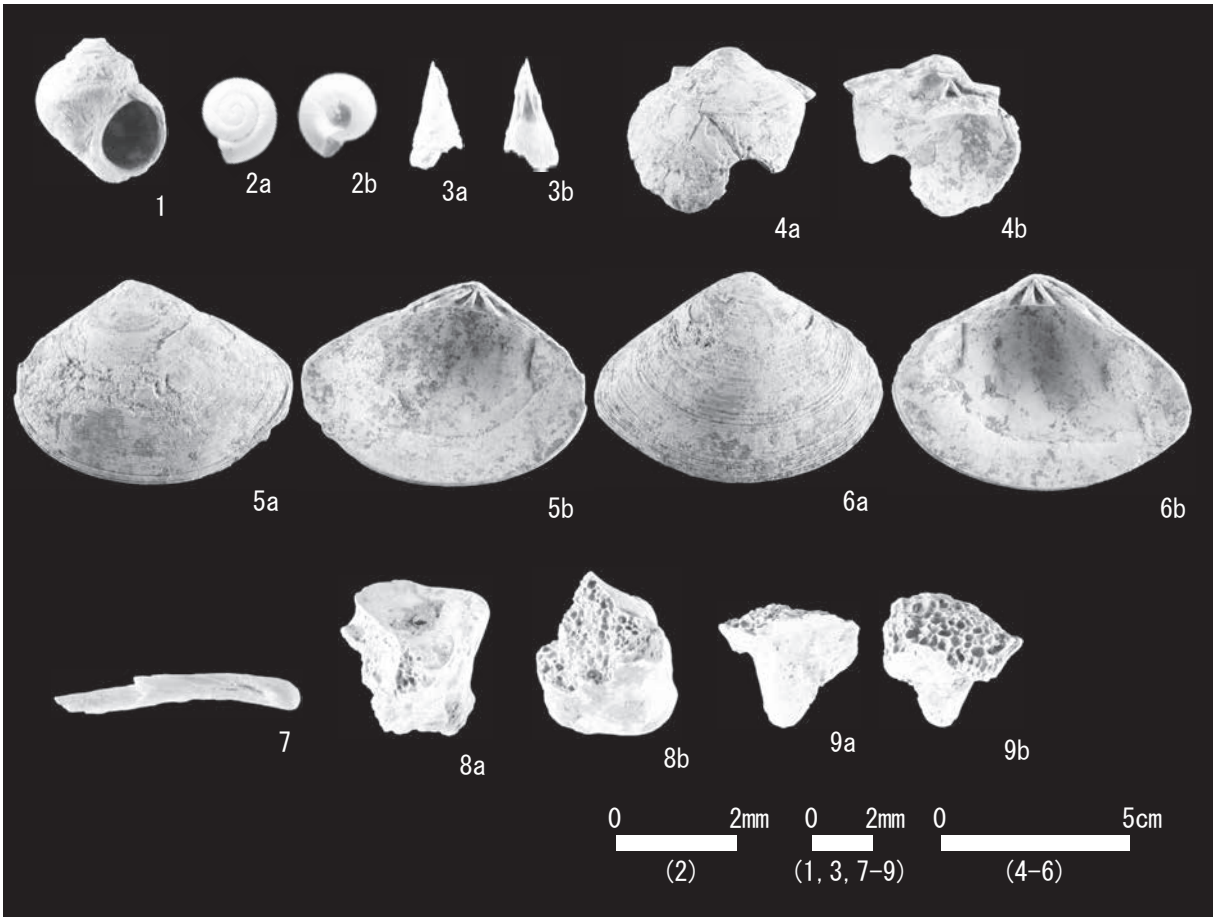
分類群		左右	被熱	HD13 貝層 No.1 仮a		No.1 仮b		No.2 仮c		No.3 仮d		No.3 仮e		備　考
腹足綱														
クロタマキビ	殻		破損										1	
コハクガイ科	殻		破損										1	
腹足綱	殻		破片										1	
二枚貝綱														
イガイ目？	殻		破片						1					
バカガイ科(ウバガイ？)	殻	右	破片		1		1							
コタマガイ	殻	左	ほぼ完		2									
	殻	左	破損		12		1						2	
	殻	左	破片		36	1	43		49		13		49	
	殻	右	ほぼ完		1								4	
	殻	右	破損		22								3	
	殻	右	破片		111		39		29		14		55	
	殻		破片		304.26	3.38	257.88	2.69	287.27		174.62	8.80	366.58	乾重(g)
マルスダレガイ科	殻	左	破片			1								
二枚貝綱	殻	右	破損		1									
	殻		破片	0.93	23.80		17.72			0.35	9.56		39.79	乾重(g)
二枚貝綱(ウチムラサキ？)	殻		破片 ○		1.01		3.04		1.62		0.38		0.44	乾重(g)
貝類														
種類不明	殻		破片						0.08				0.29	乾重(g)
脊椎動物門														
硬骨魚綱	鰭棘等		破片						1				5	
種類不明	不明		破片 ○				2							
分析残渣														
植物片(非炭化)				0.10	0.47	0.05	1.22	0.07	0.48	0.21	0.92	0.10	0.65	乾重(g)
植物片主体	径2-0.5㎜				1.05						1.75			
炭化材主体	径2-0.5㎜			0.35	0.65	0.23	2.77	0.27		0.24		0.04	0.40	乾重(g)
砂礫主体	径4㎜超			11.77	265.86	32.58	467.74	13.26	361.52	8.37	223.71	14.85	665.00	乾重(g)
	径4-2㎜			16.49		26.00		13.55		14.96		19.21		乾重(g)
砂礫主体(貝殻片含む)	径2-1㎜			9.27	82.75	6.75	276.72	8.59	112.96	10.20	182.85	5.87	181.58	乾重(g)
	径1-0.5㎜			5.52		6.25		5.72		6.31		2.06		乾重(g)
分析量(注)				505.4	3514.6	501.6	5498.4	500.0	3820.0	500.0	3560.0	502.7	6117.3	湿重(g)
試料全量				4.02		6.00		4.32		4.06		6.62		湿重(kg)

注）左列：微細物洗い出し分析量、右列：貝同定用洗い出し分析量。洗い出しは粒径0.5㎜篩を使用。



1．イネ 穎(基部)(4号切岸貝層;No.2)
2．イネ 穎・胚乳(4号切岸貝層;No.1)
3．イネ 胚乳(4号切岸貝層;No.2)
4．オオムギ 胚乳(4号切岸貝層;No.1)
5．コムギ 穎・胚乳(4号切岸貝層;No.2)
6．コムギ 胚乳(4号切岸貝層;No.1)
7．アワ 穎・胚乳(4号切岸貝層;No.1)
8．アワ 穎・胚乳(4号切岸貝層;No.1)
9．ヒエ 穎・胚乳(4号切岸貝層;No.3)
10．キビ 穎・胚乳(4号切岸貝層;No.1)
11．マメ科(ダイズ類)種子(4号切岸貝層;No.1)
12．マメ科(アズキ類)種子(4号切岸貝層;No.1)
13．マメ科(アズキ類)種子(4号切岸貝層;No.1)
14．オニグルミ 核(4号切岸貝層;No.3)
15．イネ科 胚乳(4号切岸貝層;No.1)
16．ホタルイ属 果実(4号切岸貝層;No.2)
17．ヤエムグラ属 核(4号切岸貝層;No.1)

図版1　炭化種実



1. クロタマキビ(4号切岸貝層;No. 3)
2. コハクガイ科(4号切岸貝層;No. 3)
3. イガイ目?(4号切岸貝層;No. 2)
4. バカガイ科(ウバガイ?)右殻(4号切岸貝層;No. 1)
5. コタマガイ左殻(4号切岸貝層;No. 1)
6. コタマガイ右殻(4号切岸貝層;No. 1)
7. 魚類鰭棘等(4号切岸貝層;No. 2)
8. 種類・部位不明骨破片(4号切岸貝層;No. 1)
9. 種類・部位不明骨破片(4号切岸貝層;No. 1)

図版２　出土骨貝類

3　出土鉄滓の成分分析

株式会社古環境研究所

1．は　じ　め　に

花館跡は、岩手県陸前高田市高田町に所在する。調査地は南東方向へ張り出す標高30～45mの段丘上に立地する。発掘調査において、中世城館に伴う曲輪や堀等が検出されている。また、それに伴いごく少量であるが鉄滓などの鍛冶関連遺物が出土している。そこで、周辺地域での鉄器生産の様相を検討する目的で分析調査を実施することになった。

2．調　査　方　法

2－1．供　試　材

試料をTable1に示す（注１）。出土した鍛冶関連遺物２点の調査を行った。

2－2．調　査　項　目

（1）肉　眼　観　察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

（2）マ ク ロ 組 織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査よりも広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

（3）顕 微 鏡 組 織

鉄滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の３μmと１μmで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

（4）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester ）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値（注２）に照らして、鉱滓中の結晶の判定を行った。また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50gfおよび200gfで測定した。

（5）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

（6）X線回折

鉄滓中の化合物を同定するため、X線回折を実施した。X線を照射すると化合物の結晶の種類に応じてそれぞれ固有な反射（回折）された特性X線を検出できることを利用して、試料中の化合物を同定する。

（7）化学組成分析

出土鉄滓の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

1）全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法

2）炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

3）二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法 、誘導結合プラズマ発光分光分析

3．調　査　結　果

HD－1：椀形鍛冶滓

（1）肉　眼　観　察

やや小形で偏平な椀形鍛冶滓（104.1g）である。ほぼ完形で、表面にはごく小形の木炭痕が多数散在する。特に下面側は微細な凹凸が目立つ。滓の地の色調は黒灰色で、気孔は少なく重量感のある滓である。着磁性があるが、まとまった金属鉄（または錆化鉄）部はみられない。鉄酸化物の割合の高い滓と推測される。

（2）顕微鏡組織：Photo.1①～③

滓中には白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO{\cdot}SiO_2$）が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

（3）ビッカース断面硬度：Photo.1③

白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は471Hv、493Hvであった。ウスタイトの文献硬度値450～500Hvの範囲内であり、ウスタイトに同定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は680Hvであった。ファヤライトの文献硬度値600～700Hvの範囲内で、ファヤライトに同定される。

（4）X線回折：Fig.1

ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO{\cdot}SiO_2$）が強い回折強度を示している。顕微鏡観察とほぼ一致する結果といえる。さらにマグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4）、カルシライト（kalsilite：$KAlSiO_4$）も同定された。

（5）化学組成分析：Table2

全鉄分（Total Fe）45.56%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.26%、酸化第１鉄（FeO）33.20%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）27.87%の割合であった。造滓成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は29.95%で、このうち塩基性成分（CaO＋MgO）は3.27%と低めである。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.33%、バナジウム（V）が0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）0.06%、銅（Cu）も0.02%と低い。

当鉄滓は鉄分（FeO）および炉材粘土の溶融物（SiO_2主成分）主体の滓であった。製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、V、MnO）の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

HD－2：鉄製品（鍛造品）

（1）肉　眼　観　察

ごく小形の鍛造鉄器の破片（10.0g）と推定される。平面は不整三角形状で横断面はやや内湾する。表面は全体が茶褐色の錆化物で覆われるが、特殊金属探知器のL（●）で反応があり、内部には金属鉄が良好に残存すると考えられる。

（2）マ ク ロ 組 織

Photo.1④の明白色部が金属鉄部である。内部には鍛打により細長く展伸した形状の非金属介在物が多数層状に分布しており、折返し鍛錬が施された鍛造製品と判断される。

（3）顕微鏡組織：Photo.1⑤⑥およびPhoto.2①②

Photo.1⑤⑥は表層側のやや炭素含有量の高い個所の拡大である。素地部分は白色のフェライト（Ferrite：α鉄）で、黒色層状のパーライト（Pearlite）が析出する。一方Photo.2①②は、中央のより炭素含有量が低い個所の拡大である。フェライト結晶に双晶が多数確認されるため、鉄器製作の最終段階にはかなり低温下で仕上げの鍛打を施したものと推測される。またこれらの金属組織（パーライトの面積率）から、炭素含有量が0.1～0.25%程度の軟鉄と推定される。

（4）ビッカース断面硬度

Photo.1⑤およびPhoto.2①の金属鉄部の硬度を測定した。⑤のやや高炭素域の硬度値は171Hv、196Hv、①のより低炭素域の硬度値は177Hv、155Hvであった。炭素含有量のみから考えられるより全体に硬質であるが、これは上述したようにかなり低温下で仕上げの鍛打を施したところの残留歪と、鉄中の非金属介在物の影響と判断される。

（5）EPMA　調　査

Photo.2③に非金属介在物の反射電子像（Compo.）を示す。白色粒状結晶は特性X線像をみると、鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は92.9%FeO（分析点12）で、ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。淡灰色結晶は特性X線像では鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は63.2%FeO-2.5%MgO-29.8%SiO_2-1.6%P_2O_5であった（分析点13）。ファヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）で、さらにマグネシア（MgO）、燐酸（P_2O_5）が微量含まれる。また淡茶褐色多角形結晶は特性X線像ではチタン（Ti）、アルミニウム（Al）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は60.3%FeO-16.7%Al_2O_3-13.0%TiO_2-4.0%V_2O_3-1.7%Cr_2O_3-1.0%MgOであった（分析点14）。マグネタイト（Magnetite：FeO･Fe_2O_3）、ヘルシナイト（Hercynite：FeO･Al_2O_3）およびウルボスピネル（Ulvöspinel：2FeO･TiO_2）を主な端成分とする固溶体[注3]と推定される。

当遺物は折返し鍛錬を施した軟鉄材をもとに作られた鍛造品であった。

4．ま　と　め

花館跡の出土鍛冶関連遺物を調査した結果、同遺跡の周辺で鍛造により鉄器を製作していたと推測される。詳細は以下の通りである。

（1）出土鉄滓（HD－1）は鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄分（FeO）および炉材粘土の溶融物（SiO_2主成分）主体の滓で、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、V、MnO）の低減傾向が著しい。鉄素材を熱間で鍛打加工した時の反応副生物である。

（2）鉄製品（HD－2）は折返し鍛錬を施した軟鉄材をもとに作られた鍛造品であった。炭素含有量は部位によってばらつきがあるが0.1～0.25%程度と推定される。フェライト結晶内に双晶が多数確認されることや、加工による硬化の影響もみられることから、かなり低温下で仕上げの鍛打が施され

たものと判断される。

またEPMAによる非金属介在物の鉱物組成を調査した結果、チタン（TiO_2）の割合の高い結晶が確認された。この特徴から鉄素材の始発原料が砂鉄であったことが明らかとなった。

註

（1）Table1のメタル度とは、金属関係の遺物内部の金属残存状態を、非破壊で推定するために調整された特殊金属探知機を使用した判定法のことを指す。また特殊金属探知機の感度は三段階〔H：high（○）、M：middle（◎）、L：low（●）〕に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。

特殊金属探知機の詳細な仕様は、以下の文献に記載されている。

穴澤義功「鉄生産遺跡調査の現状と課題－鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について－」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』（社）日本鉄鋼協会　社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史－その技術と文化－」フォーラム　鉄関連遺物分析評価研究グループ　2005

（2）日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

（3）黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物［第2版］』共立出版株式会社　1983

第５章　鉱物各論　D. 尖晶石類・スピネル類（Spinel Group）の記載に加筆

尖晶石類の化学組成の一般式はXY_2O_4と表記できる。Xは２価の金属イオン、Yは３価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。（略）

Table１　供試試料の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物№	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度
						大きさ(㎜)	重量(ｇ)	
HD-1	花館跡	HD-12	№１	椀形鍛冶滓	中世	72.5×60.5×20.4	104.1	なし
HD-2	花館跡		№２	鉄製品		32.1×19.5×11.5	10.0	L(●)

調査項目

マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	備考
	○	○	○		○			
○	○	○		○				

Table２　供試試料の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物№	遺物名称	推定年代	全鉄分（Total Fe）	金属鉄（Metallic Fe）	酸化第１鉄（FeO）	酸化第２鉄（Fe_2O_3）	二酸化珪素*（SiO_2）	酸化アルミニウム*（Al_2O_3）
HD-1	花館跡	HD-12	№１	椀形鍛冶滓	中世	45.56	0.26	33.20	27.87	18.81	5.90
酸化カルシウム（CaO）	酸化マグネシウム（MgO）	酸化カリウム（K_2O）	酸化ナトリウム（Na_2O）	酸化マンガン（MnO）	二酸化チタン（TiO_2）	酸化クロム（Cr_2O_3）	硫黄（S）	五酸化燐（P_2O_5）	炭素（C）	バナジウム（V）	銅（Cu）
2.13	1.14	1.65	0.32	0.06	0.33	0.06	0.119	0.44	0.40	0.01	0.02
二酸化ジルコニウム（ZrO_2）	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO2 Total Fe								
<0.01	24.71	0.542	0.007								

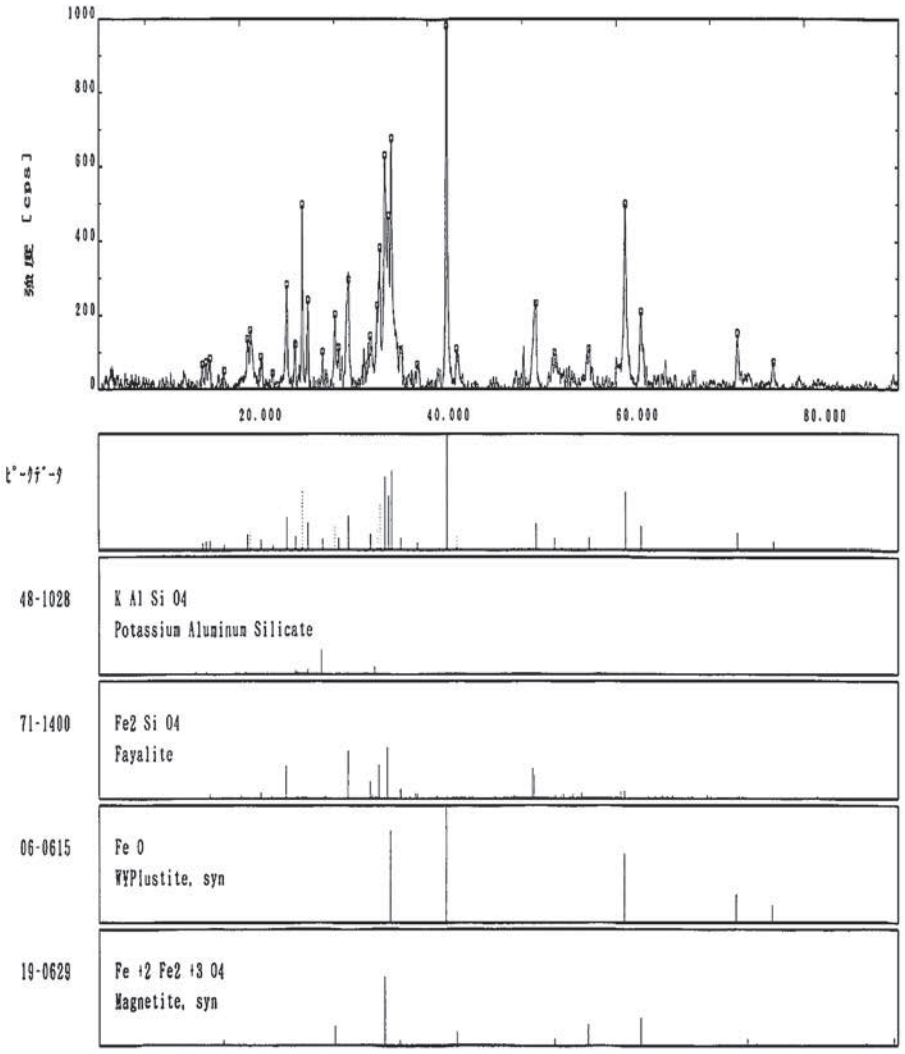
Table３　出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）		
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分
HD-1	花館跡	HD-12	椀形鍛冶滓	中世	滓部：W+F	45.56	27.87	3.27
HD-2			鉄製品		介在物：M·H·U系固溶体+W+F、金属鉄部：亜共析組織（フェライト双晶）	-	-	-

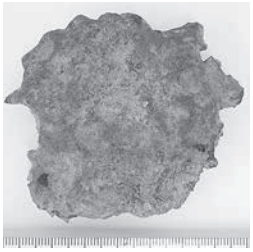
化学組成（%）

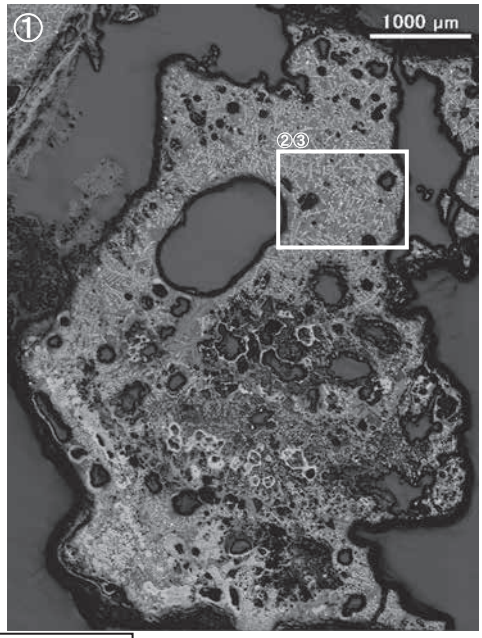
TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	所見
0.33	0.01	0.06	29.95	0.02	鍛錬鍛冶滓
-	-	-	-	-	鍛造製品〔始発原料：砂鉄、軟鉄（C：0.1～0.25%程度）、折返し鍛錬後に鍛打成形

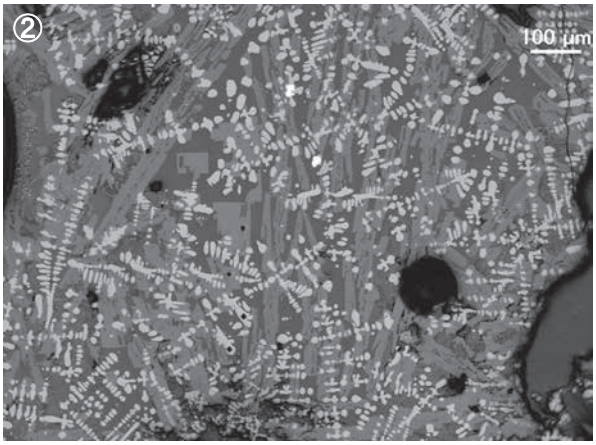
W：Wustite（FeO）、Fayalite（2FeO·SiO2）、M:Magnetite（FeO·Fe2O3）、U：Ulvöspinel（2FeO·TiO2）

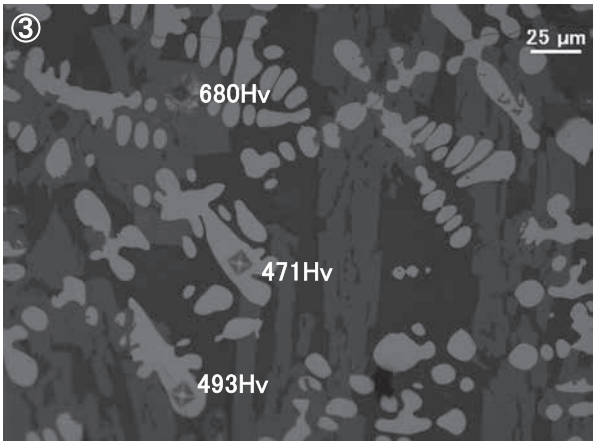


HD-1
椀形鍛冶滓
①～③滓部:ウスタイト・ファヤライト、硬度:50gf、
微小明白色粒:金属鉄、
不定形青灰色部:錆化鉄

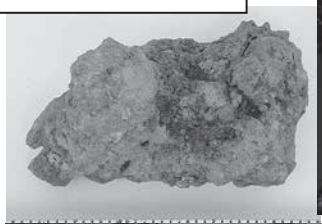


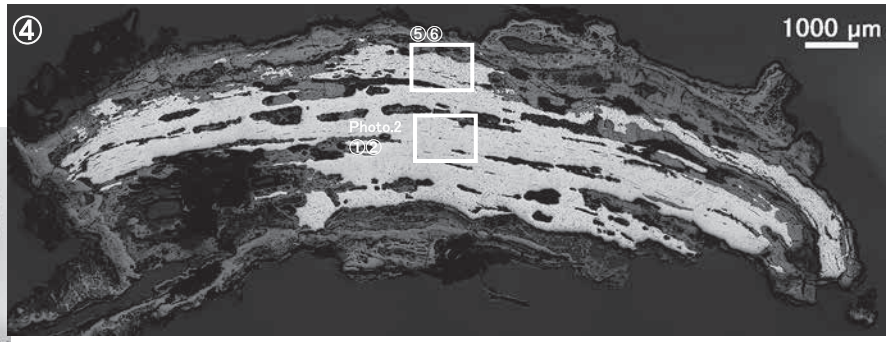


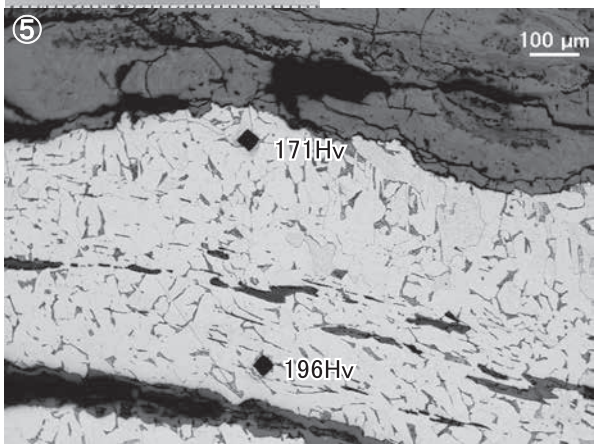




HD-2
鉄製品(鍛造品)
④ﾏｸﾛ組織、ﾅｲﾀﾙetch
亜共析組織
⑤⑥高炭素域拡大
Photo.2①②低炭素域拡大(ﾌｪﾗｲﾄ粒内双晶)







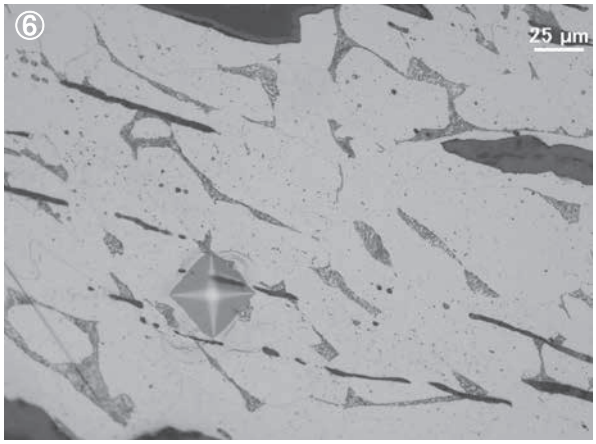
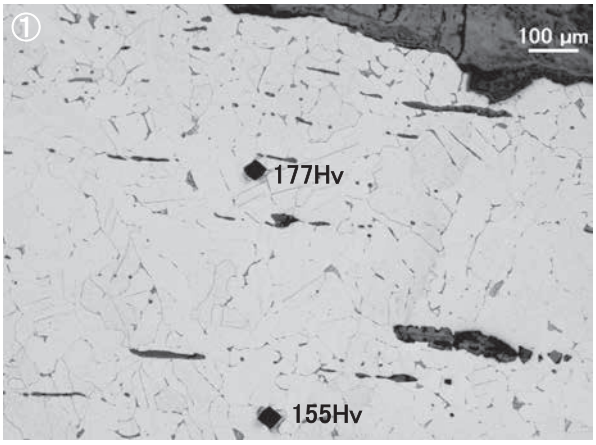
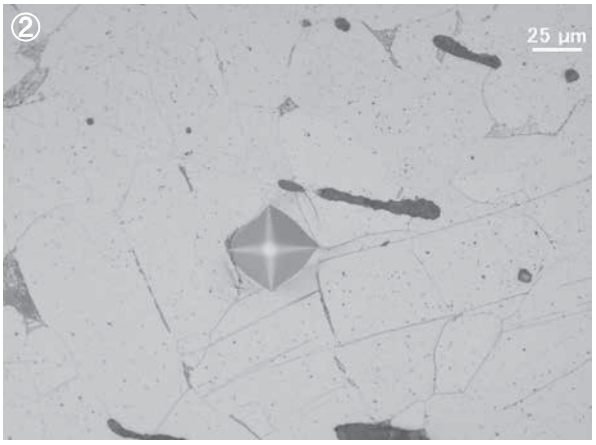
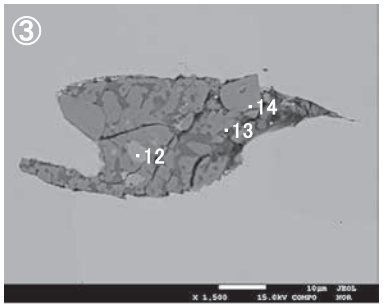
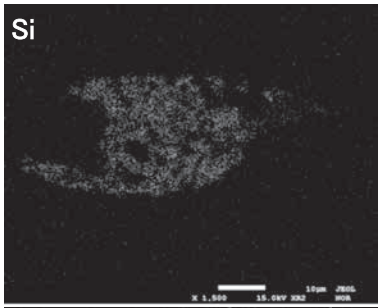


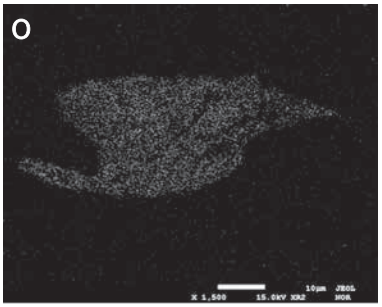
Photo.1　椀形鍛冶滓・鉄製品(鍛造品)の顕微鏡組織

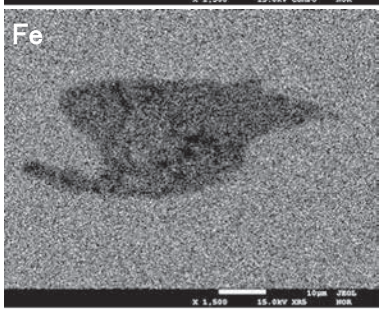


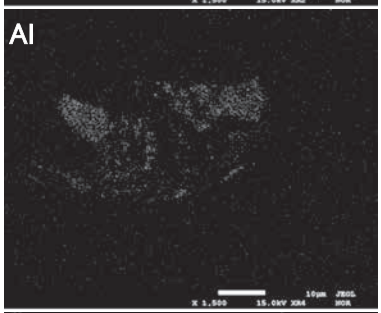


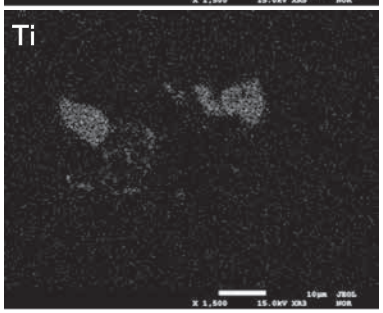


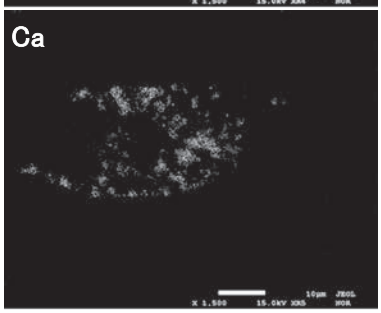


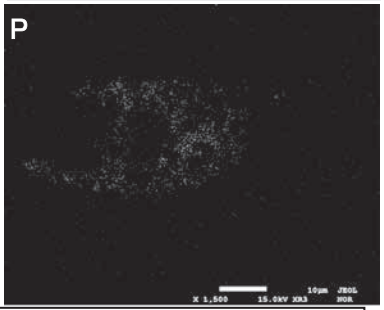












定量分析値

Element	12	13	14
MgO	0.120	2.500	1.046
SiO_2	0.385	29.840	0.182
Al_2O_3	0.367	0.934	16.738
K_2O	–	0.236	–
CaO	0.043	0.963	–
TiO_2	0.751	0.223	13.020
S	0.018	0.094	–
P_2O_5	0.001	1.614	0.016
F	–	–	–
Na_2O	–	0.051	–
ZrO_2	0.480	–	0.035
SrO	0.030	–	–
CuO	0.068	0.016	–
FeO	92.894	63.166	60.252
MnO	0.024	0.279	0.081
Cr_2O_3	–	0.009	1.700
V_2O_3	0.100	0.035	4.047
Total	95.281	99.960	97.117

鉄中非金属介在物の反射電子像(Compo.)および特性X線像

Photo.2　鉄製品(鍛造品)の顕微鏡組織・EPMA調査結果

Ⅶ　総　　括

今回の調査によって、本館の構造及びその時期が明らかとなった。以下では、遺構と遺物をまとめたうえで、気仙地域における中世城館群及び花館にみる歴史をまとめていく。

1　中世の遺構・遺物

（1）遺　　構

城館に伴う遺構には、普請となる曲輪、堀、切岸、土塁、作事となる掘立柱建物、鍛冶炉、虎口、柵列、溝跡がある。これらのように普請と作事の痕跡は認められるものの、城館を構築することに対しては主郭を中心に最小限度に抑えられている。

曲輪は主郭、副郭を含め４カ所ある。主郭は丘陵頭頂部に形成されており、そのほかの曲輪は標高の低い箇所にそれぞれ位置している。主郭や副郭が形成されている頭頂部付近は削平され構築しているが、それ以外は自然地形を大きく残している。また、主郭のみ縁辺部に対して版築を行い従来の地形を大きく改変していることが捉えられている。主郭と副郭は堀・切岸・土塁で囲まれており、主郭の平坦面を中心に少ないながらも遺構が存在している。

堀は２条検出した。１号堀は主郭の東側以外をコ字状に廻らしている。この西辺は南北方向に延び、大手まで続くものであり、全長は約160mある。また、西辺と直交するように竪堀（２号）が存在している。この堀は、先述したように虎口、排水、区割などの機能を考えられるものの、現時点では判然としない。

土塁は５基検出した。基本的に残存箇所は少ないが、堀の堆積土から検討すると、主郭に構築された４・５号土塁は、堀と同様にコ字状に廻らされていたものと思われる。１号及び２・３号土塁の機能については不明である。

掘立柱建物は２棟検出した。共に主郭の北側に隣接して配置されている。規模が４×２間と２×１間である。桁行間数は異なるものの、梁間の長さは概ね共通している。建物の形成時期は、遺構の重複関係から鍛冶炉操業時期の後と捉えられる。ただし、棟数も少ないことから、その様相については判然としない。

鍛冶炉は５基検出した。５号鍛冶炉以外は全て主郭内に形成され、平面形が方形基調である。これらのなかには１・２号のように使用面が残存しているものも確認できている。ただし、検出位置や平面形状に差を見出せているが、使用時期は概ね一致している。

虎口は１カ所検出した。主郭の南東方向で確認できたものは大手に伴うものと想定される。これについては土塁上端の収束の仕方から捉えているが、１号堀南辺の深さ、外壁法高の状況からも十分に裏付けられる。ただし、門跡等を確認するまでには至っていない。また、これ以外にも調査区外の主郭北東隅で確認できている。これは１号堀北辺と接しているものであり、搦手に対応するものと思われる。

柵列は２条検出した。それぞれ規模は異なるものの、共に土塁の直下で確認している。北側は残存状況も良く全長約26mである。配置されている箇所からみれば、丘陵頭頂部の南北を分断している。このことから土塁と同じような機能が備わっていたものと思われる。

溝は６条検出した。検出位置と平面・断面形状、その規模などから、２・４・５号溝、１・３・６

号溝に分けられる。前者は用途が判然としないことから、後者に限ってまとめていきたい。６号は土塁との重複関係から、それより古いことが確認できている。各溝は土塁や切岸などの防御施設と重複ないし隣接することから、極めて重要な位置にあるようにも捉えられる。よって、これらが何らかの施設に伴うものと想定されるものの、その様相については判然としない。

（２）遺　　物

遺物は常滑産・在地産の国産陶器を中心に、中国産磁器などがある。

国産陶器は常滑産86点と在地産13点の計96点あり、これらは全て甕である。常滑産甕は、釉薬の有無、器厚の差により、所属年代は15・16世紀代に区分している。

中国産磁器は、龍泉窯青磁碗11点、景徳鎮窯染付碗８点である。前者は口縁部に雷文帯を有するものも含まれており、概ね15世紀代である。後者は草花文が認められており、概ね16世紀代である。

（３）城 館 の 時 期

上述したことを踏まえて、ここでは本城館の様相を遺構の重複関係と遺物の所属時期、炭化材年代測定結果から捉えていきたい。

遺構の重複関係は土塁・版築と柵列・溝、柱穴と鍛冶炉との新旧関係を把握している。これらは柵列・溝、鍛冶炉→版築・土塁、柱穴の順に形成されている。

遺物の所属時期は常滑産陶器が15～16世紀、龍泉窯青磁碗が15世紀代、漳州窯染付碗が16世紀である。これらは15・16世紀に分けられる。

炭化材年代測定は鍛冶炉などを中心に分析しており、その結果は64頁にまとめている。各遺構の年代は、鍛冶炉や土塁直下、版築中、４号切岸貝層が15世紀後葉から16世紀前葉、１号性格不明遺構や掘り込みを伴わない鍛冶炉の上面が16世紀中葉に大別される。

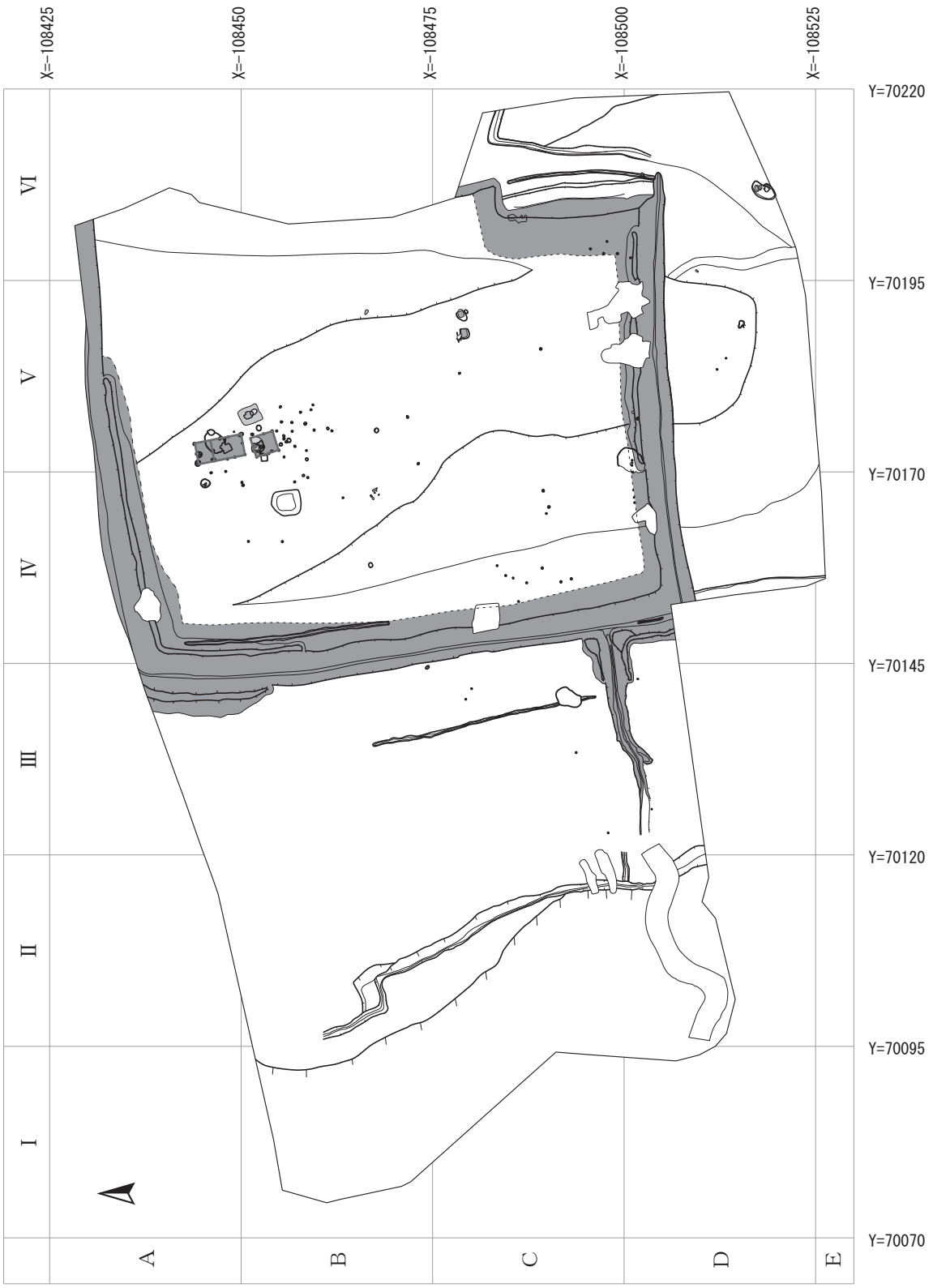
これらのことをまとめると、15世紀後葉から16世紀前葉とそれ以降（16世紀中葉か）を中心に利用されたと捉えることができる。この時期差をⅠ・Ⅱ期に区分し、それぞれを第41・42図に掲載している。

Ⅰ期：自然地形を残し、頭頂部にのみ遺構が構築されている時期である。主郭は柵列と溝で囲まれた中に、１～４号鍛冶炉、１号性格不明遺構などが形成されている。この時期の遺構形成のあり方が城館として成立していたかという点については、議論の余地が残されているものと思われる。しかし、頭頂部に僅かながらも防御施設を伴うことから、現時点では城館として捉えておきたい。ただし、その機能については判然としない。また、この時期に鍛冶炉を操業した工人によって貝類などの食料残滓が廃棄されている。

Ⅱ期：大規模な普請が行われた時期である。主郭は縁辺に版築を施した上に土塁を構築し、切岸・堀でコ字状に囲んでいる。また、副郭も同様に堀と土塁を構築している。その主郭の中心に、掘立柱建物などが形成されている。おそらく１号性格不明遺構はその際に埋められたものと思われる。この時期は、遺構や遺物も少なく生活した痕跡が乏しいことから、非常時に用いられた陣城や詰城として機能していたと考えられる。

0 (1：800) 20m

第41図　Ⅰ期遺構配置図



0 (1 : 800) 20m

第42図　Ⅱ期遺構配置図

2　自然科学分析について

ここでは自然科学分析を行った経緯及び成果についてまとめておく。それらについてはⅥ章に記載している。

放射性炭素年代測定

鍛冶炉と性格不明遺構や版築中で確認できた貝層などの遺構時期を特定するために、出土した炭化材と貝類を測定している。

分析の結果、15世紀後葉から16世紀前葉と16世紀中葉に分かれることが明らかとなった。前者が１～３号鍛冶炉の焼土内や土塁直下と版築直下から出土した炭化材（２号住居状遺構）及び貝層、後者が１号性格不明遺構や１・３・５号鍛冶炉焼土直上が該当する。これらの成果と遺構の重複関係から遺構の形成過程及び館本体の構築時期が捉えられたことは有意義な成果と言える。

種実・貝類の同定

４号切岸を掘り下げ中に、長軸で2.5mの貝層が確認できた。小コンテナ25箱分が出土しており、そのうち５箱を分析対象としている。目的は貝の種類及び土層中に含まれる種実類を同定し、当時の食生活を明らかにすることである。

分析の結果、骨貝類と共に炭化種実が検出されている。貝はコタマガイを中心にクロタマキビやコハクガイなどがある。また、僅かながら魚類の骨も認められている。炭化種実はコムギ、イネ、オオムギ、オニグルミなどがある。これらは一括廃棄された食料残滓である可能性が高いとの見解が得られている。

さらに、それらの一部を年代測定しており、本遺構が版築構築以前に廃棄されたものであることが明らかとなっている。

鉄滓の成分分析

中世城館で行われた鉄生産工程を明らかにするため、鉄滓２点を分析している。

分析の結果、これらは椀形鍛冶滓、鍛造鉄製品であることが明らかになった。また、これらを産出する遺構として主郭から鍛冶炉４基が確認できており、今回の結果と整合していると捉えられる。

3　気仙郡の中世城館にみる歴史的環境

（1）気仙地域における古代末～中世の情勢

陸前高田市、大船渡市、住田町、気仙沼市に所在する城館跡73カ所を第43・44図及び第７表に示した（註１）。これらを含め、気仙地域（註２）には約100カ所の城館跡が確認されているが、すでに開発等により消滅したものも少なくないと思われる。まず、平安時代末期からの気仙地域における時代背景を概観し、各豪族の動向や情勢について整理する。

気仙地域は古くから産金の地として知られ、貞観13年（871年）に気仙郡司の金為雄が金山開発の功により「金」氏を賜ったとされる。以来、金氏は気仙地域における有力な一族として歴史上に度々登場する。平安時代末期、気仙の金は奥州藤原氏の重要な財源と考えられているが、その経営形態等には不明な点が多い。しかし、前述の金氏が中世以降においても「気仙郡司」を世襲しており、金氏が気仙の金山経営の一端を担っていたことは十分に考えられる。

奥州藤原氏滅亡後、源頼朝により奥州総奉行が置かれ、葛西清重がこれに任じられている。その際

に清重が拝領したのは、『吾妻鏡』に「伊澤・磐井・牡鹿等の郡已下数箇所を拝領すと」（文治５年９月24日条）と記されたとおりである。しかし、気仙郡が「已下数箇所」に含まれるか否かに関しては諸説あり明確なところではないが、『陸前高田市史』では、当初から葛西氏の拝領したものではなく、後に所領の中に取り入れられたとしている（陸前高田市1995）。なお、葛西領に取り入れられるまでの間、気仙郡を統治していたのは源頼朝により気仙郡司の地位を回復された金氏であった可能性が考えられる。この頃、金氏は本宿館（15）を本拠地としたとされるが、後述する千葉氏の勢力に押され、やがて衰退していくことになる。

中世気仙郡に関する具体的な様相が明らかになるのは、正和４年（1315年）に千葉次郎太夫広胤が気仙郡を拝領した頃である。広胤は本吉郡馬籠城主千葉六郎左衛門忠広の次男で、葛西氏より気仙郡に所領を給せられ、矢作の鶴崎城（５）に居住した。南北朝期の建武３年＝延元元年（1336年）に勃発した馬籠合戦では、本家筋にあたる馬籠千葉氏が北朝側であったにも拘らず、南朝側の葛西氏に従って参陣し、戦後には葛西氏により所領を安堵されている。以後、小友氏 - 蛇ヶ崎城（31）、高田氏 - 高田城（２）、長部氏 - 長部館（18？）、浜田氏 - 米ヶ崎城（28）といった矢作千葉氏の分流が広田湾一帯に勢力を広げている。このうち、浜田氏は主家である葛西氏から浜田基継を嗣子として迎えており、一族の中でも中心的存在となる。一方、気仙郡北部においては、佐々木泰綱が文明17年（1485年）の有住郷での戦功により桃生郡大窪から盛郷田茂山館（33）に移っている。佐々木氏は葛西氏家臣で、泰綱が気仙郡北部を拝領した背景には、北方の南部氏への備えと考えられる。また、気仙郡の南に位置する本吉郡においては、文治５年（1189年）の奥州合戦の後、熊谷直家が源頼朝より気仙沼を拝領し、直家の子直宗の頃より赤岩城（60）に居住したと伝わる。しかし、先述した馬籠合戦では馬籠千葉氏を支援して戦い、熊谷直時が戦死している。以後、熊谷氏の勢力は衰退し、やがて葛西氏に臣従することになる。

このような勢力分布の中、大小の争乱が頻繁に勃発している。主なものを挙げると、貞治３年＝正平19年（1352年）の鳥崎城（註３）の争乱や、応永20年（1413年）の高田・長部館の争い（註４）などの一族間における内乱、永享９年（1437年）の気仙一揆、文明７年（1475年）と永正元年（1504年）に発生した東山の大原氏による侵入、文明17年（1485年）の南部氏による有住郷への侵入、天文７年（1538年）の伊手合戦、永禄３年（1560年）の浜田大膳太夫広継による気仙沼への侵攻、天正２年（1574年）の本吉大膳太夫重継の反乱、天正15年（1587年）に勃発した浜田氏と本吉氏の衝突と、これから派生した天正16年（1588年）の浜田安房守の乱などがある。特に、浜田安房守の乱は葛西晴信の小田原参陣の足枷となり、葛西氏は豊臣秀吉の奥州仕置により所領を没収されることになる。

葛西氏の没落後の気仙地域は伊達政宗の支配下となった。慶長３年（1598年）には豊臣秀吉が没し、直後には中央にて徳川家康らによる権力闘争が勃発し、東北地方もその影響を受ける。慶長５年（1600年）、徳川家康と親しい関係にあった伊達政宗は、反徳川の上杉景勝の支配下にある白石城を攻撃した。いわゆる「白石御陣」と呼ばれる戦いには、気仙郡から矢作久右衛門や小泉能登らの旧葛西家臣を中心とした「気仙三十六騎」が参陣している。彼らが白石に到着した時には既に白石城は落城しており、手柄をたてる機会はなかったようであるが、伊達政宗に目通りを許されたと伝わる。（註５）

（２）気仙地域における中世城館の分布

ここまで中世における気仙地方の情勢を概観してきたが、当地域では古代以来「気仙郡司」を襲名してきた金氏、葛西氏による支配のもとで勢力を拡大してきた千葉一族各氏、気仙郡北部の佐々木

53
52
51
38
36
37
34
35
17
32
33
16
40
15
13
12
14
38
7
6
8
5
11
10
9
4
2
3
1
24
27
25
22
21
23
26
28
18
19
41
31
20
30
29
57
54
58
61
60
62
63
64
65
66
68
67
59
55
56
69
70
71
73
72

第43図　城館分布図（1）

第７　城館一覧

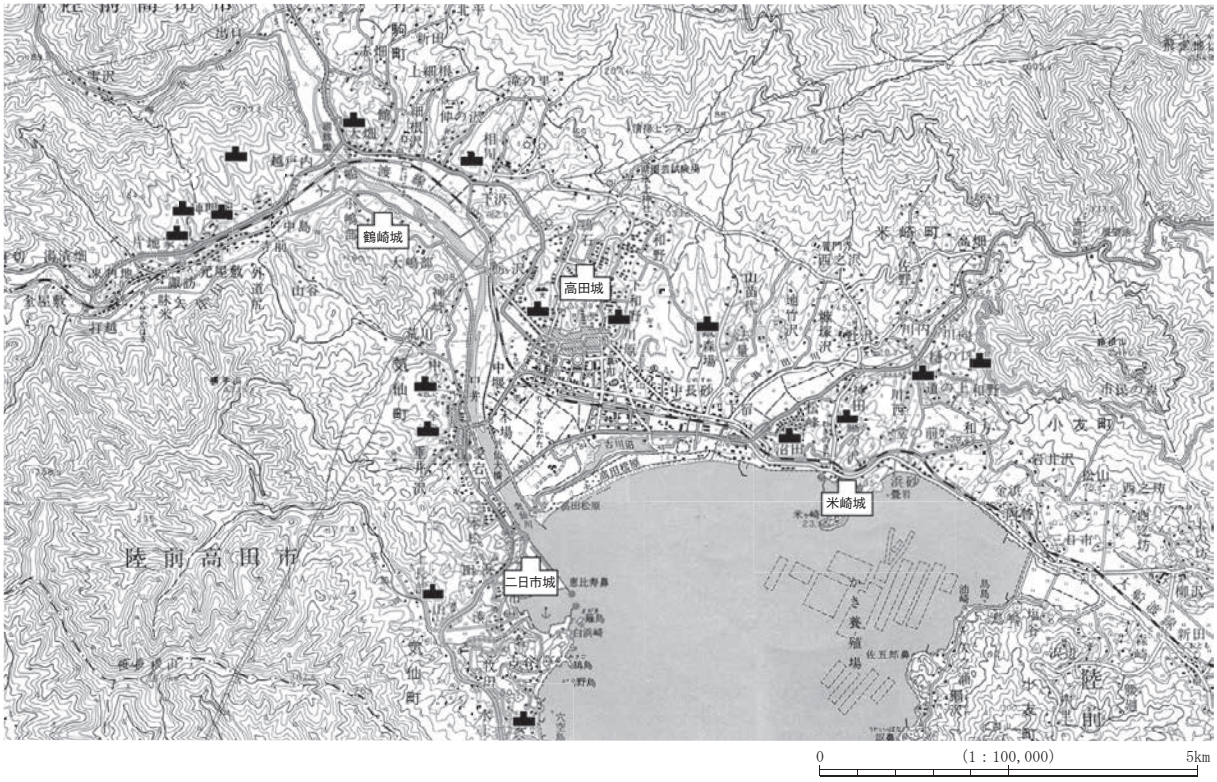
No.	名　称	別　称	城　　主
1	飯森館	花館	浜田胤長　小泉能登守？
2	八幡館	東舘、高田城	千葉安房守広綱
3	古泉館	東舘	小泉能登守
4	西　館		
5	内　館	鶴崎城、鶴舘城	千葉広胤
6	古　館	倉主館	大善院継清
7	外　館		
8	古　館	片地家館、高屋敷館	
9	番　館	番立	
10	フン館	古館	
11	大　館	大立	
12	古　館	府本館、壺館	
13	壺　館	坪城、坪川城、竹駒城	佐々木安芸、蔵人、助次郎
14	滝ノ里館	花輪館	佐々木与八郎重綱
15	本宿館	横田城、書宿城	日（昆）野右馬之充
16	三日市館	外舘	日野遠江守、大学
17	南行館	弦根館	紺野利幹
18	二日市館	鵜飼舘、八幡館、長部館？	金為近
19	上長部館		千葉慶宗
20	要谷館		
21	舘脇館	舘ヶ脇館	
22	東　館	今泉古館	
23	浜田城	月舘	千葉胤重（浜田五郎）
24	中山館	西の沢館	金時弘
25	中　陣	高木館、日高城	金為村
26	脇ノ沢館	鳥（島）崎城	
27	一起館	一騎舘	
28	米ヶ崎城	浜田城	
29	高　館	広田城	大和和田掃部
30	長茂館	眺舘	
31	蛇ヶ崎城	谷地館	
32	根ノ城	根岸館	千田九兵衛
33	田茂山城		小沢右馬充
34	猪川城		新沼長門他
35	迎　館	向館	
36	川原城		
37	堀内館	御獄古館	

No.	名　称	別　称	城　　主
38	松　館		新沼安芸綱清
39	森　館		
40	赤崎城	前館、生形舘	新沼美作
41	末崎城		武田丹後他
42	高舘城	高館	千葉胤冬
43	槻舘城	槻舘	今坂遠江
44	平　舘	平館城	新沼太郎左衛門
45	野形館	花輪城	佐々木有綱
46	平田館	古館	多田民部の祖
47	本丸城	八幡館、本丸舘	多田左近将監の祖
48	鷹森館	楹舘	
49	小出館	小出城	
50	吉浜城（舘）	舘	新沼薩摩
51	世田米城	下館、新城	阿曽沼信康
52	上館原城	上館	阿曽沼重範
53	小股舘	紺野舘	紺野隠岐
54	八幡館		千葉藤右ヱ門　千葉美濃守
55	北　館		阿部四郎左衛門
56	南　館		阿部四郎左衛門
57	白鳥館		千葉右衛門　千葉蔵人　千葉石見
58	松　館		千葉右衛門　千葉蔵人　千葉石見
59	忍　舘	鹿折城	熊谷伯路耆　千葉信濃
60	赤岩城		熊谷太郎左衛門直春　熊谷右馬之丞
61	築　舘		熊谷右近　熊谷左近
62	中　舘		熊谷上総直平
63	新庄館		千葉長門守　熊谷長門
64	細浦舘		千葉長門守　熊谷図書直正
65	長崎舘		熊谷備中　熊谷淡路直資
66	洲崎舘		
67	谷地館		
68	茂衣舘		
69	和野舘		
70	藤崎舘		
71	小屋舘城	八幡館、月舘、高谷舘	熊谷左京進　熊谷左近
72	古　館		遠藤盛忠
73	古　館		

氏、本吉郡の熊谷氏や本吉氏などの豪族が乱立し、主家の葛西氏や気仙地域と隣接する勢力、あるいは彼等の家臣を含めて大小の争乱を繰り広げてきた様子が見て取れる。気仙地域における城館跡は、このような情勢下において造営されたものであろう。

気仙地域における中世城館の分布傾向を見ると、その多くが盛川・気仙川・矢作川・大川・鹿折川などの河川流域、広田湾・大船渡湾・越喜来湾などの港湾部、米ヶ崎・蛇ヶ崎などの岬部分の丘陵に造られている。近世においては、これらの河川沿いに街道が整備され、港湾部は東廻り航路の開発により交易が盛んとなるが、中世においても水陸における交通の要衝の地であったと考えられる（註６）。

さて、ここまで「中世城館」として一括りで扱ってきたが、これらは「本城」と「支城」（註７）に大きく分けることができる。以下では、千葉一族の主たる支配地域であった矢作・高田・長部・浜田の各地域に所在する城館について、近世地誌等の記録をもとに「本城」と「支城」に分類し、それぞれの城館の位置関係や役割、各豪族の勢力分布の詳細を明らかにしていきたい。なお、便宜上、現在の町名ごとにまとめることとする。



第44図　城館分布図（２）

矢作地域：矢作地域の城館分布を観察すると、矢作川に沿って点在していることが分かる。このうち、気仙川との合流地点の南岸に所在する鶴崎城（５）は、正和４年（1315年）、本吉郡馬籠城主千葉六郎左衛門忠広の次男、次郎太夫広胤が葛西氏より気仙郡を拝領してここに居住したと伝わり、気仙郡における千葉氏発祥の地とも言える。この鶴崎城の東には陳ヶ森館（＝今泉古館。21）があり、鶴崎城の支城であったと考えられる。また、外館（７）も鶴崎城の支城とされる。外館の城主について『仙台領古城書上』には「城主千田周防子修理。天正年中於深谷討死。」とあるが、永禄８年（1565年）に葛西晴信より桃生郡での戦功を賞された千葉因幡守重久の嫡男矢作卯之丸が後に「修理」と称していることから、「千田周防子修理」ではなく「千葉周防子修理」であると思われる。な

お、『封内風土記』には、天正年中は鶴崎城に「千葉因幡」が居していたと記されており、これは修理の父重久のことと思われる。「因幡」は「周防」とも称していたのであろうか。

この外館と隣接する古館（８）では昭和62年（1987年）に発掘調査が行われている。この調査では、主郭と目される東西85m×南北55mの平場とそれを囲む５段の平場、主郭の北側尾根を東西に切る堀跡、掘立柱建物跡が２棟検出されている（岩埋文1988）。出土遺物には中国産の白磁や染付、美濃産の灰釉陶器がある。これらの年代からは16世紀後半の城館跡と考えられ、上記の千葉修理が活躍した頃の城館である。近世の地誌類においても古館の記録は存在しないため城主等は不明であるが、検出された建物が極端に少ないことや、外館と隣接していることから、外館の支城もしくは一連の防御施設であった可能性が窺える。この他、矢作川上流にも城館跡とされるものがあるが、これらについての記録も存在しない。しかし、番館（９）のように、その名前から支城であることが窺えるものもあり、鶴崎城の支配下にあって、磐井郡との最短ルートを抑える役割を果たしていたものと考えられる。

高田地域：高田城（２）を中心とし、東側に花館（１＝報告遺跡）と古泉館（３）、西側に西館（４）が所在する。西館は『岩手県中世城館跡分布調査報告書』には掲載されていないが、『岩手県遺跡情報検索システム』においては周知の遺跡として掲載されており、文献等からも西館の存在が確認できることから、本稿では『岩手県遺跡情報検索システム』に従い、４の地点を西館と比定する。

『陸前高田市史』によれば、矢作の鶴崎城から高田城に移ったのは矢作千葉氏の祖千葉広胤の孫にあたる重慶の子胤慶で、その時期は南北朝期の終わり頃とされる。以来、「高田氏」を称し、米ヶ崎城へ移るまで、高田氏の拠点となった。米ヶ崎城への移転時期は、浜田基継の頃とする説と浜田安房守広綱の頃とする説があり明確ではないが、移転後も浜田氏の支配下で高田地域における拠点としての役割を担ったものと考えられる。

西館の城主は熊谷氏とされる。熊谷氏は葛西氏の庶流とされ、有力な豪族であったことが窺える。元亀元年（1570年）には西館の熊谷胤照が葛西晴信より高田村を宛行われた記録が残っている。この熊谷胤照の叔母は古泉館城主小泉能登守の夫人であり、また、前述したように、浜田基継が葛西氏出身であるため、浜田・熊谷・小泉の各氏は一族と見なすことができる。このように、16世紀後半の高田城周辺には、浜田氏と比較的近い関係にある家臣や豪族が配置されていたことが分かる。花館については後述にて詳細を検討することとする。

気仙地域：気仙町の中世城館については北側の今泉地域と南側の長部地域に分布域が分かれる。長部地域では、15世紀初頭頃に矢作千葉氏の一族である千葉慶宗が長部館に居を構え、やがて長部氏を称することになる。長部館の所在地を、『岩手県の地名』（平凡社1990）や『陸前高田市史』では二日市館（18）の場所としているが、『長部村風土記御用書出』（以下『（村名）安永風土記』とする）や『気仙風土草』等の近世地誌では「今野助九郎」を城主としており、長部千葉氏については一切触れられていない。今野助九郎は、天正18年（1590年）の葛西・大崎一揆において討死したと伝わる。今野助九郎と長部千葉氏との関係は不明であるが、長部千葉氏の家臣もしくは、長部千葉氏の後に長部地域を統治した可能性が考えられる。また、伊達領となった直後の文禄元年（1592年）には伊達氏家臣の鈴木宗記が城代として二日市城に駐屯している。この他、長部地域においては、二日市館の南に所在する要害館（20）がある。要害館は本吉郡との境界近くに位置し、南側を監視する役割を果たした二日市館の支城と考えられる。

今泉地域は気仙川の下流～河口に面し、近世には今泉宿が設置されるなど交通の要衝であった。また、寛永８年（1631年）以降には代官所が置かれるなど、気仙郡の中心となった場所である。しか

し、中世城館に目を向けると、中心的な存在の城館は見当たらず、いずれも規模の小さい城館のようである。記録では14世紀半ばの今泉了元の存在が認められるが、その拠点については不明である。これらの城館のうち、『今泉村安永風土記』では陳ヶ森館（＝今泉古館。21）について「當郡長部村二日市御城主今野助九郎と申御方假城之由申傳候處年月相知不申候事」と記している。また、『気仙風土草』では「今泉驛（中略）一愛宕社。此地。本長部城主今野助九郎支城なり（以下略）」とある。ここに記された「愛宕社」の場所は明確ではないが、現在の気仙町には「愛宕下」という地名があり、その付近の城館跡には館脇館（21）がある。上記のように、今泉地域においては二日市館の支城が複数存在し、水陸交通の監視や高田地域との中間地点としての役割を果たしていた可能性が窺える。

米崎地域：米崎地域には金氏の拠点が置かれていたようである。日高館（＝中陣。25）には14世紀半ば頃に金土佐守為村が居住したと伝わり、中山館（24）には文明３年（1471年）に葛西朝信に仕えた金時広が居住したという記録が残る。また、米ヶ崎城（28）には浜田氏の拠点が高田城より移されており、その時期は16世紀後半のことと考えられる。中山館の金氏は天正２年（1574年）、葛西晴信より所領を安堵されており、これは浜田氏が米ヶ崎城に移ってきた時期と重なる。すなわち、この時期の米崎地域には浜田と金の両氏が存在していた様子が窺える。金氏の拠点である中山館を含め、日高館や一起館（27）などは通岡峠への上り口に所在し、大船渡方面への陸路を抑えていたものと考えられる。

浜田氏が拠点を移した米ヶ崎城の北西には浜田城（23）が所在し、『岩手県中世城館跡分布調査報告書』では城主を千葉胤重（浜田五郎）としている。『葛西記』などによれば、千葉胤重は千葉介頼胤の子で、気仙郡千葉氏の祖とされているが、これは正和４年（1315年）に本吉郡馬籠から移った千葉広胤を祖とする『気仙千葉氏大系図』と大きく外れるもので、伝承の域を出ない。なお、『陸前高田市史』では千葉胤重を祖とする説を後世の創作としている。また、『浜田村安永風土記』と『封内風土記』では浜田城主を大和田掃部としている。大和田掃部は、16世紀後半には広田城（＝高館。28）の城主ともされている人物であり、米ヶ崎城主浜田安房守広綱とはほぼ同時代の人物である。この頃は浜田氏が気仙郡旗頭として勢力を誇っていた時期であり、米ヶ崎城の喉元にあたる浜田城を他の勢力が抑えていることは考えにくく、大和田氏は浜田氏の有力な家臣であったと推測できる。

上記のように、16世紀後半の米崎地域は、北は金氏が陸路を抑え、南は浜田氏が沿岸部を支配していた様子が窺いとれる。また、前述のとおり、この時期は浜田氏の全盛と言われており、金氏もまた浜田氏の支配下にあった可能性も高い。

４　花館跡にみる歴史的環境

花館跡は、上述してきたように15後葉から16世紀中葉にかけて機能していたことが明らかとなった。その約100年の歴史のなかで、先述した２人が城主となる可能性は十分に残されている。そこで上記の歴史を参考にしながら、城主らの歴史をまとめてみたい。

浜田胤長の頃：胤長の先祖である千葉広胤が気仙郡鶴崎城の入り、矢作千葉の祖となる。次の代の矢作千葉重慶が、長男胤慶を高田城、次男慶宗を長部城と近隣に住まわせた。その前者の長男が胤長である。この頃、千葉系一族は全盛時代を迎え、浜田一族が高田及び長部にかけて支配することとなる。そして応永二十年（1413年）に胤慶と慶宗による兄弟間の争乱が発生している。この乱では慶宗が胤慶を自害に追い込むものの、その後胤長による報復を受け討死している。それ以降は胤長が高田

城主となり、弟の宗胤が長部館に収まっている。これにより両城が統括されたことで、高田城を中心に一帯を治めるようになっていく。つまり、胤長は矢作千葉・浜田氏の礎を築き挙げた初期段階において、重要な役割を担っていた人物として窺い知ることができる。

小泉能登守の頃：小泉館の城主である小泉能登守は、代々浜田家の家臣として仕えていたものと思われる。能登守については、文献において両者の名を殆どみることができないため詳細は判然としないが、重胤が領内に寺を移し山林田畠を寄付したことや、時胤が気仙三十六騎であることなど、少なからずその存在を窺い知ることができる。

これのような流れのなか、いずれにしても本城ではなく支城として扱っていたものと想定される。

註

註１　今回提示した城館跡は、陸前高田市と大船渡市は全域、住田町は世田米以南、気仙沼市は鹿折以北とした。また、口伝などの伝承にのみ登場する城館跡は含まない。

註２　便宜上、本文では「気仙地域」は陸前高田市以南の気仙沼市本吉町までを含めた地域を指し、「気仙郡」は陸前高田市、大船渡市、住田町一帯を指すこととする。また、気仙沼市一帯は「本吉郡」として表す。

註３　鳥崎城の所在地について、『陸前高田市史』（陸前高田市1995）では不明としているが、『岩手県中世城館跡分布調査報告書』では脇ノ沢館（26）の別称を「鳥崎城」として記載している。また、『気仙沼市史』（気仙沼市1988）では米ヶ崎城（25）を鳥崎城と想定している。

註４　応永20年（1413年）、高田城主の千葉胤慶が、弟で長部館主の千葉慶宗に襲撃されて自害した。その後、慶宗は胤慶の子である胤長と宗胤によって討たれている。慶宗の滅亡後は宗胤が長部館に入り、長部千葉家を継いでいる。

註５　気仙地域における古代末～中世の情勢に関しては、『陸前高田市史』（陸前高田市1995）、『岩手県史第２巻』（岩手県1961）『岩手県史第３巻』（岩手県　1961）、『気仙沼市史』（気仙沼市1988）等を総合的に参照した。

註６　近世においては盛川沿いに江刺街道（盛街道）、気仙川沿いに遠野街道、矢作川沿いに今泉街道、大川沿いに気仙沼街道などが整備されているが、奥州藤原氏の統治下にあった12世紀においても今泉街道が「金の道」、「塩の道」として平泉とつながっていたという伝承があり、これら河川沿いの街道の中には中世の陸路として機能していたものもあることが窺える。また、海上交通の面でも、藤原秀衡の時代に平泉で使う良材を気仙から海上輸送したという記録があり、12世紀には気仙地域から石巻経由で平泉などの内陸部との物流があったことが窺える。近世に整備・開発された街道や航路等に沿って中世城館が分布しているという状況は、近世のような大規模な流通ではないにしても、中世以前からもこれらの街道や港が機能していたことを示すものであろう。

註７　「支城」には詰の城、境目の城、番城、繋の城、伝えの城など、それぞれの役割に応じたものがあると言われるが、ここではこれらを一括して「支城」として表す。

【参考文献】

岩手県　1961　『岩手県史第２巻　中世篇上』

岩手県　1961　『岩手県史第３巻　中世篇下』

岩手県　1963　『岩手県史第４巻　近世篇１』

岩手県教育委員会　1986　『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集

岩埋文　1988　『打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第131集

加藤宣夫　1993　「唐桑阿部氏をめぐって」『葛西史研究12』　葛西史研究会

唐桑町　1968　『唐桑町史』

気仙沼市　1988　『気仙沼市史Ⅱ　先史・古代・中世編』

佐藤正助　1995　『葛西中武将録』　耕風社

紫桃正隆　1972　『史料　仙台領内古城館　第１巻』　宝文堂

紫桃正隆　1990　『戦国大名　葛西氏家臣団事典』　宝文堂

西田耕三　1993　「気仙三十六騎」『葛西史研究12』　葛西史研究会

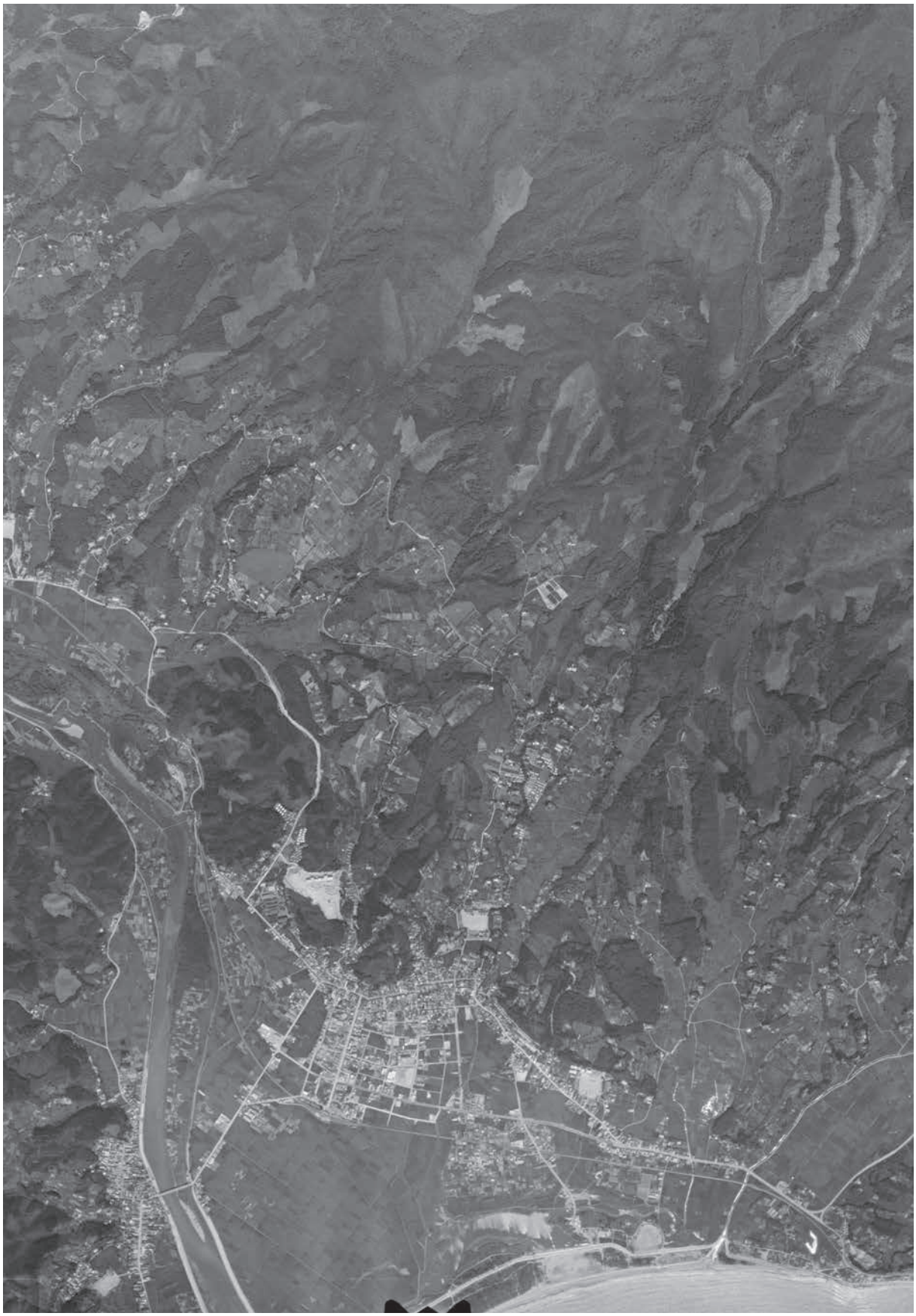
平山憲治　1990　「気仙中世史雑稿」『葛西史研究22』　葛西史研究会

森嘉兵衛（編）　1990　『日本歴史地名大系第３巻　岩手県の地名』　平凡社
陸前高田市　1995　『陸前高田市史第３巻　沿革編（上)』
陸前高田市　2001　『陸前高田市史第11巻　資料編（Ⅰ)』

写 真 図 版

遺跡遠景

写真図版１　空中写真（昭和20年代）



写真図版 2　空中写真（昭和40年代）

写真図版３　遺跡遠景（1）

平成24年度

平成25年度

写真図版４　遺跡遠景（2）

平成25年度

平成25年度

写真図版５　遺跡遠景（3）

主郭・副郭俯瞰

１号曲輪全景

２号曲輪全景

写真図版６　調査区全景

常滑産陶器

在地産陶器

中国産陶磁器

写真図版７　出土遺物

1 号土墨完掘

1 号土墨完掘

1 号土墨断面

写真図版 8　1 号土墨

２～３号土塁完掘

２号土塁完掘

３号土塁完掘

写真図版９　２・３号土塁

３号土墨完掘

３号土墨断面

３号土墨断面

写真図版10　３号土墨

４号土塁完掘

４号土塁完掘

４号土塁断面

写真図版11　４号土塁

5号土墨完掘

5号土墨完掘

5号土墨断面

写真図版12　5号土墨

1 号堀西辺完掘

1 号堀西辺完掘

1 号堀西辺断面

写真図版13　1 号堀西辺

1 号堀南辺完掘

1 号堀南辺完掘

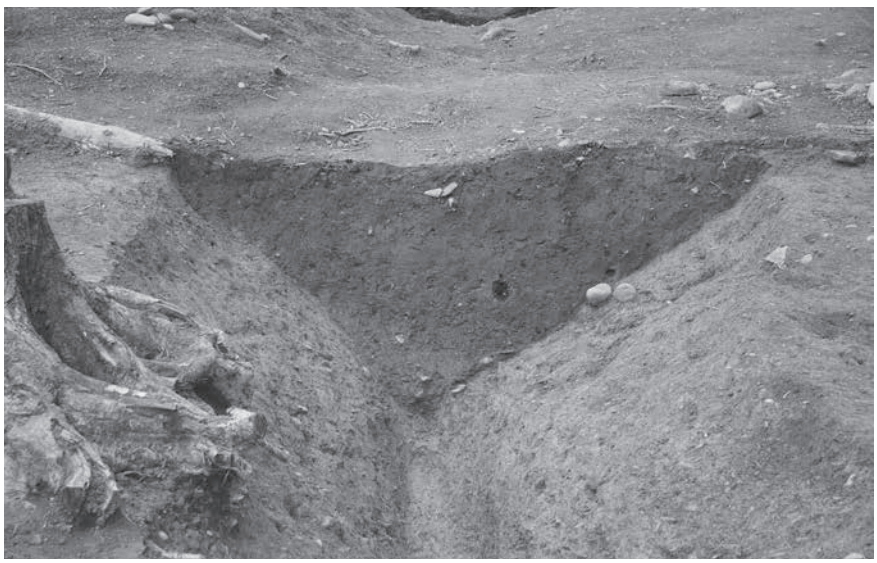
1 号堀南辺断面

写真図版14　1 号堀南辺

２号堀完掘

２号堀完掘

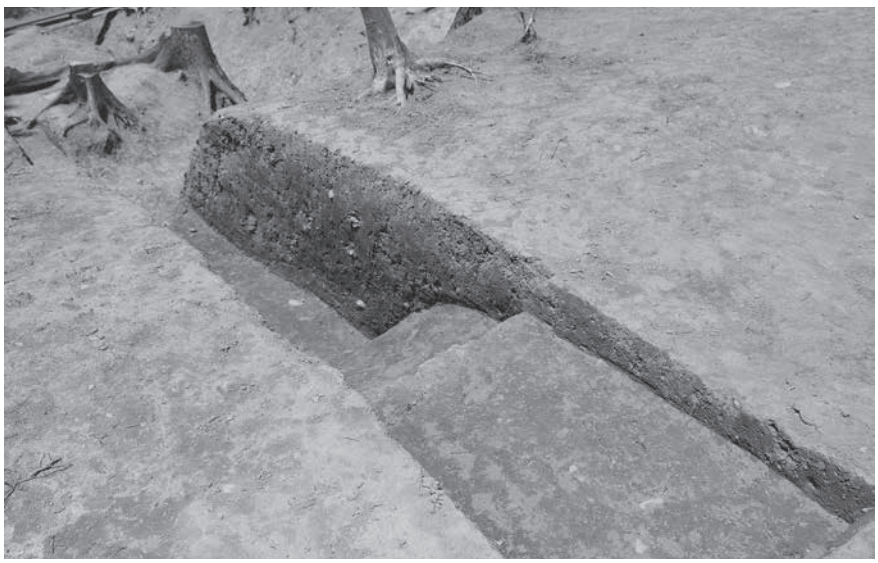
２号堀断面



写真図版15　２号堀

1 号切岸完掘

1 号切岸断面



1 号切岸版築断面

写真図版16　1 号切岸

２号切岸完掘

４号切岸完掘

４号切岸完掘

写真図版17　２・４号切岸

4号切岸断面

4号切岸版築断面

5号切岸完掘

写真図版18　4・5号切岸

６号切岸完掘

１号虎口完掘

１号虎口完掘

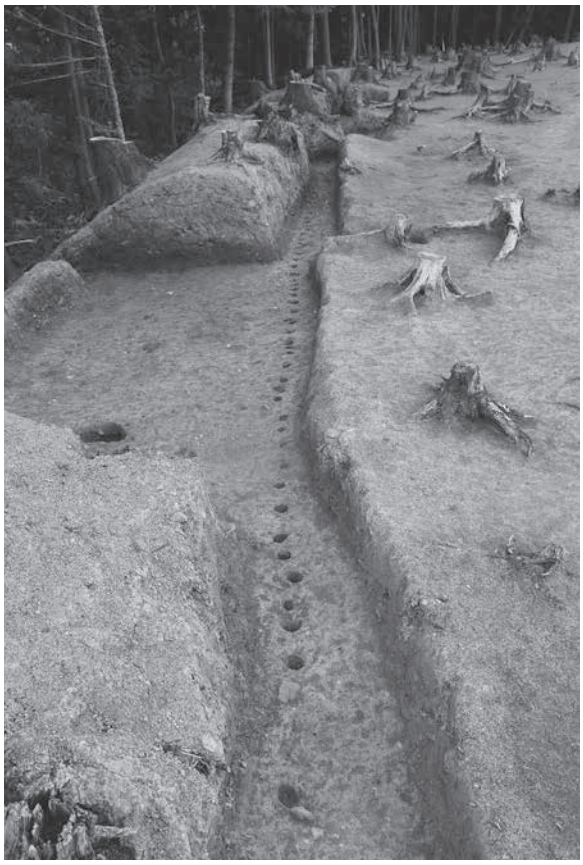
写真図版19　６号切岸・１号虎口

主郭南東隅平場完掘

２号曲輪完掘

作業風景

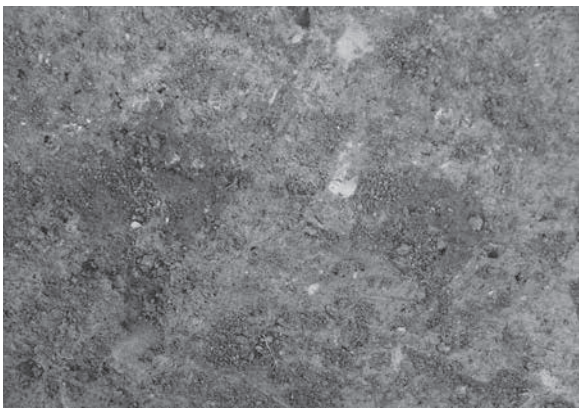
写真図版20　主郭・２号曲輪



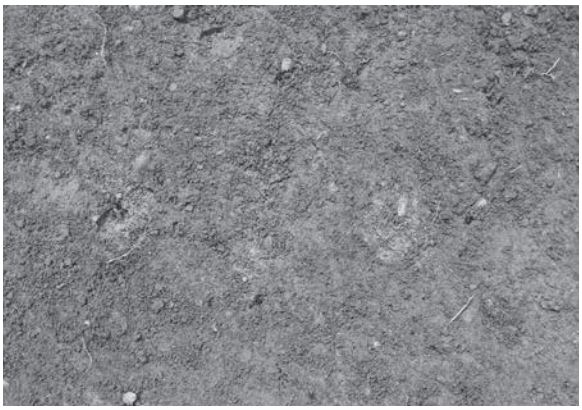
1 号柵列北側完掘

1 号柵列南側完掘

2 号柵列完掘

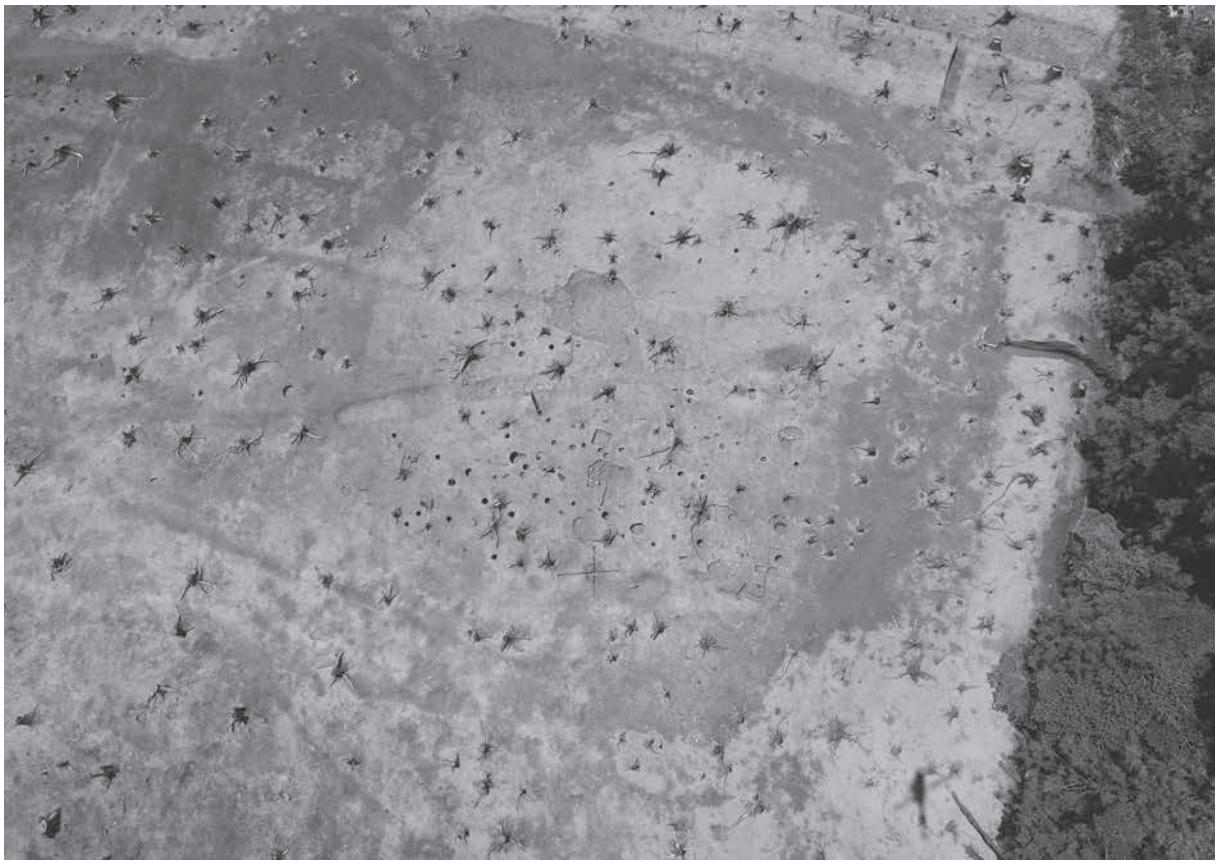


1 号柵列検出

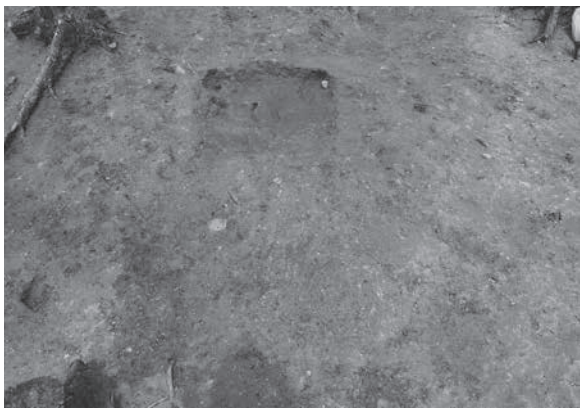


2 号柵列検出

写真図版21　1・2号柵列



1・2号掘立柱建物完掘



1号鍛冶炉検出

1号鍛冶炉断面

2号鍛冶炉完掘

3・4号鍛冶炉完掘

写真図版22　1・2号掘立柱建物、1～4号鍛冶炉

３号鍛冶炉完掘

３号鍛冶炉断面

４号鍛冶炉完掘

５号鍛冶炉完掘

１号性格不明遺構完掘

１号性格不明遺構断面

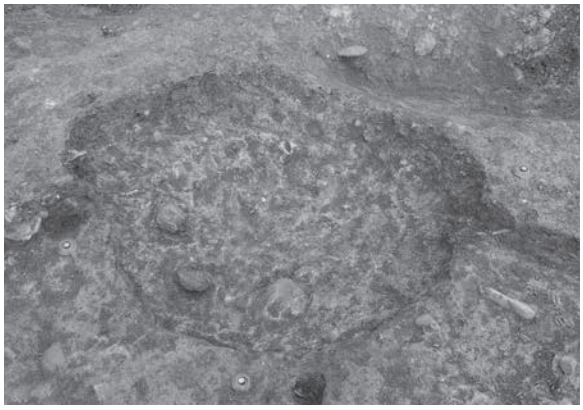
２号土坑完掘

３号土坑完掘

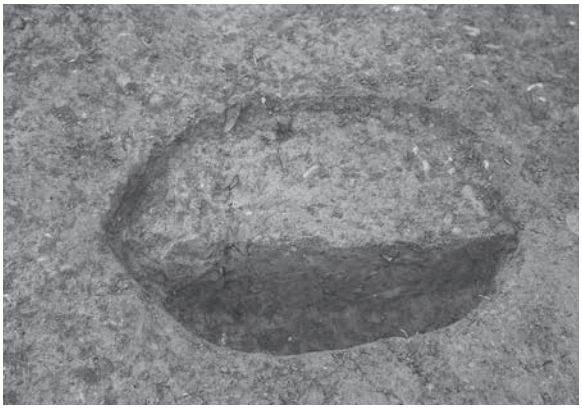
写真図版23　３～５号鍛冶炉、１号性格不明遺構、２・３号土坑

4号土坑完掘

5号土坑完掘



6号土坑完掘



7号土坑完掘

1号溝完掘

1号溝断面

3号溝完掘

3号溝断面

写真図版24　4～7号土坑、1・3号溝

３・４号溝完掘

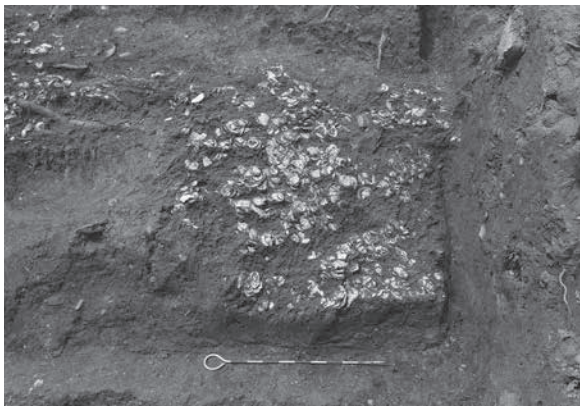
４号溝断面

６号溝完掘

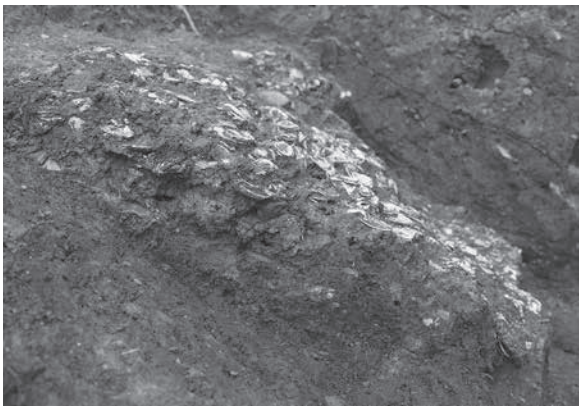
６号溝断面

貝層検出状況

貝層検出状況



貝層検出状況



貝層断面

写真図版25　３～６号溝、貝層

貝層検出状況

遺物出土状況

堀作業風景

切岸作業風景

1号住居状遺構完掘

1号住居状遺構断面

2号住居状遺構完掘

1号土坑完掘

写真図版26　貝層、1・2住居状遺構、1号土坑

主郭

1号堀南辺

1号虎口

1号堀西辺

主郭北側

4号土塁

5号土塁

2号切岸

写真図版27　各遺構の現況（1）

２・３土塁２号堀

１号堀・２号堀

１号曲輪

２号曲輪

主郭北西隅虎口

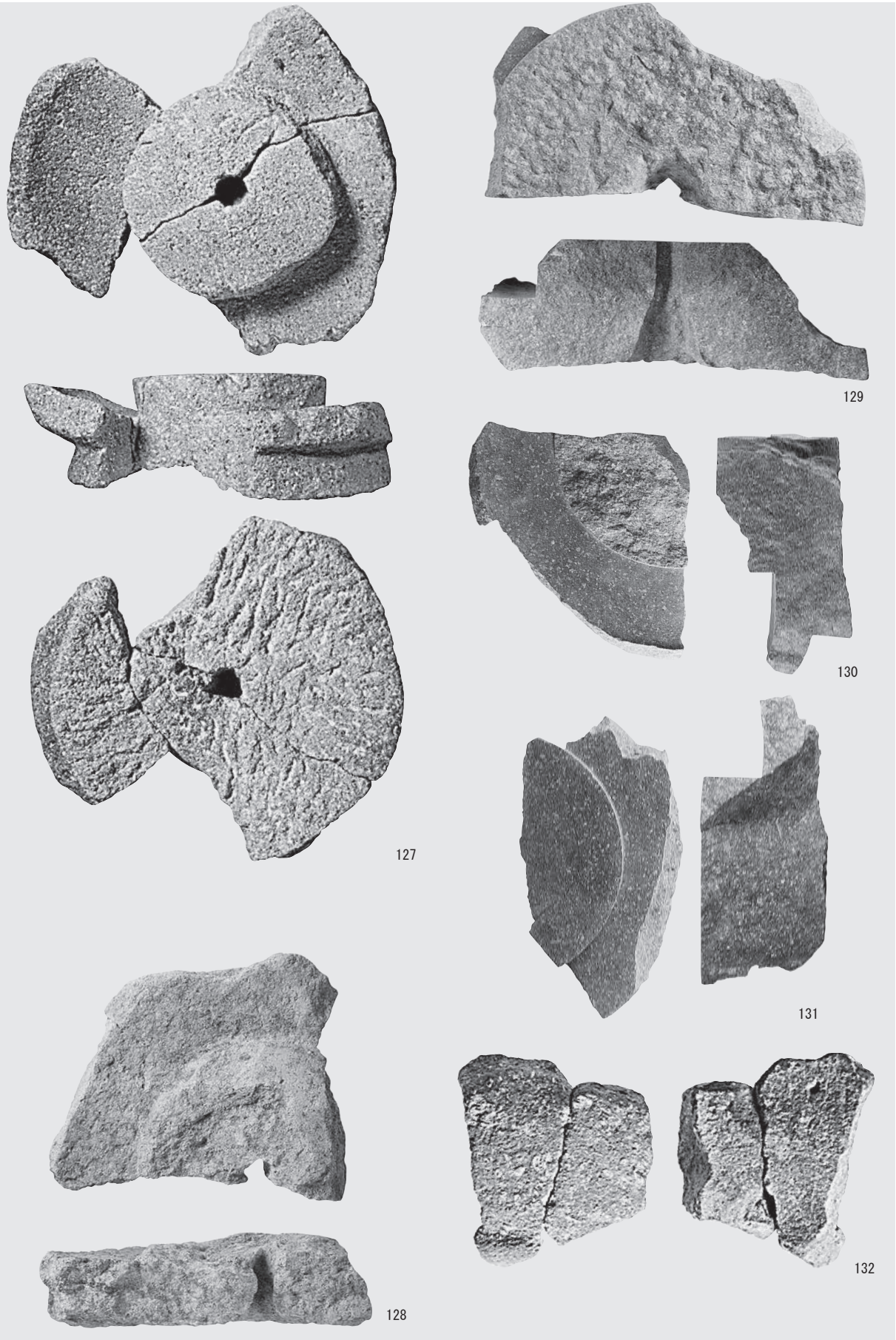
１号堀北区

副郭南側土塁

作業風景

写真図版28　各遺構の現況（2）

写真図版29　出土遺物（1）



写真図版30　出土遺物（2）

写真図版31　出土遺物（3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	はなだてあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	花館跡発掘調査報告書
副書名	土地造成事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第638集
編集者名	村木　敬・鈴木博之
編集機関	（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL　019－638－9001
発行年月日	西暦2015年３月　日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
はなだてあと 花館跡	いわてけんりくぜんたかたし 岩手県陸前高田市 たかたまちあざおおたばんち 高田町字太田34番地 ほか	03208	NF67－0294	39度 1分 13秒	141度 38分 37秒	2012.09.18 ～ 2012.11.29	3,650㎡	土地造成事業
				世界測地系		2013.04.09 ～ 2013.07.11	6,050㎡ 計9,700㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
花館跡	集落 城館	弥生時代 中世	住居状遺構 主郭・副郭 曲輪 土塁 堀 切岸 虎口 柵列 掘立柱建物 鍛冶炉 焼土遺構 溝跡 柱穴	２基 ２カ所 ５基 ２条 ６カ所 １カ所 ２条 ２棟 ５基 ５基 ６条 81個	弥生土器 国産陶器 中国産磁器 近世陶磁器 砥石 茶臼 坩堝 鉄滓 鉄製品	小１箱 96点 19点 111点 ３点 ６点 ３点 ２点 ８点	弥生時代と中世の複合遺跡。

要約

花館跡は丘陵の頭頂部から先端部に構築された15世紀後半から16世紀代の城跡である。城館は遺構の新旧関係と年代測定結果から２時期に分けられる。Ⅰ期は15世紀後葉から16世紀初頭を中心に柵列や溝で囲まれたなかに、鍛冶炉などを形成している。Ⅱ期はそれ以降（16世紀中葉か）に大規模な普請を行い、土塁・堀で囲まれたなかに、掘立柱建物などを形成している。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第638集

花館跡発掘調査報告書

土地造成事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成27年３月11日
発　行　平成27年３月19日

編　集　（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001

発　行　陸前高田市教育委員会
岩手県陸前高田市高田町字鳴石42－５
電話（0192）54－2111
（公財）岩手県文化振興事業団
〒020－0023　岩手県盛岡市内丸13番１号
電話（019）654－2235

印　刷　小松総合印刷株式会社
〒020－0827　岩手県盛岡市鉈屋町15番４号
電話（019）624－1374

Ⓒ（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2015